江南史地叢考

第一輯

江南史地學會

江南史地叢考

第一輯

京364

目次

初期の禪宗……今關天彭……一頁
南京沿革近記……江亢虎……二三
南京書院考……陳秋舫……二三
事變前後南京市容及交通線變更詳記……白乃銑……二九
銀錠橋話往圖記……張次溪……三八
粵音與客音之比較……張資平……三九
「上海史話」書評……沖田一……五六
楊仁山と金陵刻經處……米澤秀夫……五七
登小倉山拜袁隨園先生墓……程淸……六六
中國地理學的現狀……王鍾麒……六七
登飛行機作……程淸……七一

月身菩薩……內山完造……七三
中國文學之南北宗派論……朱右白……七七
江南天文志……森川光郎……八八
流星有引……程渟……一〇三
汪主席六十政紀……張次溪……一〇四
上海史研究餘錄……沖田一……一一四
論隋唐間之楚音……劉詩孫……一二八
閒話甲骨文……鄭嘉茀……一三八
江南史地學會規約……一五五
例會記錄……一五六
江南史地學會會員名簿……一六一

初期の禪宗

今關

岡山大學附屬圖書館藏

今より十數年前、日支學術共通の問題として禪學に對する研究が起り、日本方面では、如上著述が續々として發表せられ、鈴木大拙氏等の活動が目覺しきものであつた。支那側では、從來佛教史の研究は微々として振はなかつたが、胡適氏が支那哲學史の研究から禪學にまで手を延ばし、支那で發達した書籍整理の方法に依つて、日本側の著述を巧みに應用し、その上に最近注目されつゝある敦煌文書などを引用して新味を加へ、達磨、それから出る楞伽宗――卽ち禪の北宗――及び荷澤大師神會を久しく埋まれて居た地下から起して傳記を書き、そして禪の南宗に就いて一新說を立て、非常な活躍振りを示して居た。私は先年北京でその狀況を目擊して興味を覺え、胡氏の論述したものゝ中、幾篇を擇んで飜譯をし、「支那禪學の變遷」と題して刊行したが、今日でも希望者のあるのを見ると、たしかに讀書界の一方面に關係があつたのであらう。私はこの問題も、最近に於ける日支共通の學術問題として忘却せらるゝものではないと思ふのである。そこで胡氏の新研究を主として本稿を起草し、初期禪宗に關し、聊か闡明して見たいと思ふ。

一、達磨

達磨の傳を書いた最も古きものは道宣の「續高僧傳」である。これに依れば後世の達磨傳と全く趣を異にして居る。

「菩提達磨、南天竺波羅門種、神慧疏朗、聞皆曉悟、志存大乘、冥心虛寂、通徹數、定學高之、悲此邊隅、以法相導、初達宋境南越、未又北度、至魏、隨其所止、誨以禪教、於時合國、盛宏講授、乍聞定法、多生譏謗、有道育慧可、此二沙門、年雖在後、而銳志高遠、初逢法將、知道有歸、尋親事之、經四五載、給供諮接、感其精誠、誨以眞法、」

それから所謂る眞法の釋明があり、さて後、

「磨以此法、開化魏土、識眞之士、從奉歸悟、錄其言語、卷流於世、自言年一百五十餘歲、遊化爲務、不測於終、」

「續高僧傳」の著者道宣は、唐初に於ける有名なる學僧で、この書は貞觀十九年までの事が見えて居る。二祖の慧可が歿して間もない人であるから、この書が最も價値ある資料である。

しかるに達磨の傳は、北宋初期に書いた道原の「景德傳燈錄」に詳密なるものが見えた。その大略は、達磨

は南天竺香至王の第三子で、支那へ來たのは、梁武帝の普通八年丁未歳九月二十一日で、廣州刺史蕭昂の上書に依り、武帝は之れを迎へ、十月一日、金陵に著して帝に謁し、碧巖第一則の對話となり、同月十九日、達磨走りて江北に赴き、十一月二十三日、洛陽に達し、嵩山の少林寺に居り、十二月九日、慧可斷臂の事あり、魏の孝明帝、太和十年丙辰十月五日、示寂、同年十二月二十八日、熊耳山定林寺に葬むるとある。この「傳燈錄」が出來て後、五十年程過ぎて、契嵩卽ち明敎大師が現はれて「傳法正宗記」を著はし、達磨の傳に就いて訂正した。一、達磨の來た年—普通八年九月を、普通は八年三月に改元して大通元年となつたから、九月のあるべきがない。二、蕭昂は廣州刺史とはならぬ、その姪の蕭勵の誤まりである。三、九月二十一日に達磨が來て、蕭昂の上奏となり、武帝の使が南海に著し、それから十月一日に達磨の金陵入りとなるとすれば、南海今の廣東と金陵今の南京との間を、僅々十日の間に三度も往復する事となるから、さうは往復する事は出來ぬと斷じ、また達磨が十一月二十三日に洛陽に達したと云ふは誤まり、歿年を太和十九年とするも誤まりだと云つて居る。而して後世何れも「正宗記」に依つて達磨傳を書く事となつて居る。

しかるに最近、敦煌出土の「神會語錄」が發見された。神會とは今まで餘り知られて居らぬものであるが、これもまた最近、支那の胡適氏の研究に依つて明白となつた六祖の大弟子であつて、「語錄」は恐らく「傳燈錄」の出來た時よりも、二百五十年前に出來たものであらう。これに依ると達磨宗旨の六代大德を敍し、第

一代の菩提達磨傳中に、嵩山の少林寺に居たこと、慧可斷臂のこと、毒藥の難に六度遭つたこと、寂後、宋雲が葱嶺で胡僧に逢ひ、それが達磨であらうと疑つて、その墓を發いて見ると、たゞ一隻の履があつたと云ふ話もある。さうして見ると「景德傳燈錄」は、かう云ふものを資料として書いたのに相違ないのである。

達磨の敎義は「續高僧傳」には、斯樣に見える。

「如ㇾ是安ㇾ心、謂二壁觀一也、如ㇾ普發ㇾ行、謂二四法一也、如ㇾ是順ㇾ物、敎二護譏嫌一、如ㇾ是方便、敎令不ㇾ著、然則入ㇾ道多ㇾ途、要唯二種、謂二理行一也、藉ㇾ敎悟ㇾ宗、深信含生、同一眞性、客塵障故、令二捨ㇾ僞歸一ㇾ眞、凝二住壁觀一、無ㇾ自無ㇾ他、凡聖等一、堅住不ㇾ移、不ㇾ隨二他敎一、與ㇾ道冥ㇾ符、寂然無ㇾ爲、名二理入一也、行入四行、萬行同攝、初報怨行者、修ㇾ道苦至、當ㇾ念二往劫一、捨ㇾ本逐ㇾ末、多起二愛憎一、今雖ㇾ無ㇾ犯、是我宿作、甘ㇾ心受ㇾ之、都無二怨訴一、經云、逢ㇾ苦不ㇾ憂、識達故也、此心生時、與ㇾ道無ㇾ違、體ㇾ怨進ㇾ道故也、二隨緣行者、衆生無ㇾ我、苦樂隨ㇾ緣、縱得二榮譽等事一、宿因所ㇾ構、今方得ㇾ之、緣盡還無、何喜之有、得失隨ㇾ緣、心無二增減一、達順風靜、冥二順於法一也、三名二無所求行一、世人長迷、處々貪著、名ㇾ之爲ㇾ求、道士悟ㇾ眞、理與ㇾ俗反、安ㇾ心無ㇾ爲、形隨運轉、三界皆苦、誰而得ㇾ安、經曰、有ㇾ求皆苦、無ㇾ求乃樂也、四名二稱法行一、卽性淨之理也、」

要するに達磨の敎義に二つの重要なるものがある。一つは壁觀で、また理入と云ひ、深く含生同一の眞理

を信じ、しかも客塵の障礙がある故に、僞を捨て眞に歸り、壁觀に凝住し、無自無他、凡聖等一の域に入るのである。二つは四法で、また行入と云ふ。四法とは、一、報怨行で忍苦のこと、二、隨緣行で――苦樂隨緣、得失隨緣――三、無所求行で――有求皆苦、無求卽樂――四、稱法行で――性淨之理であつて、達磨の唱へた「楞伽經」の主意である。

「楞伽經」は、宋の元嘉二十年、求那跋陀羅に依つて譯出された四卷本である。「續高僧傳」に「初達磨禪師、以四卷楞伽授可曰、我觀漢地、惟有此經、仁者依行、自得度世」とあり、達磨が慧可に「楞伽經」を授けて所依經としたのであつて、「楞伽宗」とも呼ばれ、また「南天竺一乘宗」とも呼ばれるやうになつたのも、その爲めである。因に楞伽は錫蘭島で、達磨の將來したものは、印度禪敎の南宗である事も想像せられる。

「續高僧傳」の著者道宣は更に云ふ、

「屬有菩提達磨者、神化居宗、闡導江洛、大乘壁觀、功業最高、在世學流、歸仰如市、」

して見るとかなり信仰せられたので、達磨の「語錄」も出來て、道宣の頃まではあつた如く思はれる。門下には慧可と慧育（續高僧傳の法冲傳）とがあり、育は道を受けて心に行ひ、口にはそれを說かぬと云ふことであるが、慧育と道育とは同一人であらう。「續高僧傳」に依れば、僧副と云ふものも達磨の門下で、南遊して鍾山の定林下寺に止まり、梁武帝に尊信せられ、爲めに開喜寺を創めて優待せられたが、普通五年に示寂し

た。かう云ふ點から見ても、達磨の來たのは梁代でなくして、その前の宋代に在つたことが肯定せられるのである。

二、慧可――楞伽宗

達磨傳法の門人として、特に名高いのは慧可であつて、「續高僧傳」の達磨傳の次にその傳が見えて居る。慧可は俗姓が姬氏、虎牢の人、內外の學に深く、もう成道して居るのであるが、師授を貴ぶ道理に依り、自ら一つの道を主張せなかつた。四十歲前後の時に菩提達磨に逢ひ、一見して之れを師とし、從ひ學ぶこと六年、一心に一乘を精究した。然るに達磨の法は「理事兼融、苦樂無滯、而解非二方便一、惠出二神心一」であるから、慧可もまた「就二境陶研、淨穢埏埴、方知力用堅固、不二爲二緣凌一」と云ふ次第であつた。いくばくもなくして達磨が洛陽附近で示寂し、慧可も埋れたやうになつて居たが、もと〳〵名高い人であつたので、何時しか道俗の推すところとなり、縱橫なる辯舌を揮ひて、心に得たものを說き示したので、「言滿二天下一」と云ふ有樣となつた。東魏の初めなる天平初年に、鄴下で道場を開いて門人を集めた。滯文の徒は何かと非難するものが多かつた。時に道恆禪師と云ふものがあつて、徒弟を千人も持つて居たが、慧可の說敎を惡魔の言語と云ひふらし、徒弟中の能く出來るものを遣つて論難させたが、何れも慧可の說法に感服して、その門人と

なつたので、深くも怨恨の心を抱き、賄賂をその筋に使つて誣告したから、慧可は死ぬほどの難儀を受けたけれど、從容として一向氣に止めぬ樣子であつたが、遂に鄴や衞の地方に流落するに至つた。天保の初年、向居士と云ふものと書信を交換した。慧可は答へて云ふ、

「說二此眞法一皆如レ實。與レ眞幽理竟不レ殊。本迷摩尼謂二瓦礫一。豁然自覺是眞珠。無明智慧等無レ異。當レ知萬法卽皆如。愍此二見之徒輩。伸レ詞措レ筆作二斯書一。觀レ身與レ佛不二差別一。何須更覓二彼無餘一。」

この七言十句は、誠に寥々たるものであるが、慧可の心印を傳ふると共に、その文字の如何なるかを傳へるものであるから、特に我等の注意を引く。

この向居士は「幽二遁林野一、木食」とあり、外に化公、廖公、和禪師等があつて、何れも向居士のやうな行ひをして信仰生活をして居たものと見える。また林法師と云ふものがあつて、鄴下に於て著名であつたが、周が佛法を廢毀したとき、慧可は同學の因緣に依つて、共に經藏を守護した事もあつた。慧可は曾て盜賊の爲めに臂を斫られたが、法に依つて一心を治め、そして痛苦を覺えぬので、斫られた處を火にて燒きつけ、血が止まつてから帛にて包み、乞食に出かけること元の如く、負傷を人に告げなかつたが、林法師もまた盜賊の爲めに臂を斫られ、その痛みに堪え難く徹夜泣きさけんで居た。慧可はその爲めに創處を包んでやるのみならず、食物の心配もしてやつた。しかるに林法師は慧可が手の不便なるに氣をいらち、自分は臂がないの

だと云つたので、慧可もまた自分も臂がないのだと云ひ、始めてその所由を口外じたと云ふ事である。

慧可が鄴下で開敎したのは、天平初年で、恐らく五十歳前後であらう。その歿年は、「景德錄」には「時年一百七歳、卽隋開皇十三年癸丑歳二月十六日也」とあるが、無論信用が出來ぬ。大體七十歳前後で示寂したとすれば、東魏の亡びた頃から、梁の亡びた前後までゝあらう。さうすると唐初までは大約六十年程となり「續高僧傳」の著者道宣との隔たりも、餘り多くはないと思はれるが、道宣は別に「可公別傳」と云ふものがあると云ふ。

慧可は達磨から「楞伽經」を授けられ、それに玄理を附けて、楞伽宗とも云ふべきものを建立じた。門下はかなり多かつた。粲禪師、惠禪師、盛禪師、那老師、端禪師、長藏師、眞法師、玉法師等は、口に玄理を說いても、文字では現はさぬと云はれて居るが、また文字に現はしたものには、善師、豐禪師、明禪師、胡禪師などがあつた。可門の中に最も出色と見られるのは那禪師で、それが一に那老師と尊稱されるのに徵しても明かである。

那禪師は俗姓を馬と云ひ、書生で「禮」や「易」を講じ、多數の門人もあつたが、相州で慧可の說法を聞き、學士十人と共に出家入道して後、「手不ㇾ執二筆及俗書一」と見え、敎理は口で說くも、一切文字で書き現はさぬのである。而して一衣一鉢、一坐一食の生活を續けた。これは乞食生活である。門下から慧滿が出て、ま

た實禪師、惠禪師、曠禪師、宏智師などがある。

慧滿は滎陽の人、俗姓は張、もと相州の隆化寺に住して居たが、那禪師の說法を聞いて其の道を受け、專ら無著を務め、一衣一食、たゞ二本の針を持つて居て、ぼろ綴りを業とした。自ら一生、畏怖がないと云ひ身に蚤、虱が湧かず、眠つても夢を見ず、一つ處に二度と宿らず、寺に行くと柴を斫つたり、履を造つたりして、常に乞食を行とした。說法ごとに曰く、諸佛は心を說き、心相は是れ虛妄の法なるを知らせた。今、重ねて心相を加ふるは、深く佛意に違ふのみならず、また論議を增して、殊に大理に乖くと。常に四卷楞伽を持ちて、心要となし、隨說隨行、佛意に違はぬ事に努めた。ある夜、洛州會善寺附近なる墓に寢た。すると雪が降つて三尺ほども積つた。翌くる朝、寺へ行くと、寺の曇曠法師は、何處から來たかと怪んだが、官の目を逃れて隱れて居る度牒のない僧侶の爲めに、慧滿は村里を乞食し、隨ひて施せば隨ひて無くなつて、些しの間もない程の忙しさであつた。泊めたり齋を施したいと云つて來るものがあると、「天下無人、方受爾請乎、」と答へたと傳へられて居る。この言葉は、いかにも慈悲の深い言葉である。唐の貞觀年中、示寂七十ばかりであつた。この人は道宣より二三十歲ほど年長だと思はれる。

道宣と時代を同じうして、漸く十歲ほど年長と思はれる法冲がある。法冲の傳は「續高僧傳」にあるが、隴西の人で、若き時に房玄齡と相好かつた。母の喪に遭ひて出家し、安州なる曇法師の下で、「大品」「三論」「

楞伽經」を聞いた。貞觀初年に、私かに出家するものには、極刑を加へる事となつたが、法冲は死を誓ひて剃髮した。後に幾度か度牒を受くる機會があつたけれど、人に讓つて受けず、六十歳にならんとする頃、漸く度牒を得たが、「而栖二泉石一、撫二接遺逸一爲レ心」と見えるから、それ等の事は念頭になかつたのである。法冲が「楞伽經」に就いて苦心した有樣は、

「冲以二楞伽奥典沈日久一、所レ在追訪、無レ憚二夷險一、會可師後裔、盛習二此經一、卽依レ師學、屢擊二大節一、便捨二徒衆一、任レ冲轉敎、卽相續講卅餘遍、又遇二可師親傳授者一、依二南天竺一一乘宗一講レ之、又得二百遍一……師學者苦請レ出レ義、乃告曰、義者道理也、言說已麤、況舒在レ紙、麤中之麤矣、事不レ獲レ已、作二疏五卷一、題爲二私記一、今盛行レ之、」その示寂は麟德年間、七十九歳であつた。

「楞伽經」を行持するものは、多くは苦行をして、人に知られぬものであるから、道宣も「人世非レ遠、碑記罕レ聞、微言不レ傳、淸德誰序、深爲レ痛矣、」と云ひ、遺憾の意を表して居るが、しかも漸次講學の風氣に捲き込まれて、註疏を書くものが現はれて、豐禪師、明禪師、胡禪師の外、遠く慧可の風を受け、しかも文字に現はしたものには、大聰師、道蔭師、岸法師、寵法師、大明師等があり、法冲もその一人である。また慧可から出でぬものには、遷法師、尙德律師等があつて、何れも註疏を書いて居る。これ等は師業を重んじて嗣ぐところを明かにし、學ぶところは歷然として典據ありと云はれ、明禪師の後を承けた伽法師、寶瑜師、

寶迎師、道瑩師等が「並次第傳燈、于今揚化、」道宣の時代までに至つたのである。

慧可の後、三祖僧璨が慧可傳に見えた粲禪師なること明かであるが、道宣は其の傳を書いて居らぬ。「景德錄」に載せられた僧璨傳は、果して信じ得るものかどうか。其の著はしたものと云はれる「信心銘」も果して如何なるものであらう。しかるに四祖道信は、道宣はその傳を書いたが、僧璨から嗣法したと見えず、皖公山二僧の中の一人が僧璨でないとすると、嗣法の事が明白を缺いて來る。

道信は、よほどの人物であつたと見え、所謂る東山法門を押し立てた。東山とは江西蘄州雙峯の東山寺である。道宣傳に依れば、道信の俗姓は司馬で、何處の人たるを知らぬが、幼年、一師に從ひ、また舒州皖公山に入つて禪を習ひ、後、吉州寺の僧となつた。ある時、城が賊に圍まれ、水に乏しくて城中の人は難儀をしたが、道信が城に入るや、井戸の水が急に湧き出した。道信は城中の人人に諭して、般若經を念せしめたとあるが、さうすると、此の頃から楞伽宗にも多少の變化が起つたものと見える。道信はそれから衡山に行かうとして江州を過ぎた時、道俗の請に依つて、廬山の大林寺に留まること十年、更に蘄州道信の請に依つて、黄梅縣の衆造寺に入り、雙峯の好風景を愛して終焉の志があり、在山三十年、諸州の學道が集まつた。永徽二年、示寂、年七十二。門下に五祖弘忍と法融とがある。法融は牛頭禪の初祖である。二祖は智巖、三祖は惠方、四祖は法持、五祖は智威、六祖は慧忠と云ふ。慧忠は唐の大歴中に示寂し、その後、この禪統は

絶えた。

五祖弘忍は、幼年の時、道信が一見して法器となし、二十年後に、佛事に功があるとて貰ひ受け、後に法衣を密付した事が「宋高僧傳」に見えて居る。唐の高宗上元二年に示寂、世壽七十四歳、門下に神秀と慧能があつて、宗旨が南北に分れた。

北宗

一、神秀

神秀、俗姓は李、陣留の人、もと書生であつたが、五十歳前後の時、蘄州の忍禪師の禪風を慕ひ、服勤六年、晝夜を棄てぬ有様であつた。儀鳳年中、荆州玉泉寺の僧となり、玉泉寺に程近き處に度門蘭若を設け、これを楞伽孤峯と云ひ、學徒を接見し、長安から成都にかけ、來り就くものが多く、法譽が盛んとなつた。この蘭若は後、勅に依つて寺を建てた。則天武后の晩年に當る久視年間に召されて洛陽に來て、內道場に入つた。張說の傳ふるところに依れば「趺坐觀ㇾ君、肩輿上ㇾ殿、屈二萬乘一而稽首、洒二九重一而宴居、傳二聖道一者不二北面一、有二盛德一者無二臣禮一、遂推爲二兩京法主、三帝國師一」とあるが、兩京法主とは、長安、洛陽の兩京

三帝國師とは、則天武氏、中宗、睿宗を云ふのである。「每帝王分座、后妃臨席、鴻鷺四匝、龍象三繞」、その信仰された有樣が想見せられる。神龍二年、示寂、僧臘は八十を數へ、年は百歲を超えて居た。謚して大通禪師と云ひ、碑文は當時有名の文豪たる張說が書いた。

張說は神秀の宗要を概括して曰く、

「專念以息想、極力以攝心、其入也、品均二凡聖一、其到也、行無二前後一、趣定之前、萬緣盡閉、發慧之後、一切皆如、持奉二楞伽一、遞爲二心靈一」

著はすところ「五方便」が敦煌から出たと云ふことであるが、一閲に緣がない。またその遺囑に「屈、曲、直」があり、楞伽宗の大德たることが分る。神秀は禪行高きも、帝王の信仰を得たので、內道場に入り、徒を聚めて說法をせぬ。門下に普寂、義福、巨方、香育、降魔藏師等がある。「宋高僧傳」に云ふ、神秀は同門慧能の事を武后に奏して召させ、自分もまた尺牘を作つて召に應せんことを勸めたが、慧能は容貌が極めて揚らぬので、以爲へらく、北土の人、自分の斯くも短陋なるを見て、或は法を重んぜぬことがあらうも知れぬ。且つ先師は自分に向つて、お前は嶺南に緣があると云はれたので、その言に乖く譯に行かぬとて、遂に詔を辭して、一生、大庾嶺を超えなつかつたと。

「舊唐書」方伎傳に神秀の傳があるが、これは「宋高僧傳」から取つたものである。門下の普寂、義福も同じ

「宋傳」から取つて傳末に附けてある。

二、義福

義福は上黨銅鞮の人、俗姓は姜氏、母の遺訓に依つて出家し、汝南の靈泉寺にて法華、維摩等の經を讀み洛陽の福先寺にて、朗法師に就いて、廣く大乘經論を習ひ、荆州の玉泉寺なる神秀の法名を聞いてこれに就き、刻苦すること十餘年、神秀の召されて洛陽に至り、天宮寺にて疾を示すや、義福は左右に侍して、法の密傳を受けた。神龍年間、道俗に迎へられて長安に入り、化感寺に居ること十七八年、法譽が日に盛んとなり、道俗の請に依つて慈恩寺に住した。開元十三年、勑に從ひて洛陽に往き、蒲虢二州を過ぐるや「刺史及官吏士女、皆齋二旛花一迎レ之、所在途路充塞、拜禮紛々、瞻望無レ厭、」と「宋高僧傳」に見えて居る。この時は洛陽の福先寺に居り、一旦、長安に歸つたが、同二十一年、再び勑に依つて洛陽に入り、南興龍寺に止まり、二十四年、示寂、世壽七十九、大智禪師と謚す。碑文は嚴挺之、書は史惟則で有名なるものである。

三、普寂

普寂は長樂信都の人、俗姓は馮氏、始め經書を學んだが、大梁の壁上人に從ひて、法華、唯識、起信等の

經論を學び、南泉の景和尚に律を習ひ、玉泉寺の神秀に學ぶこと五年、

「約令看思益、次楞伽、而因告曰、此兩部經、禪學所宗要者、且道尚祕密、不應眩曜」

更らに隨侍すること二年、神秀から非常に重んぜられた。示寂後、武平一をして勅旨を以て、普寂をしてその法衆を統領せしめた。開元十三年、勅を奉じて長安に入り、玄宗の洛陽に幸するや、義福は駕に從ひ、普寂は興唐寺に止まつて教化に從事した。「宋高僧傳」に「神秀禪門之傑、雖有禪行、得帝王重之、無以加者、而未嘗聚徒開法也、泊乎普寂、始於都城傳教、二十餘載、人皆仰之、」と見え、李邕は「聞者斯來、得者斯止、自南自北、若天若人、」と書いた。またその論難攻擊して相手を折伏せしむる有樣を敍して、「則有學富蓬山、經通貝葉、百家奥旨、三藏眞言、目如曜星、舌如飛電、莫不杜口折角、失容革心、」と云つて居る。開元二十七年、示寂、世壽八十九、大照禪師と謚す。大照禪師塔銘は李邕の筆である。

開元二十七年七月、彼は門人に敎へて曰く、

「吾受託先師、傳茲密印、遠自達摩菩薩、導於可、可進於璨、璨鍾於信、信傳於忍、忍授於大通、大通貽吾、今七葉矣、尸波羅密、是汝之師、奢摩他門、是汝依處、當眞說實行、自證潛通、不染爲解脫之因、無取爲涅槃之會、」

この中に見える尸波羅密とは、それは尸波羅密であらう。すると六波羅密の一つで、戒と譯すべきもの。

奢摩他は卽ち止で、無念無想を意味すると云へば、普寂の敎義は能く明かで、それに依つて代表せられた北宗が、いかに南宗の禪風に相違して居たかが分るのである。また神秀が普寂に敎へた中に、「思益」「楞伽」の兩經は、禪學の宗要だと云つた、「思益經」は鳩摩羅什の譯した「思益梵天所問經」四卷であつて、この經が禪家に用ひられた事は、餘り知られて居らぬが、神秀の言葉がさうである以上、最も尊嚴せられたものたることは確かである。達摩以來尊ばれた「楞伽經」は、宋代に至つて、殆んど湮滅になん〳〵とした。この「思益經」は北宗の衰亡と共に全く聞えぬやうになつたのも、蓋し無理ではないのである。

義福は東山の七代と云ひ、普寂は禪門の七葉と云ふ。しからば神秀はその門下に密傳でもあつたのであるか。若くは世系を云へば、たしかに禪門の七代であるから、義福も普寂も、その意味で云つて居るのであるまいか。卽ち神秀は多く門下を取り立て、付するところの法も、一人を指して居らぬので、人々何れも傳法と稱して居たのではなからうか。

門下には惠空、勝緣、靈著、眞亮、思公、曇眞、甄公、禪會等がある。我國に律を傳へに來た道璿も、またその門下であつて、これが我國に禪のある最初となる。

同しく門下に、豫言で有名なる一行がある。普寂は一行の寂を前示したとの事で、これもまた有名な話である。一行は歷象、陰陽、五行の學に精しく、「開元大衍歷經」を著はし、周易大衍の數、及び楊雄の「太玄

經」を研究した。

北宗は、南宗の神會に依つて攻擊せられ、頓に衰亡の運となつた。

南宗

一、慧能

南宗は五祖弘忍の門下慧能から始まる。慧能の事蹟は、王維や柳宗元の碑銘などを本とした「宋高僧傳」に見えたものと、慧能の語錄と稱せられる「壇經」から來て、「傳燈錄」や、「正宗記」と展開したるものである。「壇經」は慧能の門下神會が手を入れ、或は假託の書とも見られるもの。王維の碑銘も、神會が賴んで書かせたのであるから、その出るところは、同じく神會からであつて、大體の「壇經」のそれと同じいのであるが、かの有名なる「菩提本非ᵛ樹。明鏡亦無ᵛ臺。」の偈も見えず、壇經に比して、簡素で宗教的なものである。慧能はもと北支の盧氏であるが、父が南支(廣東)に流されて、貞觀十二年、そこで生れ、薪を負ふを業として辛くも生活して居り、勿論文字も知らぬものであつたが、人の「金剛經」を誦するを聞き、五祖弘忍がこの法によつて、見性成佛を敎へて居るのを知つて尋ねて行かうとし、韶陽から樂昌に行き、弘忍の許へ行つた時

は、已に三十三四歳ともなつたのであらう。慧能の容貌は、よほど振はなかつたと見えて、弘忍は、汝、何處から來たかと問ふと、嶺南から來て參禮し、佛とならんことを求むと答へた。當時の嶺南人は所謂る獠獠で、殆んど人類の扱をせられて居らぬので、弘忍は、嶺南人に佛性がないと云つた。すると慧能は、人には南北あれども、佛性には南北なしと云ふ。弘忍、しからば汝には何の功德があるぞと詰ると、願はくば石を抱いて米を搗き、それで衆に供せんと答へ、かくて弘忍の許に居り、同門の神秀の作つた偈に和して、その悟道の淺深が明かとなつたので、弘忍は法衣を傳へて、廣東に歸らせた。後、慧能は印宗法師に依つて發見せられ、始めて推髻を削り落して僧侶の形となり、いくばくならずして雙峯の曹侯溪で弟子を取り立て、道譽が遠く長安の都に聞えたので、則天武后及び中宗は、同門なる神秀の奏舉に依つて、勅書を下して招いたが、遂に出でず、先天八年、示寂、年七十六、後に大鑒禪師と追諡せられた。門下には神會があり、また行思や懷讓が出た。

北宗の「楞伽經」を主持するのに對して、南宗は「金剛經」を主持した。慧可の言に、「楞伽經」は、四世の後に名相を變成せんも、一に何ぞ悲しむべけんと云つたとあるのは、五祖弘忍が「金剛經」を主持するのを豫言したと思れるが、しかも四祖道信も、已に「金剛經」を讀ませて居るのである。慧能にその解義（また口訣とも云ふ）があるが、餘り甘く出來て、古味盎然たるものがない。或人は、天台の羅適の僞作だと云ふが、さ

うであらう。文字を知らぬ人の作としては、到底受け取れぬ。

二、神會

神會は襄陽の學生であるが、出家して、慧能の道譽を聞いて廣東に赴き、その會下に參した。「壇經」には、十三歳の時、慧能に參じたとあるが、王維の六祖碑銘に見える「遇二師於晩景一、聞二道於中年一」とある如く、慧能の晩年、神會の中年とするのが事實に近い。曹溪に居ること數年、開元八年、南陽の龍興寺に住し、洛陽で禪法を行ひ、名聲が揚つて來た。これより以前、長安、洛陽の間では、北宗の普寂(神秀門)が大師として尊崇せられて居たが、爾後その漸修が衰へ、神會の頓修が盛んとなり、こゝに南北の二宗が始めて分れた。「宋高僧傳」には、「普寂之門、盈而後虛、」と書いて居る。天寶中、盧弈と云ふものが普寂におもねり、神會が門徒を多數集めて居るのは、どうも怪しいと誣奏したのに依つて、荆州なる開元寺に徙された。安祿山の大亂の時、國庫は全く枯渇した。しかるに裴冕と云ふ人が、一つの經濟方法を案出し、地方に戒壇を設けて、僧徒を度することゝし、錢百緡出すと、その請ひに應じた。これは和尚となるに就て身分證書を買はせることであるが、この種類の公債は、賣るに困難なものであるから、宣傳の上手なものに賣らせる方法でなくてはならぬ。かう云ふ仕事は、民衆の信仰を得て居る神會に最も適當なものであるので、神會は自ら進んでこ

れを擔當し、棚を架け壇を設け、和尚となる宣傳を行ひ、これで大いに國庫の足しとなつた。郭子儀が長安や洛陽を恢復したのも、その軍費調達の力が頗るあつたと云はれて居る。肅宗は功を認めて內道場に入れ、勅して禪寺を荷澤寺に作らせた。乾元六年、示寂、九十三歳、後に眞宗大師と謚せられた。

胡氏は「荷澤大師神會傳」を著し、巴黎所藏敦煌文書に依つて、神會が滑臺の大雲寺で、南宗の宗旨を定めた事を記して云ふ、

「開元二十二年正月十五日、神會は滑臺大雲寺に於て、菩提達磨の南宗歷史を演說し、大膽に一つの修改した傳法世系を提出して曰く、達磨は一領の袈裟を傳へて法信とし、慧可に授與し、慧可は僧璨、道信、弘忍、慧能に傳へ、六代相承け、連綿絕えずと。また云ふ、神會が今、無遮大會を設けるのは、功德の爲でなく、天下の道を學ぶものゝ爲めに宗旨を定め、天下の道を學ぶものゝ爲めに是非を辨ずるのだと。また云ふ神秀禪師存生の日、第六代傳法の袈裟が、韶州にあるを云ひ、口づから第六代と云はなかつたが、今、普寂禪師は、自ら第七代と稱し、みだりに禪師を立て、第六代として居るのは許すことが出來ぬと。また云ふ、久視年中、則天が神秀を召して入內する時、神秀は出發に臨み、道俗に對して云ふやう、韶州に大善知識がある、もと東山忍法師の付屬するところであつて、佛法は盡く彼等にあると。これは是れ大膽なる挑戰である當時、慧能、神秀は、寂後已に久しく、死人に證據がないので、神會の云ふことは、人々可否すべきやうも

ない。但し神會は一歩を進めて云ふ、傳法袈裟は慧能の處にあつたが、普寂の同學廣濟なるもの、景龍三年十一月、韶州に行つて偸んだと。この時には普寂はまだ生存したが、これ等の事は、これまた人の可否する事の出來ぬもので、たゞ神會の自由に揑造するまゝである。

當時、座下に崇遠法師と云ふものがあつて、質問して曰く、普寂禪師、名字、國を掩ひ、天下の知るところ。かく排斥するは、豈に仇敵たるにあらずやと。神會は斷乎として云ふ、我れ自ら是非を撰んで宗旨を定む。我、今、大乘を弘め、正法を立て、一切衆に知聞せしめやうと思つて居る。豈に身命を惜まんやと。かやうな氣概、かやうな手段は、すべて一時の人心を震動し得る。故に滑臺の大會は、たしかに先聲、人を奪ふものがあつて、大勝となつた。先聲、人を奪ふのは、先づ已れ攻勢を取り、人をして守勢を取らざるを得ざらしむ。神會はこの時、もう六十七歳の老師である。我等は眉髮皓然たる老和尚が、この莊嚴道場上に在つて師子座に登り、大聲疾呼、當時いかめしい勢力ある普寂大師を攻擊し、直ちに神秀門下を指して傍門とした大膽なる挑戰は、當然滿座の人をして信を生ぜしめたであらうと想像する。また少數懷疑の人あるも、神秀一門の正統に就いて信心が動いて來たと思はれる。この故に滑臺の會は北宗消滅の先聲で、また是れ支那佛敎史上の一大革命である。

かくて胡氏は、神會が頓悟を提倡して、達磨から神秀に至る楞伽宗を傾覆し、「楞伽經」を「金剛經」に代へ

た。これはその實、般若宗が楞伽宗を革命したのであると、極めて自信に富んだ筆致で斷言して居る。

神會の宗教革命は見事に成功したが、門下に出色の弟子がなかつた――「宋高僧傳」には、その門下として惟忠、志滿、光瑤、靈坦を擧げ、また有名なる宗密もあるが、元來が華嚴宗の人である――爲めに時代を經るにつれて、漸次世間から忘れられ、全く地下に沒却して仕舞つたのである。しかるに南宗は、慧能の門下に懷讓や行思があつて、一は馬祖、懷海を經て、臨濟宗の始祖たる義玄と、潙仰宗の始祖たる靈祐、慧寂を打出し、更に法眼、雲門の宗祖を打出し、一は希遷等を經て、曹洞宗の始祖を打出し、その子孫は、支那、日本を通じ、連綿として現在に及んで居る。

南京沿革近記

江亢虎

中日文化人合組江南史地學會於南京，余忝被推爲會長，名義而已。實則一切由田中忠夫君熱心主持，按月召集，講學座談，游讌甚盛。茲復發起特刊，蒐集藁件，凡有關江南史地資料者，悉以中日文字撰述出版。余自去年秋間，捐廉倡立考文會課，月試一二題，甄選數拾卷，給獎五拾元至五元不等。內有南京書院考及市容交通綫變遷記兩題，足資首都沿革之考證。輒錄其獲雋之作各一篇，畀田中君，迻載宣傳，是亦江南史地之鱗爪耳。

南京書院考(科舉時代南京書院之制度及沿革)

陳秋舫

一 引言

我國之有書院，肇始於唐成立於宋，唐玄宗所立麗正集賢兩院，乃建於朝省，職在修書，厥制有異。宋應天書院與睢陽、石鼓、嶽麓、白鹿洞四院，始聚徒講學或肄業焉，規模於以大備。自是以後，元明與清，書院恆

代學校而興，尤足補學校之不及。蓋自唐代倡行科舉以來，其養士造士者，多利賴於書院。惟在清代，書院稱盛，省府州縣，莫不有書院之設置，官師督飭，咸鄭重其事，茲以屬地主義，專統南京書院，考其制度及沿革，藉資參證焉。

二　南京書院之創設

南京鍾山，尊經、文正、惜陰、四大書院，其創立最早者，爲鍾、尊兩院，次則惜陰，再次則文正。以原有各書院，至清嘉慶間多廢，道光九年，江甯藩司賀公長齡，校士心殷，乃籌款修建鍾山書院，院址舊在府治北錢廠橋，爰增建東西學舍各五幢，計五十間，連牆別院，聲宇重光。尊經原無院舍，時以無地建屋，設院於縣學尊經閣。賀公自是按時課士，兼規定名額，南京書院因以復興。迨道光十八年，兩江總督陶文毅公澍又捐廉創建惜陰書院，於龍蟠里盔山圍。後光緒初，曾湘鄉門下許方伯仙屏，以紀念湘鄉，乃建立文正書院於南城八府塘之側，此四大書院創設之先後也。洪楊亂後，鍾山院址，一遷於城東漕坊苑，再遷於門帘橋，其餘各院皆仍舊。

此外尚有童試之小書院，則爲鳳池與奎光。兩院創設均早，鳳池院址，原在縣學忠義祠，後移於舊王府東北隅繡春園，嗣燬於兵；同治七年，涂太守宗瀛，購武定橋東新廊民屋改建。奎光院址，舊在雞鳴寺側，亦經亂

燬，後以困於經濟，卒未建築院舍，曾一度移於城西磨盤街梅先生葵家園內。其他有類似小書院者，爲剪子巷之崇義堂，華藏庵之甘棠文舍，銅銀巷口之石城書院，羅寺灣之杏林書舍，崇義堂爲淮商設立，堂生均住堂，定制完善。餘則紳辦或官辦，均以造就文童者。又光緒末葉，由元甯兩縣知事創四仲書院，每年逢四仲月考試生童，兩縣輪流值課，捐廉給獎，名義上無分大小書院也，三數年後遂廢。

三　南京書院制度之剖析

攷諸志乘，南京鍾山等四大書院，鳳池等兩小書院，學子並不住院，掌教亦不講學、僅定期考試而已。其制度試分述於左：

組織：向章各書院設有監院，後廢。僅鍾尊兩院各置山長一人掌教，惜陰，文正，均不設山長，由鍾尊兩山長兼閱課藝。鍾山山長束脩，年八百兩；尊經年五百兩。山長位尊，雖制台亦以師禮事之，束脩外兼致送節敬，並供餐膳。鳳池亦設山長，束脩年三百兩，時兼長奎光。

經費：洪楊以前，南京各大書院經費，有後湖租，有典息，有淮鹽引捐，陶文毅曾捐廉一萬兩，發典生息，爲惜陰書院基金，迺經亂皆廢；嗣南京克復，曾文正公開府兩江，它務未遑，先恢復書院，所需經費，悉取之善後局。迨至光緒初孫方伯衣言以局款支絀，難以持久，遂由官紳會商，就儀棧北鹽餘利，暨兩淮運庫善後項

下銀，歲得九千兩，詳准督署立案。後又由沈公飭海分司按季撥淮北經費項下銀五百兩。此爲鍾尊惜陰三書院額定經費。其鳳池小書院，歲由淮南解銀一千兩爲經常費。至文正與奎光，取額較少，需費無多，另籌款項，不在此數。凡書院各款，出入均由府署收支。

課藝：舊時鍾、尊、文正、鳳池等、均試制藝與試帖詩。惜陰與奎光，考試詩賦及經史學。變法後，曾一度改試四書義經義與策論。

試期：鍾尊兩院，每月初二、十六、兩日，同時考試，鳳池亦於此兩日隨試。初二爲官課，從二月份起，大書院由總督藩司糧道巡道知府輪課。十六爲師課，由山長主試。每月初八日考文正、二十三日考惜陰奎光。此三院祇考師課，無官課。又各書院每年正月均停考，十二月停師課，逢閏加官師課各一。每年二月第一次考試爲甄別，不錄取者，一年不得與考。凡考試時，應考者均在場外作成，限本日繳卷。官課有時猶扃門考試。

名額：鍾山額定超等五十名，特等七十名，壹等無定額。尊經超等三十名，特等七十名；惜陰超等二十四名，特等四十名；壹等均無定額。原定名額如此，後尊經惜陰所取超等數間有增加。鳳池上取二十名，中取三十名，正取無定額。又鍾山尊經均加外旗生額，鍾山五名，尊經三名，鍾山又准外籍生應試，尊經則否，厥後此例亦破，凡外籍生兩院均可投考。

膏獎：各大書院，應考之舉貢生監，名列超特等，所得之銀兩，謂之膏火；蓋以供考讀時焚膏繼晷之用耳。

鍾山膏火銀，超等每名二兩六錢；特等每名一兩三錢。尊經超等少四錢；特等少二錢。惟師課膏火均減半。官課取列超等前十名者，主課衙門並加給獎金，多寡視次第高下與主課者之等級而定，最多每名不過二三兩。鳳池小書院，上中取共五十名，每月膏火僅共以二十八兩照額分給耳。文正惜陰超特等名額既尠，膏火銀亦有限，均當鍾尊半數且不足。

南京書院制度，大略如是。嘗考鍾尊兩院山長，先後蒞院掌教，最著者有翟伯垣、盧雲谷、梁節庵、薛慰農、蒯禮卿、張次山、褚成博諸公，均名重一時。鳳池山長，有楊長年、梅葵、陳作霖、秦際唐、鄉先輩，亦元寧兩縣知名之士。當時應試員生，雖不住院，嘗摳衣請業，執經問難，均深受訓誨，指示進修途徑，裨益恆多；故南京之文風稱盛，科舉時代元甯兩縣人士，掇高科者獨多於他邑，是不得不歸重於賢明長官提倡誘掖之功焉！

四　南京書院之沿革

南京書院之創設始末，已備述於前。惟憶四大書院與兩小書院，最盛時期，則在清同治末葉與光緒中葉以前。迨辛丑年後，清廷再頒廢八股停科舉之令，於是時局轉變，科舉既廢，取士之途，當恃乎學校，依賴科舉而產生之書院，自不得不有所革變。先是南京設立格致書院，招生肄業，講習科學，名則書院，實則學校。風氣

所趨，前此每月考課之書院，勢不能不改制矣。始則改試四書義經義策論，繼則廢書院辦學校，原有各書院，遂相繼裁併，僅留一尊經，且改稱校士館。同時撥出一部份經費，開辦師範傳習所，招收舉貢生監，入所肄業，李公梅盦任監督；所制，分內外班，內班生終日在所上課，肄習普通科學與教育學，外班生不入所，僅每月隨內班生考文課一次，猶寓有書院舊制也；未幾，再經改革，遂改傳習所爲師範學堂，外班附課之制亦廢，而書院規模至是蕩然無存。其鳳池奎光等書院，亦改辦津逮崇文兩學堂，一在新廊，一在江甯府署旁，招收學童入堂肄業。律推廣學校，乃以鍾山文正惜陰等院舍，移充高等學堂暨中小學校舍，昔日書院考生，亦變計而操衣革履爲新學校之學生矣！

五　結論

溯我國取士之途，代有變易。成周人才出於學，戰國人才出於客，漢代人才出於吏，唐宋元明清人才出於科舉。顧科舉之制，舉行乃有定期，平時養士與造士，則必有其地，故科舉興而書院亦隨之而興，此事所必然也。今則百度維新，追蹤歐西，廣設各級學校，鎔養士造士取士之法，於此學校一途中，固不必再設書院。惟文字爲科學之基礎，文字不精，不足以闡明科學之祕蘊，尤不能深造科學之堂奧。況我國文字高深非一蹴可幾，歷一程更有一程，歷一境復有一境，校中短時之肄習，不若校外之長期共同研討，易獲精進也。是此考文會課

之創設，藉文藝爲進修，共觀摩而增益，其輔助科學與培植人才之功，收效當至宏且遠焉！

事變前後南京市容及交通線變更詳記

白乃銑

金陵自古爲帝王州，東吳兩晉六朝以來，屢興屢興，盛事陳迹，不可勝紀，自明成祖定都燕京，金陵王氣盡收，盛迹不可復覩，清季以迄民初，遊金陵者，莫不有滿目荒涼之感焉。迨十七年北伐成功，又以南京爲首都，出大量之國帑，開闢馬路，交通始略有規模，事變和運還都而後，對於交通市容，整頓不遺餘力，行見六朝繁盛，不久當可恢復舊觀，猗歟休哉！茲將南京事變前後市容與交通線之變更情形，分晰而詳述之：

一、事變前南京市容及交通線之情形。

(甲)事變前南京市容之情形：

事變前之南京，無所謂市容也。古迹名勝，任其摧毀也。橋梁建築，則任其傾圮也。廣告則任意粘貼，而毫無限制也。房屋則任其侵占，公有土地而不加禁止也。街道則任其便溺，汚穢而不講求衛生也。十七年北伐成功後，開闢馬路，雖略有可觀，而於市容尚未加意，故除衝要馬路外，仍無市容之可言。

(乙)事變前南京交通線之情形：

南京事變前交通線狀況、極屬簡單。在民十七年以前其交通線、南北縱幹線只有一條、由南門起、通過三山街黑廊大街、至內橋斜曲、經明瓦廊新街口、再稍東北、轉經北門橋黃泥崗、以達鼓樓、再斜行最終而達下關爲止。其縱支線各二：一由中正街直達太平門、一由北門橋直達神策門。（此門後改爲和平門。）其橫幹線各三：南橫幹線，由通濟門西行通過三山街黑廊大街達水西門爲止。中橫幹線由洪武門通過中正街內橋珠寶廊至漢西門爲止。北橫幹線由新街口斜行經花牌樓至朝陽門爲止。至於小鐵路、係清光緒三十四年創辦、北由下關揚子江邊金陵稅務司處起入金川門通至城內，斜行經三牌樓丁家橋達鼓樓、再偏東轉經舊國民政府東邊婉轉經門帘橋達中正街第二中學校址爲止。民二十四年，又接修由中正街至南門外雨花路止一段。

二、十七年至事變後南京市容及交通線變更之情形。

（甲）十七年至事變後南京市容變更之情形：

（子）街市商販方面

事變前雖有商場多所，而管理不甚得宜，故未見良好成績。事變後隨地設攤、於交通市容兩有妨礙。故和運遷都後，籌畫改善，積極實行，以期市容整肅。已經實行者有四：

1. 建築復興路商場

2. 核准商民自辦華中百貨商場

3. 創設山西路菜場

4. 闢劃承恩寺爲新市場

(丑)建築方面

自事變和運還都而後、人口日增、建築自不可緩。市政當局，除將公共處所、年久失修者、擇要重修。民有房屋、捐壞傾斜有危險情形者、嚴加取締、飭知修理以免危險、而壯觀瞻外。更於清涼山附近一帶規畫地段、闢爲公園、及新住宅區。分區共四：一四兩區先行開辦、因本市人口日見增加、二三兩區亦繼續辦理、此不但於市容有關，人民亦莫不稱便也。

(寅)街市道路方面

街市道路、不但關係市容、且於交通上爲最首要之點。事變前南京之道路，除各條大街稍爲整齊外，其餘殊不堪言。十七年後開闢馬路、雖略有規模，其餘仍前腐敗現象。事變和運還都而後、路政極力整頓、市容煥然一新。分別述之如左：

1. 柏油路之修鋪　國府路、保泰街、頤和路挹江門、熱河路、中華路、湖南路、湖北路、成賢街、中山路中段、漢中路、珠江路、雨花路等處、和運還都後、皆鋪修柏油路、面積計有一三六五平方公

尺。

2. 彈石路之翻修　西流灣、東門街、中山東路、復興路、延齡巷、傳佐路、漢口路、香鋪營、米市街、華僑路、中山路、三步、二橋、四衛頭等處、和運還都後、皆翻修彈石路、面積計有七六三七、七七平方公尺。又翻修明孝陵石像路、道路工程、面積計有一六〇〇〇平方公尺。

3. 碎石路之鋪築　上海路、牯嶺路、靈隱路、沈舉人巷、羊皮巷、老菜市、高家酒館、甯海路、香鋪營等處、和運還都後、皆鋪築碎石路、面積計有四一一三八二平方公尺。

(卯)橋梁涵洞方面：

南京之橋梁涵洞，本多年久失修，事變後，又多被毀於交通，市容咸有妨礙，和運還都後次第修理，大改舊觀。分述如左：

1. 修理金固鄉，寶塔橋、外弔橋、上下浮橋、漢西門外之石城橋。

2. 修建明孝陵石像路拱橋。

3. 中山門外馬羣玉仙鶴門公路間，原有木橋五座，因年久損壞、換修橋面者二座、其餘三座改建涵洞。

4. 中山門內、中山東路之逸仙橋、地當衝要、而損壞不堪、原擬改建鋼筋混泥土橋，以費用太鉅，不

得已，只將橋面欄干改建拆舊換新、決定俟籌出款後、再照原擬計畫辦理。

5. 勘修江東橋　該橋原係石質拱式、因事變損壞，故計畫修理之。

6. 興修燕子磯區張家溝橋　此橋原係石座木面、一面臨江、一面背山、每於山洪暴發水勢湍急翼牆被水冲激、一部已經破損故計畫進行修理。

(辰)水道方面

南京雨水，本不爲少、水道綦關重要。事變前、本市下水道多有溝管、陰井損壞者、事變後繼續修復者、計有六十餘處。又新建香鋪營、戶部街等處下水道，以便洩水。又因各處陰井蓋多爲被竊、於交通水道觀瞻上、均有極大關係。和運還都後，爲既省費，而又可免被竊計，一律改設洋灰澆製代鐵蓋。復興路莫愁路首先改設，將來擬一律照此辦理。

(巳)古蹟方面

明陵內外兩重護牆、事變多有損壞、爲保存古蹟以壯觀瞻起見、設計一一修理。

(午)交通方面

1. 設置交叉道車輛停止線　建康路等交通孔道、行人往來如織、車輛尤爲輻輳。事變和運還都後、於重要交叉道，設用鐵釘方式爲車輛停止線，以期交通方面之規律化。

2. 規畫停車場並增修交通標誌　南京於事變後、交通日繁、車輛日增、於是勘定中山北路及熱河路口二處停車場。又於車站西首、開人力車停車場、分別樹立標誌。又由社會局警察廳會同詳查應設馬車停放地點、列表通知馬車行業籌備會、轉飭各馬車行遵照。又設立限制汽車速率標示牌、以利交通而期整齊。

(未)廣告方面

1. 整頓游行廣告　事變前本市游行廣告、雖經呈准登記、而向例不給執照。事變和運還都後、爲整頓市容起見、製定執照、發給游行廣告者、於游行時攜帶之、以便查考。

2. 整理挹江門內公共廣告牌　挹江門內公共廣告牌、年久失修、破壞不堪。事變和運還都後、經當局派工整理、招商承租、以裕收入、而整市容。

(申)清潔衛生方面

街市之清潔與否、於市容及衛生上有極大之關係、此人盡知之者也。事變前南京市之街市、於清潔衛生全未注意、其污穢情形、殊不堪言狀。事變和運還都後、力求改善、其已見諸實行者、分述如左：

1. 清除垃圾　每區劃分爲若干段、每段分配相當清潔夫、清除一切垃圾、並派載重汽車拖運穢物。和運還都後、一年來共清除垃圾二二、〇九八、〇〇〇斤。

2. 清除便糞　新住宅區、一部有衛生設備者、概由化糞廠逐日化除。其餘住戶及公廁私廁、各機關之便糞、全由糞便處置所清除。並於三十年建築復興路夫子廟公共廁所二處、修建公廁八處。

3. 掩埋尸骨　南京貧寒乞丐甚多，每值溽暑沍寒之時、倒斃路途不少概見。又有無主孤墳、經雨暴露、不第有礙觀瞻、亦且有礙衛生。事變和運還都後、共掩埋男女尸二二〇具、孩尸二八一具、掩埋露棺一〇六具、修理孤墳三五七座。

4. 清潔運動　事變和運還都後、南京市府，規定每月十一日爲大掃除日。三十年舉行秋季清潔運動、除令清潔隊加緊清除外，並令各區公所督飭保甲長挨戶宣傳。並派衛生稽查會同衛生警察暨坊保甲長抽查民家屋宇狀況、隨時監督指導。此項運動，爲市容精神增光弗少。

(乙)十七年至事變後南京市交通線變更之情形

南京事變後、交通線井井有條、極屬齊整。其南北縱幹線北由和平門中央門中間起、最北爲中央路中爲中山路南爲中正路至白下路西端爲止。和運還都後、將中正路改名爲復興路。鼓樓以北、中山路通中央路一段、係十七年後將傅厚崗整迪所成東西橫幹線。東由中山門起達中山路復興路中間爲中山東路，西由漢西門起達中山路復興路中間爲漢中路。中山東路以北與之平行橫支線有二。鄰近者爲國府路、和運還都後、改名爲維新路。再北爲珠江路。中山東路以南與之平行橫支線有五。鄰近者爲淮海路，再南爲

金陵路，又南爲白下路，此路係由當年之中正街改建。又南爲建康路、此路係二十二年由當年之三山街等改建。最南則爲長樂路。漢中路以北與之平行橫支線有二。鄰近者爲華僑路，與國府路相對。再北爲廣州路，與珠江路相對。此路係由五台山及袁氏隨園北鑿通所成。漢中路以南與之平行橫支線有五。鄰近者爲石鼓路，與淮海路相對。再南爲秣陵路，與金陵路相對。又南爲建鄴路，與白下路相通，乃由當年之珠寶廊改建。又南爲昇州路，係由當年之黑廊大街改建、與建康路相通。最南爲集慶路，與長樂路相通。與復興路平行縱支線有三。鄰近者北端爲洪武路。經白下路內橋稍東轉則爲中華路、直達中華門、此路係民二十年改建。中華路東平行者、爲太平路、此路原爲花牌樓門帘橋等於二十年改建爲太平路、過四象橋則又名朱雀路、至建康路爲止。最東縱支線爲上元路、過金陵路口、則爲鍾阜路。十七年後、又於西北方改造、大交通支線一條、名中山北路。由中山路起直達挹江門、爲下關車站入城必由之大道。中山路以西、漢中路以北、十七年至事變後次第所修。各路整齊密接、儼若蛛網、可分爲上下兩排。其上排東北方，由雲南路起，依次爲湖南路、山西路、安徽路、江西路、四川路、河南路、山東路、福建路、甘肅路、河北路、浙江路、湖北路、蒙古路、綏遠路、熱河路。以上諸路、考民十九年國府規定幹路圖，係在中山北路之東北。而實地勘查、乃在中山北路之西南。其下排最東南方爲北平路、依次爲天津路、青島路、上海路、甯海路、西康路、遼甯路、新疆路、吉林路、察哈爾路。其他小路、不必

多費。此外原有之小鐵路、其路線固未變更、而經過之地點、因十七年及事變後開闢馬路、加多，故所經過之地點名稱、多所改易。今之小鐵路、北仍由下關起、入金川門，斜倚中山北路經三牌樓丁家橋達鼓樓、偏東轉經北極閣下及新國府前往、東經珠江路國府路中山東路白下路(卽前之中正街)建康路淮清橋等之東首、過武定門再南、轉經石觀音廟周處臺白鷺洲南邊，以達中華門外雨花路爲止。其由原中正街今改名白下路之處、達南門外雨花路終止一段係民二十四年始接續修成者。

綜觀以上所紀、南京市容及交通線、事變前後變更之詳情、從可知事變和運還都後、多所整頓、大改舊觀。所願市政當局、及各界商民、對於本市市容及交通線同力合作、再求改善、抱定宗旨、不達盡善盡美不止。果能達到目的、豈僅商民之幸、抑亦國家之光也。

銀錠橋話往圖記

舊京地安門外。夙多潭沼。荷芰菰蒲。不掩淪漪之色。銀錠橋尤爲第一絕勝處。橋東西皆水。在三座橋北。以形得名。南眺宮闕。北望梵剎。西山千萬峯。遠體畢現。宋牧仲詩所謂不盡滄波連太液依然晴翠送遙山者是也。宣統初元。汪精衛先生與喻紀雲黃復生潛入京師。思於首善根本之地。爲震奮天下人心之計。庚戌二月二十三夜。躬懷藥彈。於橋西掘土預埋導火線。惕息竟夕。布置粗帖。天未厭亂。遽陷囹圄。於是東都黨錮之英。西臺慟哭之彥。咸翕然和之。相與悲歌慷慨。唏噓震盪。聞風慕義。千里一室。而銀錠橋之名亦因是藉藉人口焉。烏虖可謂壯已。夫破竹之勢。迎刃在所必解。而蓋世之氣。先聲尤貴奪人。曾未二年。中原舉義。傳檄皆下。河山昭蘇。非上智何以洞幾。非神勇何以倡衆。厥功無耦。來者難誣。其後共和既建。先生來止上京。偶經是橋。俯瞰流波。澄碧如昨。感曜靈之易逝。慨陳迹之弗留。臨風賦詩。歸示賓客。其辭吾不得記。其意則周伯仁新亭涕淚之餘也。今距庚戌才卅年。災難洊至。生民丘墟。先生不憚疑謗。與海內仁人志士共挽垂亡之局。其事誠艱。其心彌苦。人苟良心未死者。莫不授銜轡於社會。而自爲之牛馬。此先生昔日與人書中語也。勉踐斯言。足關衆口。江裁兩世相親。於先生志慮事功。闕之獨深。記之特備。（拙輯有汪先生文譜汪先生學案汪先生年譜汪先生庚戌蒙難實錄汪先生乙亥遇險始末記汪先生復國行實錄汪先生六十政紀銀錠橋考諸書）意者魯遽之瑟。有相應之聲。然明之心。有握手之歎。是以託於小知。未敢多讓云爾。湘潭齊丈白石北平李丈雨林。雅擅丹青。爰乞繪銀錠橋話往圖。徧徵題詠。爲北燕革命史留一故實。覽斯圖者。其亦頌壯猷珍曩迹也乎。中華民國三十一年五月東莞張江裁記於秣陵行館。

粵音與客音之比較

張資平

（一）客語及粵語之分布概狀

前年曾爲商務印書館譯一部「人類之地學的研究」，在該書篇首序文中曾略及廣東三大方言系統，因執筆匆促，舛誤自多、但關于廣東三大語言之分布概狀則尙堪自信。惜該書至今尙未出版。今試作重複之介紹如次，俾讀者有所參考、

在上海拙譯序文中，曾指出粵語之分布狀態，實爲一語言島(Sprach-In-sel)。何以言之？在粵省之東北西三江流域及南路之山地或高原地方多屬客族之居住地，而沿海一帶則爲福佬族所佔據。其間雖有混血語系之存在，但其勢力甚弱；例如潮州屬揭陽饒平與客族居住地相接壤之地方有所謂「半山學」，乃介于福佬族與客族間之混合血語。台山語系則爲介于粵語與福佬語間之混合血語也。至于純粵語僅佔有以廣州爲中心之平原及三角洲一帶地域而已。卽在粵語系統之語言島上亦有多數客族居住其中，例如花縣龍門東莞增城及中山之一部分是也。淸遠語似屬粵語與客語間之混合血語。唯作者未敢下最後之斷語，將有待于今後之研究、

（二）採用羅馬字拼音法

深入客族居住地宣傳基督教之西人多屬美德兩國之新教徒間，有法國之舊教徒，但其力量甚小。彼輩爲達到宣教之目的，僅習客語而既足，固無須浪費時間及精力學習艱深難寫之漢字也，蓋彼輩從來即不認漢字爲文字而僅視作一種符號(Characters)。故此輩教徒皆採用羅馬字拼音法，將一切宣教所需書籍譯成拉丁文字。簡言之，即中文聖經之拉丁化也。例如以

diang 譯「張」，　以 chang 譯「昌」，

亦有以 chang 譯「張」，　以 chhang 譯「昌」者。

同樣以 ket 譯「革」，以 khet 譯「客」。若以 get 譯「革」。彼輩之區別四音則採用下述規約。

°Tung……通　　tung°……洞

tung。……統　　。tung……洞

按上舉規約以 Wang 譯「汪」，以 Wan 譯「萬」，餘可類推。彼輩對于 an, on, un 和 ang 之區別，至爲明晰。即前一羣的發音須以舌尖抵上顎，而後一羣則否。例如以 Uung 譯「翁」而以 Uun 譯「溫」。（均客音）、今作者亦擬利用此種羅馬字拼音法以比較粵音及客音、

(三) 肯定詞及否定語

肯定詞及否定詞在英文爲 yes 與 no，在粵音與客音均用「係」及「唔係」，唯發音稍異。至不治用「是」字則爲兩者之共通點。

	肯定詞	否定詞
粵音	hai	um hai
客音	hei	um hei

疑問普通詞「是不是」，若增發音速率時，在粵音爲 hai mai 此 mai 似英文 my（我的）之發音。在客音爲 hei mei，此 mei 似英文 may（五月）之發音。在粵音之 a 音，在客音卽轉化爲 e 音之例極多，不勝枚舉。例如粵音讀「歐」爲 au，在客音讀爲 eu，有粵音讀「生」爲 Sang 在客音卽轉化爲 Sen，單就此點言客音較近于正音。

(四) 三人稱發音之比較

「吾」「五」「伍」「吳」等在粵音與客音極相似，完全不發 Wu 音，由是作者深信；此「吾」「吳」等字

，在我國古代之發音，必爲 ng 或 ngu 之發音，而非 Wu 之發音。至何以由 ng 轉化爲 Wu 則有待于音韻學家之考據，作者實無能爲力也。

Wu 與 ng 間之音變關係亦可由以我國南北民族對「我」字發音之差異證明之、即「我」字在北方多讀爲 Wo，在南方則多發 ngo 之音也。今將粵音與客音之三人稱表示如下．

第一人稱	第二人稱	第三人稱
粵音……我（ngo）	你（ni）	佢（koi）
客音……吾（ngai）	您（ng 或 ngi）	他（gi）

「吾」發音最初當爲 ng, nga 或 ngo，客族未入粵省之前，在魯、豫一帶既轉化爲我（ngo）或俺（ngon），因（ng）實不便於客音也。粵音爲「我」之支系而客音則屬「俺」之支派。

民國十四年在武昌大學曾聽胡適之先生就于「您」字發音之演講，使作者益信客音第二人稱之發音ng或ngi可上溯至北方之「您」音也。論第一第二人稱之發音則客音不及粵音之近于正音也。

第三人稱之「佢」即文言之「渠」，可爲疑義，近似粵音帶有 umlaut 音符之 koi，而在客音則發爲更濁之音 gi，至不沿用「他」字又爲兩者之一共通點。

「吳」字等之古代發音爲 ngo 或 ngu 之另一證明，即日本人皆讀「吳」爲 ngo。假使當日本輸入漢字時

代「吳」字發音爲 Wu，則日本人固有 Wu 之發音，當不至誤譯至此也。

關于各人稱所有格在粵音卽在「我」「你」「佢」之下加一「個」字，發音爲 gai。但粵人尙讀「個」爲 go，故創作一俗字「嘅」以代之，或仍採用「的」字。例如「我的伯爺」「我的老母」之類是也。在客音則完全失却「的」字而專用「佢」字，發音爲 ge。例如「俺個爸爸」本應發音爲 ngai ge baba；因音數過繁，由發音速率之增加，而轉化爲 nga ge baba；但仍嫌其繁冗，遂簡稱爲 nga ba。故客音之所有格在目前既簡明化爲下例之發音矣，實一種退化現象也。

第一人稱所有格　「俺個」發音爲 nga ge，或簡作 nga。

第二人稱所有格　「你個」發音爲 nge ge（梅縣或 ngia ge 興寧、五華、蕉嶺等地方）簡作 nge 或 ngia。

第三人稱所有格　「他個」發音爲 gi ge，ge（梅縣）或 gia ge（興寧、五華、蕉嶺等地方）簡作 ge 或 gia。

。論三人稱的複數發音則粵音不及客音之近于正音

第一人稱	第二人稱	第三人稱
粵音……我的（di）	你的	個的（koi di）
客音……俺等（ngai den）	你等（ng den）	個等（gi den）

一般在此等複數人稱之後加一「人」字。例如「你的人」「佢的人」「俺等人」「佢等人」之類在。興寧五

華等地方則「等」字發音轉變爲 deu，卽 n 轉化爲 u。例如 ngai deu（我等），ngi deu（您等）之類是也。

（五）疑問詞的差異

「什麼」這個疑問詞常因發音速率之增加而省略「什」字，僅說一「麼」字。有時由「麼」（mo）音則轉化爲「嗎」ma。例如「幹什麼」在今日旣轉化爲「幹嗎」，此爲一般所熟知者也。

經過長年代間之音變，再受由北而南之地理的風土淘汰，客族人民遂以「嗎」字爲與英文之 what 相當疑問詞矣。在粵音亦然，唯發音稍異耳。蓋由于風土之變化也。客音不稱「什麼」而稱「嗎」，並在「嗎」字之後加一「佢」字，發音爲 ma ge（嗎個）

粵音亦然，在「嗎」字之後加一「兒」字，發音爲 me ye。至「兒」字發音轉化爲 ye，當于後項「rhu 變至于 erh erh 變至于 ye 或 yi」項中詳述之。

其次爲「那裏」之疑問詞，在客音仍循其舊。唯發音稍變，稱爲 nai li；又因音速變爲 nai ye。蓋 nai 之音尾爲 i 字也。

至在粵音則大不相同，竟以 bin shu 表示「那裏」。shu 當係「處」，卽「那一處」之意。但 bin 之發音來源，作者至今仍百思不得其解。

關于「誰」之疑問詞，在客音採用「嗎人」以代之。「嗎」字之解釋既如上述。至其發音本爲 ma ngin，但因音速關係 ma 字與 ngin 之首音 n 相聯絡轉化爲 man 與 ngin 了。

在粵音，仍在疑問字 bin 之後加一「佢」字，發音爲 bin go，意卽「誰」或「那個」也。若欲強爲記憶則假定「那」字之發音爲 bin，則粵音之 bin shu 或 bin go 當爲「那處」或「那個」，亦通。

最後之「爲什麼」或「怎麼樣」之疑問詞在客音原爲「怎樣兒」。但如上述，客音由南宋末期起經過由古至今由北而南的變化及淘汰或因「怎」字發音之不易或因其詞句之繁冗遂索性省却「怎」字，而僅以「樣兒」兩字表示「爲什麼」之涵義矣，其發音爲 ngong ye，因「兒」字首音 y 受 ngong 尾音 ng 之壓迫，不能發成響音，故轉化爲ngong nge（樣兒）矣。

關于「怎樣」之疑問詞，在粵音又崛起一個奇特的發音 dim，實與 bin 字相伯仲，並在 dim 字之下加一「解」字，發音爲 dim gai，卽「爲什麼」之意。湖南醴陵人慣用「何解」兩字、若粵音之 dim 意卽「何」，亦通。又有時在 dim 之後加一「樣」字，發音爲 dim yong，意卽「怎麼樣」(dja mo yang)、故鄙意以爲 dim 當係 dja-mo 之音變，因略去 o 字變爲 djam，卽 diam 或 dim 也

（六） 關於場所之發音

表示「這裏」，「那裏」，「這邊」，「那邊」之發音，今列表比較之如下：

	（這裏）	（那裏）	
粵音	這處(ni shu)或(ni lisnu)	個處(go shu)	
客音	這裏(le li)音變爲(leye)	個裏(ge li)音變爲(ge ye)	
	（這邊）	（那邊）	
粵音	ni bin	go bin	
客音	le bian ziat(跡)	ge bian ziat	

又場所之疑問詞既如上述，在粵音爲 bin shu 或 bin bin ，在客音則爲「那裏」，發音爲 na li 。

關于「裏面」及「外面」之發音亦有區別。在粵音稱「裏面」爲 lui min 或 lui tau 裏頭。稱「外面」爲 ngoi min，ngoi tau「外頭」或 ngoi chat（外出）。「外」字發音雖與客音相同，但略帶 umlaut 卽與 ngoi 音相近。

在客音稱「裏面」爲「肚裏」(duli) 粗俗難聽。稱「極內部」爲「底肚裏」(di du li)，稱「外面」爲 ngoi bian（外邊）或 ngoi teu（外頭）有時且稱「外背」(ngoi boi)

（七） 由 Rhu 變 erh 再變爲 ye

第二人稱之「你」ni 或「您」ng 或 ngi，皆由「爾」音變化之結果，可無須再爲贅述。其他如「兒」「耳」之發音自北而南，大概循 Rhu (Ru erh, ni, ngi, ye, yi 等的變音路線。童年時曾聽父老所述之笑談一則，今錄之如次

吾鄉有宦至二品大員者。其父當爲一老太爺矣，然固一村叟也。當其未榮顯時，曾爲虛榮所驅，往州署拜謁州牧與之暢談家常瑣事，此村叟固不善正音。州牧問渠有幾位兒子。彼誤「兒」爲爐因答州牧曰「我家有兩個爐子大爐子煲飯小爐子煲茶」。「兒」與「耳」之發音則北方極近 rhu 音，須極端卷舌尖內向，始能發音、但循時代之進展及由北而南之音變達到粵省之後，轉變爲 yi ngi 等發音矣

「筆兒」「墨兒」「扇子」「杯子」等語尾助詞「兒」及「子」，在客語仍見沿用。一般不稱「墨子」，「筆子」，大概當係由于習慣之結果。故在客語亦罕在「筆」「墨」之後加結尾詞。對于「扇」「杯」「碗」「碟」等字眼後面，一律可加「兒」字，發音爲 ye、例如「杯兒」bi ye「碟兒」tiap ye、「碗兒」von ne 之類是也、「碗」字尾音 n 壓倒 ye 之發音故轉化爲 ne。同樣客音稱「缸」爲 gong，故「缸兒」之發音爲 gong ge。

在粵音罕用語尾助詞「兒」字，而多採用「子」字，發音爲 djai。故以「仔」字代「子」字、最明顯之例有「香港仔」Hiong kong djai「灣仔」wan jai 對於「杯」「碟」等亦稱 bi djai，tip djai、至稱小孩兒爲「細滿仔」(sai ma djai) 之「滿」。究有何涵義仍待考據也、又稱「傻子」爲「傻仔」，發音 so djai 則爲一般所熟悉、在客音則全廢「傻」字而以「戇公」代「傻子」，發音爲 ngong gn、故鄙意以爲粵族祖先與

客族祖先入粵路線之差異可由「儽」與「纍」推知之。

「兒」之發音在粵音與客音均爲 yi、「耳」字之發音在粵音爲 yi、在客音爲 ngi、「爾」之發音在粵音以爲 yi，在客音則爲 ni，「而」之發音在粵音與客音亦均爲 yi。

（八）音尾 am, em 及 im 之保存

數年前讀東方雜誌有論粵音之文章、稱粵音能保存尾音 am，證明其實以中國古音爲語言也、陳柱尊教授近亦有同樣之見解，今表示之如下。

	庵	藍	林	斟	占	侵	森	參	心
粵音	am	lam	lam	djam	djim	cham	sam	sam	sam
客音	am	lam	lim	djim	djam	chim	shem	shem	sim
	陰	鹽	甘	塔	蘸	欽	擔	譚	貪
粵音	yam	yim	gam	kam	him	ham	dam	tam	tam
客音	yim	yam	gam	kam	kiam	kim	dam	tam	tam
	翠	吟	黯	暗	岩	三	衫	杉	淡

粵音	kam	yam	dim	ngam	ngam	sam	sam	djam	tam
客音	kim	ngim	diam	am	ngam	sam	sam	cham	tam
	監	鹹	擔	蔭	禁	金	今	飲	擔
粵音	gam	ham	lam	sam	gam	gam	gam	yam	lam
客音	gam	ham	lam	shim	gim	gim	gim	yim	nam

（九）「這個樣子……」與「那個樣子……」之蛻化

表示某一件事情的狀態，常用「這個樣子……」或「那個樣子……」等詞句。例如說「像這或那個樣子是不行的」句中用「這」或「那」，均無關重要。故在粵音與客音皆廢去「這」字或「那」，字而簡稱「個樣子……」。實卽「像那個樣子……」之意、「個樣……」發音本爲 go yong 、由音速關係轉化爲 gon yong ，再分化爲 gam yong（粵音）與 gan yong 或 an yong（均客音）、今則再簡化爲 gam（粵）與 an ne（客）矣、例如粵語之「gam yong um dat gai」（個樣唔得嘅！）及客「an yong ge um det ge」（個樣兒唔得個）之類是也。粵人常發一種慨歎詞 gam dim dat！意卽「似此如何可」也又客語之 an ne ngiong nge！意卽「似此將如何」也。

（十） 進行式與完了式之表示

動作之進行式，例如說「我做着事情……」，在粵語爲「我做緊(gan)事情」，在客音爲「俺做箇(den)事情」、又如「我剛做着工作，他就跑來搗亂」，在粵語與客語之詞句略異。

粵語　我剛做開工夫，佢就走來搗亂

客語　我剛做定工作，佢就走來搗亂

在客語一般省去剛字，而在「做定」兩字中間夾入——「啊」字含有「完了」之意，發音爲 ya 或 a、例如「做啊定……」發音爲 djo ia ting…… 故上述句子，遂改變爲我「做啊定工夫，佢就走來搗亂」。但 djoia ting 的發音頗不安定，由是更蛻化爲 djoi (做) tang ting…… 矣、故客音之動作進行式遂成立爲下舉之一公式。

(動詞) + tang ting……

例坐 tang ting，寫 tang ting，看 tang ting…… 等等。

但在粵語云公式則爲

(動詞) +(開)+(個陣時) (go djan shi)……

動作之完了式在粵語與客語之公式如下。

粵語動詞+完、「完」之發音爲 ynu 在「完」字之後有時、可加「了」字發音爲 liu

客語動詞+畢了「畢了」二字之發音爲 pet le 或 petli

粵語尚有以動詞＋埋殺之公式表示完了式者、（埋殺發音爲 mai sai）者、又有以動詞＋ zo 表示完了式者、例如去 hui zo 走 djau zo 等類是也

（十一） 幾個語詞的比較

	喫飯		喫稀飯		菜肴
粵音	啖飯 (yiat fan)		啖粥 (yiat jut)		饌 (sün)
客音	食飯 (sek fan)		食粥 (sek jut)		菜 (choi)
	來	去	行	回來	不行
粵音	loi	hui	hang	返 (fan)來	唔得 (um dat)
客音	loi	ki	hang	轉 (djon)來	唔得 (um det)
	骯髒		可憐		兄
粵語	渥濁 (ok chok)		陰功 (yam gung)		大佬 (dai lo)
客語	汚濘 (eu neu)		罪過 (choi guo)		哥哥 (go go)
	弟		父		母

粵語	崽佬(sai lo)	老頭(lo' tou)	老母(lo mu)
客語	老弟(lau tai)	阿爸(a' ba)	阿姆(a me)

此外粵語稱進旅館客棧爲「埋棧」(mai djan)，稱結單爲「埋單」，稱「連他拉進來」爲「拉埋個」，此等句子中的「埋」字則爲粵語所特有者，「殺」字亦然，「殺」即盡也，例「啖殺佢」(yiat sai kui)實「喫盡牠」之意並非欲咬殺人也。

(十二) K 等轉化爲 H 或 F 或及 umlaut

在客語有首音 K 者，在粵音卽轉化爲 H 或 F 之音首，例如「科」ko 轉化爲 fo，康 kong 轉化爲 hong，寬 hon 轉化爲 huon 之類是也，此外之例：

去	欽	嚴	客	慳	韋	快
粵音	hui	ham	him	hak'	hèn	hán	fai
客音	ki	kim'	kiam	ket	kin	ken	kuai

粵音與客音雖有相同者，但在前者發音時往往縮其雙脣，發爲德語式之 unlaut，若以英語擬客語，則粵語近似德語也，試舉二例如下以明之

香港	heong	梁 leong	章 djeong	阮 yún	蔣 geong
客音	hiong	liong	djong	ngion	giong

（十三） 數詞副詞及禮節語之比較

表示事物之狀態或價值，常用「太」字、例如「太貴了些」，「這個人確實太壞了」等句中的「太」字，亦稍見于粵語、但一般多不採用此接頭副詞「太」字，而常採用接尾副詞「過頭」兩字，即「過度」之意、例如說「這篇文章長過頭」之類是也。

在客語決不用「太」字，而沿用忒tiat字。例如說「這價錢忒貴」，「這個人忒壞」，「這篇文章忒長哩」。

由上述兩方所用副詞之差異，亦可以證明兩種語言由北而南之發展路線不同也。

又如說「走快一點」，「給多一點」，在粵語爲「走快滴」（diau fai di）「畀多滴」（bi do di）；可見粵語仍用古語「畀」字。在客語「走快的」（djau kuai di）雖相同但，「給多一點」則轉化爲「分多一滴」（bun do yit di或）「分多滴」。此中「滴」或由于「點」之音變。但「畀」與「分」之差異，則大有考據之價值也、兩湖之「把我」，意即「給我」。把其介于「畀」與「分」（bum）間之詞歟。

音首 dj 及首尾 ang 在南方俱難存在恐，係由於生理上之關係。當然，生理變化亦受自然地理的影響也，其在今日尚能保存者僅 dje 或 dji 與 ong 相結合之少數發音而已、故「怎」dja 或「這」dje 在粵語及客語中均被淘汰淨盡。但稱「傘」爲「遮」則又爲兩者之一共通點也。（粵音稱 dje，客音稱 dja）。「這」字在粵音蛻化爲 ni，則客音蛻化爲 le。至于「那」字在雙方均以「個」字代之，則既如第九項中所述。

關于數詞相同者亦多、例如：

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.
粵音	yiat	yi	sam	si	ng	liu	chiat	bat	gau	sap
客音	yit	ngi	sam	si	ng	liut	chit	bat	gau	ship

「百」在雙方均發音爲 bak。千則稍異，在前者爲 chien，在後者爲 chian。萬之發音亦異，在粵語爲 man（曼），在客音爲 wah。文字亦然，在粵語爲 man，在客音爲 vun。

粵語之禮節語多用「唔該」um goi 兩字，意卽「不應該勞你的駕」也或「偏勞你」之意也、作者極贊許此語而在客語則無相當者由此點證明粵族祖先多士商階級而客屬祖先則多農民及勞働者、「多謝」兩字則爲雙方所共通。

粵語有致謝詞「唔該殺」（um goi sai），並非說「對方不應斬首」乃「索性偏勞你到底」之意。「殺」本有「減少」或「減盡」涵義。故「唔該殺」實爲至有禮貌之謝詞。

(十四) 結論

粵語與客語間異同之點尙多，限于篇幅不能爲之一一舉述，綜上各節，作者擬作一結論，以就正于海內之專家也。

a.粵族祖先與客族祖先均來自北方。

b.粵族祖先之入粵期極早，在南宋以前，至在何時代尙須待今後之研究及考證，客族祖先之入粵以南宋末期爲一大移民期，此旣經多數學者證明者也。

c.粵族祖先多屬土商階級，故粵語較客語高雅，客族祖先多屬農業及從事勞動，故措詞粗率簡略。

d.粵族祖先之南來似作成一大羣，一氣呵成，直抵粵境，卽有計劃的大規模移民，客族之南遷卽隨地爲家，中經豫皖贛浙閩等省，輾轉入粵，或斷或續；其間經過極長之期間，並且零落散漫無一定計劃作成團體之移民也。

e.粵族祖先入粵乃沿湖廣盆地，取直線的路線，客族祖先則如前條所述，中經豫皖贛浙閩各省，沿曲線長途輾轉來粵，所經過時期亦較遲緩。

f.粵語受海岸島嶼民族言語及西歐之影響較大，客語則無之。

「上海史話」書評

沖田一

或る外人が云つた。上海居留外人は拜金者の集合で、文化には關係のない徒であると。また『史的上海』の著者ジーサスと云ふ人は上海を長髮賊の跳梁から救つたゴルドンの記念碑が、上海に建てられて居らぬことを再三指摘して、上海人の忘恩と歴史への無關心とを痛憤して居る。

繙つて邦人側を見ることどうであらうか。彼等は文化に無關心と云つても、我等から見れば相當の研究がなされ、又文化財の蓄積と保存とには可成意を注いで來た。これは亞洲文會の圖書館と博物館とを一瞥したゞけでも分らう。勿論我等は彼等に比べて不幸な立場にある。彼等より上海に於ける發展が半世紀以上も遲れ、排日や事變の達積で文化財どころではなかつたのかも知れない。此の點は認めるけれども、然し邦人十萬と云はれる今日其の方面に尙さして見るべきものはない。一例を云へば上海邦人史に關する資料が公共的に蒐集されて居るとか、保存されて居るとかの話は一向聞かないのである。個人で蒐集保存して居る人は少數あるが、其の人の歿後或は離滬後は折角の資料も散佚して了ふと云ふのが現在迄の狀態であつた。これでは何時迄經つても蓄積と云ふことはない。

私を近頃爽快ならしめたものに畏友米澤秀夫氏の新著『上海史話』がある。上述の通り文化資料の散佚した上海で、よくこれを集められ研究されたものと敬服の外はない。本書卷末の上海史文獻解題によつても分る通り上海史に關する著作は決して少くない。そして租界の歴史に就ては最早書き加へることがない程研究され書かれて居る。本書はこれ等の事項には輕く觸れゝ、上海に於ける邦人史が主要部分を占めてゐる。又邦人として最も期待し興味を惹く部分である。今迄上海邦人史に關し書かれなかつたと云ふ譯ではないが、皆何れも斷想的なもので、本書のやうな構想を備へたものは絶無であつた。日清戰爭頃迄の上海邦人史は云はゞ暗黑時代であつたが、本書によつて初めて黎明を見た譯である。

共同租界と佛蘭西租界との境界路である愛多亞路は、昔は洋涇浜と呼ばれたクリークであつた。此のクリークの南岸卽ち佛蘭西租界に屬する側で、バンド角から三軒目の支那家屋に、文久二年高杉晋作が一箇月半も泊つて居つたし、又幕末明治初年に小東門外の支那旅館に、安田老山と云ふ畫家が泊つて居つたことなど、今から考へると夢のやうな話であるが、本書にはこれ等のことが詳細に述べられて居る。高杉晋作の上海滯在日記が揚げてあるが、彼の面目躍如たるものがあり、猛暑を忘れる程興味津々たるものである。彼が上海に居つたのは丁度今と同じ酷暑の候で、コレラが流行して居つたので尙更感慨深い。

上海に於ける邦人の發展を人に譬へれば、其の幕末は胎兒期であり、日清戰爭迄は乳兒期であり、歐洲戰爭迄は少年期であるが、此の乳兒期に於ける邦人の苦心經營は本書によつて一目瞭然とする。老上海も新上海も必ず一讀されて先輩の勞苦を忍び、併せて將來の指針の一端とせねばならぬと思ふ。

本書に興味を添へるのは珍らしい寫眞や挿繪があることだ。明治元年蘇州路一號（英國總領事館の裏）に旅館兼陶磁器店を開いた田代源平の寫眞が載せてある。羽織袴であるのは珍らしくもないが、大小を差し左手に洋傘の如きものを持つて居るのは一異景だ。明治十年代に河向ふで繁昌した東洋茶樓（日本料理屋）の一つ、美滿壽の繪があるかと思へば、我國寫眞術の先驅上野彦馬が撮影したと云ふ上海城の寫眞もある。私に特に刷染深い紅楓女史、卽ち安田老山の妻女が載せてある過去帳の第一頁もある。

この外上海の植物園、申曲、蘇曼殊の生涯と作品、東海の詩人蘇曼殊、支那商店名の研究、香港經濟史の發端等有益な項目がある。

卷末の上海史文獻解題は研究者の常に座右に置いて參考すべきものである。

勿論此の種のものは一個人の努力で完成出來るものではない。本書にも訂正增補しなければならぬ部分が多くある。これは何も著者の罪ではなく、後進者の負担である。（東京畝傍書房發行、B6判四一〇頁、二円八〇）

楊仁山と金陵刻經處

米澤秀夫

南京の延齡巷といへば、日本宿の一番先輩の寶來館が、現在引移つて來てゐる通りである。この寶來館の斜向ひに上等の筆墨や書畫を賣るので有名な榮寶齋がある。この店で筆などを買つて來て自慢するのが、先づ一通りの支那通であるが、その榮寶齋から十間ばかり離れた隣の、延齡巷と躬稼橋路との角に、古く低い土壁の家があり、その門に小さく『金陵刻經處』と書いてあるのを、あゝこれが日支の文化交流にも深い關係のある楊仁山居士の、最も精根を注込んだ事業、あの名高い佛書出版所なのか、と氣の附く人は少からう。

楊仁山、名は文會、道光七年安徽池州府石埭に生れた。父樸庵が進士であつたから、幼時既に讀書を覺え詩文を樂しみ、任俠の氣質に富んでゐたので、少年時代には馳射擊劍の術をも習つた。

太平天國の亂には、父に隨つて軍に赴き、安徽、江西、江蘇、浙江の間を往還すること十年、父に死別れ家に儋石の貯へもなくなつたとき、曾國藩に才幹を認められ、穀米局の采配を委ねられた。その時仁山は二十七歳であつた。

間もなく病を得て、鄉里で靜養中、或る年寄りの尼僧から『金剛經』を貰つたのが機緣となり、あまり解

らぬながらも、佛敎に心を惹かれるやうになつた。ついで龍樹菩薩の『大乘起信論』を手に入れ、熟讀五遍はじめて奥旨を了得し、それからは毎日、佛書を求めて、本屋を搜し歩いた。

或る日坊間の書肆に、『楞嚴經』を見附け出し、『これだ』とばかり、その場で誦み始めた。

讀經の聲が、何時間もつゞいた。もう日はとつぷり暮れてゐる。本屋の主人が痺れを切らせて、仁山を促した。

『さア、もう店を閉めさせて戴きますよ』

『おう、これは濟まん、主人、この本はいくらかね』

かやうにして仁山は、田舍の町で佛書の買漁りに熱中した。親しい友達が、他省に往くやうな機會には、必ず佛敎の本を買つて來てくれと賴んだ。行脚の僧に會へば、必ず『何處の何といふお寺から來られたか、經本を所持してゐられぬか』と聞いた。

同治五年、仁山は南京に移り住み、愈々本格的に佛學の研究に乘出した。南京は到るところに名高い寺跡があり、『南朝四百八十寺』と歌はれてゐるやうに、六朝以來隋、唐にかけて、如何に佛敎が盛行したかを偲ばしめるものがあるのだが、宋元以後の佛敎は沈澱、旁流して舊來と變つた姿となつた。佛敎は儒敎や道敎と混成して一種支那式のものとなり、明末に至るとその傾向が一層著しくなつた。

清朝になると、僧侶としての人物は少いが、居士として名を馳せた人々が歴々數へられ、持に乾隆以後には、磚尺木、羅台山、近くは龔定盦、魏默深などの有名な人物が、何れも佛敎に深い關係をもつた。そして南方においては、杭州が僧侶の都、寺院の國として殘つたのとは反對に、南京は謂ゆる居士佛敎の本場となつたのである。

仁山は南京に居を構へて多くの居士界の先達と交り、佛學に精進すると共に、益々佛書、經典の蒐集に務めた。だが何分、支那には佛書が少いので、これを得るにはなか〳〵骨が折れた。仁山は考へた。

『佛敎は無二の法門だが、かう書物の入手が困難では仕方がない。佛敎の衰へは、一つは佛書の缺乏が原因だらう。末法世界を救ひ、衆生を普濟するには、どうしても經典を流通させねばならぬ。』

當時北京には『龍藏』があつたが、これを手に入れるのは容易でなく、南方の藏經は、太平天國の亂で殆ど燒けてしまつてゐた。そこで佛書の飜刻、出版を發願し、同志十餘人と語らひ、資を集めて、書本藏經の低廉且つ大量的印刷に着手した。これが金陵刻經處の抑もの始まりである。當時最も熱心な協力者の一人に江都の鄭學川がゐた。學川は間もなく出家し、鄉里揚州の磚橋に江北刻經處を設立して、仁山の刻經處と分業的に出版物を交換し合つた。

仁山はそれから毎日、晝は印刷作業を監督し、夜は佛學の研究、刻印の校勘に沒頭し、或は誦經念佛、靜

坐觀想して往々寢につくのを忘れた。曾國藩や李鴻章も、仁山の事業を見て感心した。北京の李鴻章から、仁山の許へ招聘狀が來たが、辭して赴かなかつた。家計に窮して來ると、江寧籌防局や漢口鹽局に勤めて、やはり事業は繼續した。長沙では曹鏡初が仁山の助けを得てまた刻經事業を始めた。常州では劉開生が同樣の事業を擔任した。その後蘇州、杭州、常熟、天津、北京、奉天、長春、哈爾賓等の各地に、同種の刻經處が生れ、互に連絡をとり、重複を避けて出版を營むやうになつた。これ等刻經處のうち現在殘つてゐるのは金陵刻經處のほか、揚州と常州と蘇州のものだけである。

光緒四年楊仁山は、政府使節曾紀澤に隨つて英佛に遊び、十二年再び使節劉芝田に隨行して倫敦に赴き、滯留三年具さに英國の政治と文物を視察した。そして彼國の工學と製造技術の發達に目を見張り、靜かに自國の狀態をふりかへつた。歸國後、仁山は人に語つていつた。

『この世の競爭は、結局みな學問に在り、歐洲各國の政教工商、一として學問の根底のないものはない。ところが支那はどうぢや。西洋の方法を眞似やうとしてゐるが、徒らにその皮毛を被るだけで、中味は何もない。上下ともに無知極まりなく、各々私利私欲を圖つて、興國の念なぞ毛頭ないではないか。わしは誓つて、も

楊仁山の像

う政治には關與すまい。』

このまゝでは支那は結局亡びる外はない、そこで世事人心の腐敗を一新するにはやはり佛教によるべきである、かく仁山は益々決心の臍を固めて、佛教の振興に力を注いだ。南京歸來後は、日本から縮刷大藏經を買入れ、戸を閉してこれを誦讀した。また北京に赴いて古逸書を探した。英國で知己になつた東本願寺の南條文雄師から、支那で散佚した佛書が日本に多く現存してゐることを聞き、同師に依頼して藏經以外の佛書二、三百種を送つて貰ひ、それ等を苦心して刻經處から刊行した。英人チモシー・リチャードの協力を得て『大乘起信論』を英譯し、他日佛教西漸の端緒たらしめやうとも圖つた。それから上海の印度人と交際し、印度の佛教復興にも因緣を結んだ。その志願の大きいことが窺はれるであらう。

仁山が一代において出版した經典は、華嚴部三十二部、方等部六十六部、般若部二十三部、法華部二十五部、涅槃部十二部、密部五十六部、淨土部五十七部、小乘經律部二十七部、大乘律部三十八部、西土撰集部若干で、以上各部を合せて總發行量百餘萬卷に上り、佛像の印刷も十萬餘枚に達してゐる。自著としては『大宗地玄文本論略註』四卷、『佛教初學課本』及び註、『十宗略說』、『觀無量壽佛經略論』、『論語發隱』『孟子發隱』、『陰符經發隱』、『道德經發隱』、『沖虛經發隱』、『南華經發隱』、『闡教編』各一卷、『等不等觀雜錄』八卷があり、これ等は何れも、金陵刻經處發行の彼の全集『楊仁山居士遺著』の中に、塔

銘、事略などと共に收錄されてゐる。

光緒二十五年（明治三十二年）東本願寺は、南京に金陵東文學堂を設立し、支那人子弟に日本語を敎へ、敎師たる日本人留學生には支那語を學ばしめた。本山から派遣された籠經丸師が淸國布敎監督心得に任せられ、北方蒙師が南京にあつて學堂の主任を勤めた。

留學敎師には、一柳知成、藤分見慶、岩崎永、長谷川の諸師のほか、三井物産の留學生高木陸郎、內田茂太郎の二氏がゐた。學堂は初め一枝園に設けられ、後に科巷に移され、更に廣藝街に移轉したのである。

この金陵東文學堂の創設に當つて、東本願寺は楊仁山居士に後援を依賴した。籠師はこの時、本山へ宛て『城北馬路延齡巷に仁山を訪ふて謝辭を述ぶ』と報告してゐる。仁山は元來歐米のキリスト敎が、支那各地に敎會學校を建てて布敎の手段としてゐるのを見て、佛敎もこの種の方法を用ひねばならぬと考へてゐたので、本願寺の事業に大いに讃成し、援助の勞を惜まなかつた。八月一日慧日院主敎が出張、日支官民を招待して開堂式を擧げた際には、仁山は自ら進んで左のやうな祝辭を述べてゐる。

『維れ光緒二十五年己亥正月吉日金陵日本淨土眞宗本願寺は、東文學堂を特設し、以て華人に敎ゆ。一は言語學課、二は普通學課なり。誠に運經にいふところの治世言語、資生業等の如く、みな正法に順ふものなり。溯れば二十年前より、本願寺を上海に創立し、今や大法主現如上人その弟勝信公に屬して、來華せ

しめ、本願寺を杭州に設け、十人を以てこれに居らしめ、また本願寺を蘇州に設け、三人を以てこれに居らしむ。金陵は南朝の勝地たり。而して北方心泉上人と一柳等五人居る。上人は七祖の衣鉢を傳へ四賢の領袖たり。道のよる所を知る。元魏に在りては則ち曇鸞法師あり、唐に在りては則ち導綽法師、善導法師あり、三師の著作、華に傳はらずして、日本に傳ふ。今は則ちまたこれを華に播む。あに時節因緣にあらざらんや。留學の諸君子、或は教旨を宣し、或は和文を授く。たゞに出世の良因なるのみならず、また處世の勝緣なり。然れば則ち大法主の德、それ限量すべけんや。』

開業當初の東文學堂の狀況は、籠師から慧日院主教に宛てた左の報告によつて、ほゞ全貌が察せられる。

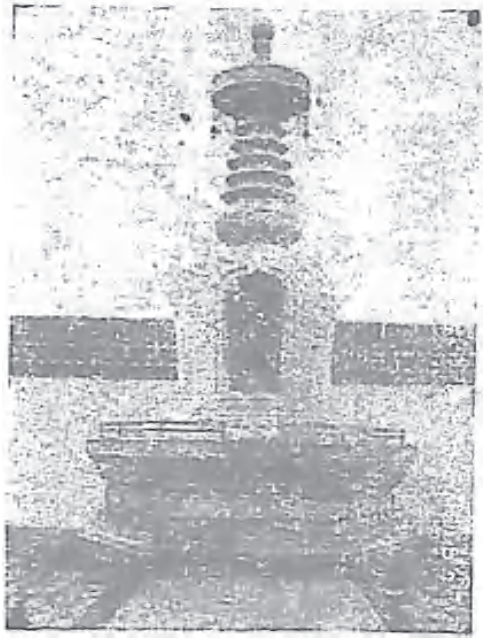
『東文學堂に通學する子弟名籍三拾餘名なるも、不缺登校するもの二十名なり。授業の方法は、甲乙丙丁の四類に分ち、甲部は日本高等讀本の第五卷を授け、丁部は五十韻を教ゆ。……生徒の月謝は一人壹圓つゞ徵收し、目下學堂に關する會計は、一柳これを處理す。該地に駐留する者の語學成績頗る良好にて、就中一柳の如きは、著しく其歩を進め居るものと見親候。要するに開堂日なほ淺きにも拘らず、彼此の信認發達、比較上良好と被存候。』

當時南京の本願寺内には、在留邦人のために般若波羅密多會なるものも開かれ、楊仁山を聘して講演をして貰つたらしい。仁山の遺稿中には、その講演の草稿が四篇も殘つており、その第一篇の冒頭に、

『いま淨土眞宗の法主、佛敎を振興せんがため、般若波羅密多會を開設せらる。鄙人、招きに應じて參上支那佛敎古今流傳の相を演說いたすことゝなつた。』

と述べてゐる。仁山はまた南條文雄師としきりに書翰を往復して、梵語や經典に關する知識を吸收する旁ら、本願寺の眞宗敎義に批評を加へて、多くの示唆を與へた。明治初年に支那へ來て東本願寺の開敎を行つた小栗栖香頂師の所論などを對象として、大いに忌憚なき意見を吐いてゐる。『闢敎篇』はそれ等の批評文を集めたものである。

光緒三十三年（明治四十年）仁山は、日本佛徒の敎育事業に對する苦心、經營の有樣に刺戟を受け自らもまた金陵刻經處內に、祇洹精舍といふ佛學堂を開設した。こゝでは佛學と漢文と英語を課し、佛學は仁山が自著『佛敎初學課本』を用ひて講義した。漢文は李曉敦が擔任し、英語は蘇曼殊が招かれて敎鞭をとつた。蘇曼殊は豫て仁山に私淑してゐた一人で、彼は當時の學堂の模樣を友人劉三に次のやうに書送つてゐる。



楊仁山の墓

『こゝの校務は、準備全く成つた。目下鎭江、揚州の諸大刹から僧侶を招聘すべく照會中だ。恐らく來月には開講出來るだらう。漢文の敎授は、李曉敦先生ださうだ。經典の講義には、仁老が當られる。まア二

三年後を見て貰ひたい。僧衆がよく精進を積んだら、日本や印度に留學させて、梵語を習はせる。佛敎の復興は、こゝから始まるかも知れんぞ。』

祇洹精舍は二十余名の學生を收容して開校し、相當成果を擧げたが、二年と經たぬうちに、經費に困つて閉鎖した。そこでこんどは佛學研究會なるものを起して、毎月一回經典を講義し、これは死ぬまで續いた。宣統三年秋病を得、再び起つ能はぬと知るや、八月十七日研究會同人を招集して金陵刻經處の後事を託し、その場で瞑した。時に辛亥革命の前夜であつた。卒年七十五。實に仁山の如きは、日支文化の溝通を念とする者の、均しく記憶せねばならぬ先輩であらう。

いま延齡巷の刻經處をのぞくと、屋宇は落ち、碑石は倒れ、僅に數人の職員が、墓塔と板木と佛書を番してゐるに過ぎない。特別保護建築物と指定した特務機關の布告が貼られてはゐるが、訪れる人とてない。誰かこの刻經處を修復しやうとする特志家はゐないだらうか。(完)

登小倉山拜袁隨園先生墓

程淸

離小倉山數百武、有婦人哭於墓者而哀。山坡叢塚、正在大規模發掘。與夫告余曰、此五台山也。余惟藁隨園墓無恙、俾先生吟魂有託耳、踞石坐久、悲憤成詩。

佳節登臨我獨來、隨園遺址已蒿萊、百年史跡神州血、大地西風野哭哀、亡國何人爲鬼蜮、感懷半日坐莓苔、菊花開徧秋無色、白骨驚看已作堆。

廿六年十月九日、南京城破後、死男婦老幼十餘萬人。

先生是處託吟魂、萬點歸鴉噪夕曛、一代才人開國運、幾家好句唱秋墳、置身循吏儒林傳、壽世驚天動地文（白太傅登李白墓詩云可憐荒塚窮泉骨曾有驚天動地文）太息中原無漢學、羣賢謀國正紛紛。

日本博士服部宇之吉詔各學生云、諸君宜講求漢學。中國現在不要漢學。十餘年後、中國人將來日本求漢學云。

中國地理學的現狀

王鍾麒

地理學我國古稱輿地之學，禹貢水經，即其名著，惟我國古代重記載而不重說明，重考證而不重考察，致水經中大江源出岷江，以誤傳誤，莫可究詰，憶及幼時蕭中孚先生曾出一題，曰黃河重源說，囑余敍述，幾難握筆，蕭先生特撰一文，令余閱讀，至今思之，猶屬莫明其妙焉，學校未興以前之地理學專攻較少，其所研究，大率類似，下所述者，爲學校已興以後之地理學概況，大致可分成下述二時期：

一、萌芽時期　即學校已興以後至民國十六年間之時期是也，歐洲新地理學之發生，亦不足百年，自 Humboldt, Ritter, Richthofen, Ratzel, Vidal de la Blache 學者輩出，美國與日本，地理學次第發達，我國學校初設立時之學制，大率抄襲日本，課程有地理一門，自不能不有人教授，當時之京師大學，優級師範，以及兩江師範，即以後之高等師範，或請科舉出身，當時以富于輿地學說者擔任，或請日本人士擔任，或由日本留學研究史地者擔任，其所習者爲課本，或自編之講義，無所謂考察，更無所謂研究，即當時各校，亦以屬於師範性質者居多數，以職業教育關係，分系亦不單純，或爲史地組，或爲文史地組，自民國十六年止，各國立大學或國立高等師範，均滯留於此項狀態之中，但此時期中地理學雖未發展，而新地理學之萌芽，亦

在此時期中發生，其影響於後日之地理學者有二：一爲地理學界前輩之努力，斯時對於地理學最努力，而最負盛名者，南有姚明煇先生，北有張相文先生，姚先生主講南江師範蘇州優級師範以及武昌高等師範，對於沿革地理尤多貢獻，張相文先生雖屬籍隸泗陽，久居北京，創中國地學會，刊行地學雜誌，兩先生對於新地理學，所知雖少，但開後日研究地理之風氣者，姚張二先生與有力焉，斯時較二先生稍後者，厥爲白眉初先生與劉玉峯先生，白先生主講於北京高師，專攻中國地理，雖未能實地考察，但已通函收集現實資料，劉先生畢業於廣島高師，亦主講於北京高師，其出版之自然地理，與日本明治末年大正初年之所出版者不相上下，其功實不可沒；二爲受有關學科發展之影響，我國學術在世界上，負有聲名者，當推地質學，民國初年自章鴻釗、丁文江、翁文灝三先生回國後，竭力提倡，其教育此項人才者，則有地質訓練所，及北京大學地質系，其從事調查與研究者，則有地質調查所，至民十後人才輩出，致力於此項學術工作者益多，如謝家榮、張席禔輩均負盛名，其不與丁翁二先生有師弟關係者，則有李四光、朱家驊諸先生，而李四光先生又以世界學者名于世，且北方之翁先生等又在各大學史地系兼課，遂使地學方面，演變甚速，同時南方之竺可禎先生，本爲氣象學家，以主講于南高東大之文史地系內，亦授地理功課，而 Davis, Huntington 兩大地理學家之研究方法，一一介紹，致氣象與地理，幾成合流狀態，并獎勵學生，出外留學，故後日中大之胡煥庸，武大之韋潤珊，浙大之張其昀，氣象研究所以研究氣象與水文著名之呂炯，均出其門下焉。

二、發展時期　即民十七以後之地理學界是也，斯時期謂爲發展時期可，謂爲啓蒙時期亦可，斯時期斯學之發展，實與國民政府之成立大有關係，國民政府成立後，蔡元培先生任大學院院長，繼任中央研究院院長，自後科學社在我國政治上學術上勢力益大，故華中之中央大學，華北之師範大學，均於民國十七年設地理系，而朱家驊先生任廣州中山大學副校長時，亦於民國十八年設地理系，初聘 Kredner 繼聘 Penzer 兩博士主持其事，而北方清華大學之地學系內，亦分地質地理兩組，至民國二十一年，各國立大學復以經費穩定，日圖發展，加以政府及學術機關之提倡，故斯時期之發展特徵，可得而言者，則有下述二點：

1. 地理教育　斯時之地理教育，亦可分下二項述之：

甲、大學地理系之努力　自上述言之，以國立大學之設系關係，故我國地理學之研究，分成三大中心：一爲華中之中央大學地理系，以校處首都，故與國防委員會，（後改名爲資源委員會）陸地測量局，氣象研究所，取密切聯絡，發展亦較速；二爲華南之中山大學地理系，以朱家驊先生之提倡，故預算亦特多，即自考察費一項，月有野外考察費二百元，年有遠地考察費七八千元，故是校具有實地考察能力之後進亦特多；三爲華北之師範大學地理系，此校前以人事關係，常呈滯留狀態，民國二十四年囑余前往改革，翌年黃國璋先生亦舍中央大學而至師大，中英庚款會年補助二萬元，充實設備，并贈特別講座，二十六年曾聘 Roxby 來華講學，校中并發行雜誌及各省地形掛圖，均因事變而功虧一簣，斯時期之各校

設備，各擁有圖書館，製圖室，即講堂上均有幻燈設備，而學校當局，對於考察費用，亦次第增加，苟無事變發生，再假以十年之時間，定可與我國之地質學並駕齊驅也。

乙、留學生之派遣　民國二十一二年時，其在歐美專攻地理學者，除清華大學之張印堂先生外，僅中大之余與胡煥庸黃國璋兩先生，時清大之洪紱先生，中山大學之孫宕越先生等均留學未歸，人才過少，適熱心提倡地理教育之朱家驊先生，任中英庚款董事會董事長，該會每年選派學生赴英留學，學額甚多，故自二十二年起至二十七年止，年派四名或二名赴英專攻地理學，指定門類，完畢時并得延長年限赴德法研究，時余與胡黃張三先生常爲考試委員，命題甚高，選拔極嚴，選取後并須在國內作研究或考察工作半年後始再出國，斯時以政府與學術界之提倡，各大學地理系畢業生之自費出國者亦甚多。

2. 地理研究機關　斯方面亦可分下二點述之：

甲、學會　我國地理學方面，在二十五年前，本無獨立之研究機關，均由各大學地理系負其責，民國二十年中山大學 Kredner 率領學生之雲南考察，民國二十三年中央大學地理系之兩淮鹽墾區考察，民國二十三四年黃國璋維斯曼 Wismann 兩先生之雲南考察，或由學校出資，或由政府資助，而研究方面，亦無共同出版機關，故民國二十二年由翁文灝、竺可禎、胡煥庸、張印堂、黃國璋、王鍾麒等發起組織中國地理學會，年出季刊四冊，并於每年夏季開年會一次，并宣讀論文，此項季刊，刊末並附西文紀要，

以與各國交換，而北京圍城之中國地學會之地學雜誌，民國二十六年春，張星烺先生（張相文先生哲嗣、北京大學之老教授、）交余接辦，其所刊載者，亦屬研究論文，惟現均以事變而中止焉。

乙、地理研究所　我國中央研究院、其下幷有各研究所之設立，其中李四光先生主持之地質研究所，本與實業部翁文灝先生主持之地質調查所齊名，自民國二十五年朱家驊先生任中央研究院總幹事後，即囑Wismann先生計劃設立地理研究所，後附設於地質研究所內，事變時移至廬山，近聞黃國璋先生主持其事，全面和平以後，地理研究，益形發展，自可預卜焉。（完）

登飛行機作　程清

今宵安穩到天衢皓皓清光月滿裾欲爲前因叩天帝五雲深處漫踟躇
雲路茫茫不記程居然列子御風行何當手挽天河水洗盡人間甲與兵
欲乞天孫雲錦裳更持北斗挹瓊漿人間爭說游仙好喜我垂天雲翼長
春水船眞天上坐桂花香好月中採嫦娥若肯分靈藥出入人天意更酣
不知今夕是何年歸去乘風我欲仙爲告媧皇休惜別再來應補有情天
重來海國已斜陽願得長繩繫日長一霎光明回大地煥乎大塊有文章
燦燦星辰萬點秋月光如水古今流我來愛此橫天彗掃盡人間萬古愁
披襟當此大玉風玉宇瓊樓入望中哀此下民從所欲叩閽有路感斯通
辟言辟世更辟地蹙蹙于今靡所之雲白天空一俯仰嗟乎逝者已如斯
何日哈雷裂地球不須更作杞人憂硝烟彈雨人間世民亦勞之汔可休

月身菩薩

内山完造

今から二十何年か前の或る雨の日、私は蕪湖で友人前田耕作氏につれられて郊外の月身菩薩を見に行ったことがあつた。メカルミの野路をビショ〳〵に濡れて、廣い野中に捨石の様にポツンとある廟にたどりついた二人は、壁に埋められた石の碑文を讀んで見た。何んでも相當の長文であつたが、今は全く頭に殘つて居らん。たゞ此寺の和尚が死んで葬りをして三年目とかに月身菩薩になつたと云ふ様なことであつたと思ふ。月身菩薩とは實はミイラのことである。

二人は門をくゞつて寺内に進んだ。何處に置いてあるのかと、キョロ〳〵と見たが一向ミイラらしいものがないので、寺僧をつかまへて話しかけたら、此處にあると云ふて部屋の中に造られた六角形の(?)塔を指したので、見ると正面は硝子で顔が見へる様にしてあるが、其顔が金粉か金泊かで塗つてあるのだから、ミイラとは思はれない。若しも月身菩薩と云ふ小さい横額を見なかつたら、普通の佛像とより解らなかつたであらうと思ふ。和尚の指す金塗佛の顔をよく見ると、眉毛が人工でない。鬚も人工でないらしい。そして齒が又自然の齒らしい。座禪して居る姿である。私共二人は出來る丈け念を入れて見た。イヤたゞ見るだけ

でなく、塔の后ろから手を差し込んでナゼて見たりたゝいて見たり色々のことをして見て、どうやらこれは本物のミイラらしいと云ふ見當をつけた。

丁度其頃東京では何やら博覽會と云ふのが開會中で、其博覽會の呼び物の一つに、座禪館と云ふのがあつた。それは實は福建省の田舍から曾て私共の知人であつた某が買ひ出して東京へ運んだものであるのだ。幸か不幸かこの座禪館のミイラは人間によつて大きな借金が負はされて、遂に執達吏によつて差押へされるに至つたとのことが新聞に出て居つた時であつた。

私共二人はトウ〳〵腰を下ろした。和尚はお茶を持つて來た。煙草もすゝめて吳れた。前田氏はボツ〳〵と話かけた。月身菩薩の身賣りイヤ身柄の買ひ受け話であつた。和尚ニヤリ〳〵とまんざらでもない樣な面もちで話を聞いて居つたが、サテいよ〳〵となると不行〳〵と來る。前田氏遠謀深慮、祕術を盡くして打ち向はれること實に半日、遂に落城するに至らず、乍殘念吾等二人はハツハツハツハツハツと笑ひながら再び雨の中を街へ歸つたのは夕方近い頃であつた。交渉は遂に不調に終つたとは云へ、確實にミイラの存在が解つたこと丈けは無駄ではなかつた。

其后私の漫談には度々このミイラを火鉢のはたでは登場さしたが、未だペンには上らなかつた。今日中居氏が來られてはからずも蕪湖のミイラが大繁昌して居るとの事を聞いて又笑つたのであるが、何日であつた

か氏が未だ軍に居られた一日、蕪湖から來たと云ふ事からであつたと思ふ又一席ミイラの話をした處が、それは面白い、一つ歸つたら行つて見ると云ふて路順など聞かのた。私も實は一度行つた丈けでありもう二十何年昔の事であるのでハッキリしなかつたが、長街を眞スグに歩るいて野路へ出たと記憶のまゝを話して分かれたのであつた。今日の話によると氏は蕪湖へ歸るとスグ敎へられた通り長街を何處迄も眞スグに野路へ出て、月身菩薩の安置處を探がし求めて行かれたが、其頃は未だ一般農民なども日本の軍人に對しては一種の猜疑心を持つて居つた時でもあり、ナカ〳〵敎へて呉れない。何處で誰れに聞いても知らぬ不曉得、不知道で要領を得ない。一時はコイッ內山の親爺の出馱羅目にひつかゝつたなと迄思ふたが、尙ほ執拗に探がして居つた處、トウ〳〵一人の僧の口から所在を敎へられて喜び勇んで敎へられた路を歩るいて行つて廟についた處が、表門には煉瓦を積んで丸で空屋の樣になつて居る。クル〳〵廻つてやつと中にはいる事が出來て月身菩薩の事をたづねたが、ホントの事を云はないので通譯を通じてなだめすかしつ又おどしつしてトウ〳〵其安置された塔を見つけた時の嬉しさ、成程顏を金塗りにした立派なミイラである。和尙には心配するな、日本軍で充分保護してやる、參詣者には充分見せてやれと云ふて隊に歸つて其話をすると、吾れも〳〵と見物に出かける始末だ。それからそれへと傳へられて、今日では立派な蕪湖名所の一つになつて居る。日本人の見物人や來拜者が多いので

先生ミイラか

と日本人の顔さへ見れば云ふ案内者まで出來て大繁昌して居る。寺の和尚も喜んで居るよとの話だ。廿餘年昔のことが思ひ出されてこの漫語となつたのである。

ミイラ買ひそこねてミイラにもならなんだが漫談になつて遂に名所となつた話とでも云ふたらよいのであらう。

中國文學之南北宗派論

朱右白

諸位，這個題目，本來叫做「江南文學之特殊作風」。因爲，既講到「南」，就有個「北」的對待。就好像講到「古文學」，就有個「今文學」的對立名詞。「古」，「今」是時間的對立，「南」，「北」是地形或空間的對立。

尤其在中國，圖幅的廣大，以及古時交通工具的缺乏，有長江和黃河兩大流域，橫亙着中原數千里的地面，一切學術和文藝，都形成對峙的現象，文學不過是其中底一部分，然而就我們看來，已經有很多材料和證據，可資專門家的探討。今天所講，不外下例幾種範圍：

一、詩經和楚騷的區分

二、南北朝文學

三、詩歌方面

甲、詩之南北宗派

乙、詞之南北宗派

丙、南曲和北曲

支配中國全部學術思想，有兩大派：

一派是黃河流域的思想，牢守自堯・舜・禹・湯・文・武・以來一貫之道德主張，做人方法，以實踐爲本，始自修身・齊家，終於治國，平天下的儒家思想，在文藝方面，就產生了一部詩經。

一派是長江流域的思想，就是以老・莊爲本位，寡欲無爲，思與天地精神相往來的道家思想。莊子這部書，尤其神思縹緲，令人不測。這就產生了南方文學正宗的離騷。

在形式方面，詩經以四言爲中心，字句簡短，是北人的語法。離騷篇內多七言，音節舒緩得多，是江南人之自然語勢。唐絕句選序：

……四言爲華族原始詩式，楚騷有作，漸多七言，殆南方之族，聲音疾徐，與中原殊致，故歌詩各極其意，而詞有短長，

再從山水方面說：屈原是楚國人，楚立國江漢之濱，山川奇麗，生活優美，人民重精神而賤物質，信鬼巫，故其思想自然趨於道家一方面。楚辭中多帶楚語，如：「兮」，「些」等語尾字，如「羌內恕已以諒人兮」的「羌」字就是「你何爲」的意思。這些都足證明楚辭是十分帶有地方文學性質的作品，和典麗矯黃的中原文學，作風乃有天壤之別。

以上是說詩經和楚辭的不同。

……

南北朝文學，整個對立起來。著名的駢四儷六的六朝文，和子夜歌、昔昔鹽，都是南朝的產物。還有如同：

梁武帝江南弄：

衆花雜色滿上林，舒芳曜彩垂輕陰，連手蹀躞舞春心，舞春心，臨歲腹，中人望，獨踟躕。

沈約六憶其三

憶眠時，人眠獨未眠，解羅不待勸，就枕更須牽。復恐旁人見，嬌羞在燭前。

一種充分女性文學的意味，是南朝一貫的作風。

北朝文學，以講求實用爲主，一反南朝之清麗綿遠，而爲剛貞樸茂。這是一重在「理」，一重在「情」的自然結果。但是自從南朝的庾信和王褒兩人，到北朝去做官以後，把這種哀感頑豔的文學，帶到河朔塵沙之地，倒覺別有風致。

錄通鑑一段，以見北朝文學之消息：

晉氏以來，文章競爲浮華，魏宇文泰欲革其弊，命蘇綽作大誥，宣示羣臣，戒以政事，仍命自今文章，皆依此體。

詩歌散文，既一一不同，樂府更不相襲。隋書音樂志有一段說

魏世來自雲朔，肇有諸華，樂操土風，未移其俗；至道武帝皇始元年，破慕容寶於中山，獲晉樂器，不知采用，皆委棄之。

南北文藝，既然各走極端，於是後起有識之士，發爲調和的論調，而有如范文正奏上時務書所說：

觀虞夏之書，足以明帝王之道；覽南朝之文，足以知衰靡之化。故聖人之理天下也：文弊則救之以質，質弊則救之以文。

又曰：

質文相救，變而無窮。

這是南北朝文學之特殊情形。

五、七言詩，自漢魏以來，亦儼然有南北之彊界：唐山夫人安世房中歌・古詩十九首・蘇李贈答・蔡琰（悲憤詩）・陳思・阮籍・左思・鮑照・隋煬帝（飲馬長城窟行：氣力雄古）・斛律金・高適・岑參・杜甫・元好問・薩都剌・皆屬北派。錄一首以見其例：

刺勒歌　斛律金

刺勒川，

陰山下，
天似穹廬，
籠罩四野。
天茫茫，
野蒼蒼，
風吹草低見牛羊。

陶潛・謝靈運・謝朓・梁元帝・陳後主・王維・李白・白居易・蘇東坡・陸放翁・范成大・及江西派諸人，皆屬南派。

大半可以地域分的。但有少數北人而生長南方，或南人而遷移北方氣質移換過，隨卽影響到詩歌裏。如張說唐洛陽人；唐書張說列傳：

說謫岳州，而詩亦悽惋，人謂江山助云。

明金鰲，字在衡，隴西人，僑居南京，徧遊江南山水，若京口，姑蘇，故爲詩風流宛轉，得江左淸華之致（見列朝詩集）。如「楊柳晚風靜，芙蓉秋水香」（徐太傅園），「馬上逢春草似煙」（李谷陽），絕不似黃沙大漠氣習。

再看元人阿爾粹熊虎圖：

蠟蛤塞外白草凋，平沙颯颯翻鵰鶚，山深無人日色淡，黃雲湧出如奔濤……

何等氣概？

還有湖海詩傳三十七卷載：汪學金（敬箴）過趙北口，寫北方風情甚悉：

燕趙中原地，蒼涼獨客過。西風吹易水，落日下滹沱；大澤龍蛇動，荒原雁鶩多。市中屠狗散，無復有悲歌。

最好的調和南北詩派的說法，要算姚江張翥題田靜修大令詩稿（南歸集）的一首詩裏說：

北人多亢音，音亢失悲涼；南人多繁詞，詞繁失淫荒。性或移習俗，詩便分界疆，惟秉中和氣，發爲古文章，無南更無北，音節盡悠揚。君自塞外游，服官來我鄉。吟詩不落俗，繁亢兩無傷。意者有衣鉢，異人傳光黃，所以性獨全，不狷復不狂。

這是詩裏的南北宗派。

詞的南北兩派，更加明顯。花間派（以南唐二主爲中心。）·晏殊·柳永·張先·周美成·秦觀·姜夔·爲南派，又稱婉約派。北派：蘇軾·黃庭堅·辛稼軒·劉過（改之）·元好問等，又稱豪放派。作風則：

南派　清遠婉約、幽麗淒豔、音律調和、綢繆婀娜。

北派　清奇雋逸、高曠沉雄、浩氣沖霄、才情橫溢。

更不煩多舉例子，試一讀蘇長公大江東去，和柳水「楊柳岸曉風殘月」之句，卽可悟一是關西大漢的本色，一是南國佳人的風味。不過，詩歌這件東西，是富有傳染性的，故不一定南人都爲南詞，北人專爲北詞！其中有師承，個性的關係，要把這範圍詞（或一切文藝）的三種要素，卽

師承

個性

環境（卽地理和時代關係）

調和一下，才最後決定爲派之誰屬？不過大抵是這樣的。例如詞苑叢談載：

元遺山集金人詞。爲中州樂府，頗多深裘大馬之風，

可知環境的影響，是終究脫不了的。

這是詞的南北派。

元曲更有天然的疆界，就是所稱爲「北曲」與「南曲」是。元代興起北方，帶來北方的民族性，充滿「氈帳湩酪」的氣味。加以宋代的詞，到這時間已不合北人口味，就一變爲曲的演進。據本師王靜安先生宋元戲曲史裏說：

元代南北二曲，佳處略同，唯北劇悲壯沉雄，南戲清柔曲折，此由地方之風氣使然。

元曲作家，分爲三個時期：

一、蒙古時代（約一二六〇——一二八〇）

二、一統時代（約一二八〇——一三四〇）

三、至正時代（約一三四〇——一三六〇）

第一個時期，作家最盛，現存的作品亦多。如關（漢卿）・王（實甫）・白（樸）・馬（致遠）・在北方都是最有名的！第二期的作家，大多居住南方，漸失其「天高風緊」的氣象，除鄭光祖・宮天挺・喬吉三家以外，餘似無足觀；第三期更是疆弩之末。

這是以元一代分爲「南」・「北」的（第一期爲北派曲家。第二三期可算是南派作家）；若以元・明兩代來說，則元爲北，明爲南。王元美藝學厄言：

北曲字多而調促，南曲字少而調緩；北宜和歌，南宜獨奏；北曲爲貫酸齋・馬東籬（卽致遠）等所創，南曲則高則誠全（明人，所作有琵琶記）所創也。

內容體製，亦大大不同。這就是元曲以雜劇爲主，一本四折，一人獨唱之戲，一變而爲明・清間「傳奇」之盛行；蓋元曲以拙樸勝，至此則以婉麗爲尙矣。如牡丹亭（湯顯祖作）遊園・驗夢齣中，旦唱諸曲：

夢回鶯囀，亂煞年光遍，人立小庭深院。遶地遊
姹紫嫣紅開徧。似這般都付與斷井頹垣。良辰美景奈何天，賞心樂事誰家院？　皂羅袍
遍青山啼紅了杜鵑，荼蘼外烟絲醉軟。

等詞，寫女子懷春之情，細膩入微；與關漢卿西廂中：

碧雲天，
黃葉地，
西風緊，
北雁南飛！

一種緊張的弦調，簡直有霄壤之別。相傳漢卿作此曲。至「北雁南飛」句，便患嘔血而死，以後的文字，都是王實甫續成的。

這是曲中的南北派。

諸位，我講到此地，急想要收束我的文章。我記起以前有這末一個很有趣的故事，說：「後五代時，北周派使者到嶺外去，和南漢通好；款待他的人，有意要誇贊自己地方物產的美，送他一枝美麗的茉莉花，使者問起這花的名稱？說：這叫「小南強」呀！意思是說，這在北方沒有。到後來，這位南漢主鋹，親自跑到洛陽去，

做北庭的俘虜，紳士們好事的特請他去賞牡丹，他問這花叫甚麼？紳士們帶笑說：「叫大北勝」。「大北勝」和「小南強」，恰是個妙聯，我想中國整個南北兩大派的文藝，正合色以靚麗幽秀的茉莉，和高貴富豔的牡丹，來比擬他。

附錄

（一）吳越本位文化

南方各地發現古物，足以證明古代吳越已文物燦然。且從此種古物與北方發見者相比，則迥然不同，蓋各有其系統。年來上虞・蘇州・海鹽・嘉興及上海・崑山等處陸續發見者，花紋形式均極相同，足以證實古代吳越有其本位文化。（見衛聚賢：中國考古學史附錄）

（二）南施北宋

施愚山，字尙白，江南宣城人；宋荔裳，字玉叔，山東萊陽人。二人因其產地而作風不同。南方產之愚山，溫柔敦厚；北方產之荔裳，雄健磊落。（陳安仁：中國近代文化史）

（三）地理環境與人生關係

美國賽謨潑爾女士（Miss Ellen C. Semple）說：「人是地球表面的產物。這話的意思，不僅說人是地球的

孩子——她的塵埃的塵埃；而且說：地球撫育他，供養他，教訓他功課，指導他的思想，使他受磨難，鍛鍊他的身體，砥礪他的心智，給他航行和灌溉的問題，而同時又給他解決這些問題的暗示。」可見地理環境對於人生的關係眞是密切。（美國達肯氏："Wilson S. Dakin" 著："Great Rivers of the World: A Story of their Service to Man"「世界大河對於人類貢獻的故事」胡蘇氏譯序）

江南天文志

——天文儀器を中心として——

森川光郎

春秋兩漢の如き、中國天文學の最も精華を發揮した時代は、首都が凡て黄河流域の北方にあつた爲め江南には關係が少い。世界最古の天文臺と言はれる周公測景臺は洛陽の近く登封告成鎮にあり、春秋三十七の日食記錄も北方のものである。三國時代孫權が始めて建業に吳王を稱へてより以後は、晉宋齊梁陳吳南唐南宋明太平天國國民政府等何れも南京を國都とした。依つて三國以後の江南天文志を、天文儀器を中心として概觀して見る事にする。三國時代は吳蜀魏三國相鼎立して曆法も夫々別々のものを使用し、蜀魏の四分曆を用ひたのに對し吳は乾象曆を用ひた。魏はその後度々改曆を行ひ、景初元年景初曆を造つて後は、二百余年の間之を使用した。この點より見ても、南方に比して北方の文化程度の高かつた事が想像される。この造曆改曆には天體觀測が必要であり、之は又觀測器械の良否に關係を持つ。從つて天文儀器の歷史は、天文學史の一斷面と謂へよう。

三國吳の時代に關しては

「吳時、中常侍廬江王蕃善數術、傳劉洪乾象曆、依其法而制渾儀。」（晉書天文志）

「陸績造渾象、形如鳥卵。」（宋書天文志）

等の記事がある。渾儀渾象の說明は、朱文鑫の天文考古錄によれば「大體六合三辰四游の重環湊合せるものを渾天儀と謂ひ、實體の圓球上に黃道、赤道、經緯線等を描き又星夜を綴れるものを渾天象と謂ふ。」卽ち渾儀は六合儀三辰儀四游儀より成るもので、六合儀とは水平環と並立二雙の子午環とより成るもので最外部にあり、その內測に赤道、黃道を表はす傾斜した環があり、之を三辰儀と云ふ。最內部には極軸の周りに自由に廻轉する並立二雙の環あり、之を四游儀と云ふ。又渾象とは斯る黃道、赤道、經緯線等を實體の圓球上に描いたもので、陸績の造つた渾象は、之が卵形をなして居たものであらう。

晉時代に會稽餘姚の人虞喜が歲差現象を發見してゐる。之は中國天文學史上の一新機軸と言へる。然し虞喜の論じた五十年に一度の差を生ずと言ふのは小に過ぎ、實際は七十年位に一度の差が生じて來るのである又この歲差を實際曆の推算に用ひたのは、それよりは大分後の大明曆からである。晉より宋へ移る頃には

「安帝義熙十四年、劉裕入咸陽、得劉曜時所造渾天儀以歸。」（古今圖書集成）

又

「日觀臺在臺城、卽劉宋司天臺。」（明一統志）

とある所より、渾天儀を此の日觀臺へ置いたか否かは不明であるが、とに角南京へ持歸つたものと思はれる。

宋元嘉十三年太史令錢樂之が銅渾天儀を鑄たが、之に關し宋書天文志によると

「晉義熙十四年、高祖平長安得衡舊器儀、狀雖舉不緩經星七曜。元嘉十三年詔樂之更鑄渾儀。」

卽ち長安（咸陽）より持歸つた渾儀が古くて役に立たぬ爲め錢樂之に命じて新しく造らせた。徑六尺八分と云ふ。又十七年には徑二尺二寸の小渾天を作り、その上に巫咸甘石三家の星を三色に色分けして記した。その色宋書天文志によると「白黑珠及黃三色」とあり、隋書天文志には「白青黃等三色珠」と書かれ、天文考古錄には「朱黑白三色」としてゐる。次で二十年には何承天が元嘉曆を造る一方、漏刻を造り、春分秋分の晝夜の長さを各々五十五刻としたと云ふ。

齊の祖沖之、字は文遠、范陽薊の人で、數學を善くし圓周率を計算した人である。又曆術に明るく大明七年大明曆を造つたが、其際歲差を實測して曆の補正に用ひた。之が中國で曆に歲差の影響を入れた最初である。

梁天監六年始十二辰を百に刻んで居たが、後大同十年には百八刻に改めた。又沖之の子祖暅之は嵩山に銅表を造り、又日晷で測驗したが、表の高さ八尺あり、表の下には圭があつて、圭の上に溝を作り、此の中へ水を入れて其の水平を知る樣にしたと云ふ。水平を知る方法は其の後も皆之を用ひて居る。梁末には祕書府

で木製の渾天儀を造つた事がある。

陳の天嘉年間に朱史は昔の百刻制の漏刻を復活した。

「天嘉中、命史造漏、以古百刻爲法。」（隋書天文志）

二百年に亘る南北兩朝は隋の文帝により再び統一され、都は長安に移つたが、煬帝の僑慢はその權盛を保たしめず、僅か三十年足らずにして世は唐に移つた。唐時代には李淳風僧一行等の學者輩出し、觀象授時に著しき發展を見た。

唐より宋に入れば、文を以て國を立つと言はれるだけに世は太平にして、文學を始め諸學の勃興著しく、天文曆法も其の進歩見る可きものあり、開國より靖康まで百六十餘年間に九回の改曆を、又南渡してから宋末德祐まで百五十年間に更に九回の改曆を行つてゐる。

靖康の變により宋朝は江南の地に南渡したが、其の爲め太史局の文藉は散逸し、曆家は離散し、紀元曆も亦亡失した。爲めに紹興二年重ねて之を造つた。又測量の器は盡く金人の手に歸した爲め

「高宗南渡至紹興十三年、始因祕書丞嚴抑之請命太史局重創渾儀。自是厥後窺測占候蓋不廢焉爾。」

（宋史天文志）

卽ち紹興十三年始めて渾儀を造つたとあるが、律曆志によると

「紹興二年始議製渾儀。十一月工部言渾儀法要當以子午爲正、今欲定測樞軸極合差局官二員、詔差李繼宗等充測驗定正官。後造畢進呈日同參詳指說制度官、丁師仁李公謹入殿安設。」

又高宗本紀では

「紹興三年春正月辛未、造渾天儀。」

となつて居り、何れが正しいか不明であるが、南渡後渾儀の製造の氣運が盛んであつた事は想像せられる。

又律曆志には

「紹興三年正月壬戌、進呈渾儀木樣。壬申太史局令丁師仁等言省識車都渾儀四座、在測驗渾儀刻刻漏所曰至道儀、在翰林天文局曰皇祐儀、在太史局天文院曰熙寧儀、在合臺曰元祐儀。每座約銅二萬餘斤、今若半之當萬餘斤。」

この樣な記錄もその現れの一であらう。四つの儀器をともかく各々別々の天文關係の官所へ置いたと云ふ事は、當時觀象授時が餘程活潑に行はれてゐた證據であらう。

紹興七年には四川師司進資州なる人が、唐の苗制に從つた新式蓋天圖を造り、携帶に便なる故行軍中の候驗にも勞せずと言つてゐる。

紹興十四年太史局より渾儀を製せん事を上奏した際、高宗自ら

「朕已就官中製造範制、雖小可用窺測、日以晷度、夜以樞星爲則、非久降出第當廣其尺寸爾。」（宋書律曆志）

と語られた所より見ても、當時天子自ら天象に關し非常なる智識を持つて居られた事が解る。結局宰相秦檜の推擧により內侍邵諤が專ら之に當る事となり

「久而儀成、三十二年始出其二寘太史局、而高宗先自爲一儀寫詩宮中、以測天象其制差小。」（宋書天文志）

出來上つた渾儀の性能はなか〳〵優秀であつたらしい。構造は矢張り六合三辰四游の三儀よりなり、第一重六合儀の大きさは「陽經徑四尺九寸六分闊三寸二分厚五分」であつた。

元の出現により政治の中心は再び北方に移つたが、世祖の偉業は遠く西域に迄及んだ爲め、彼地との交通路開かれ西方文物の移入あり。こゝに中國文化史上一新紀元を劃する事となつたのであるが、中國天文學史に於ても世祖至元四年札馬魯丁始めて西域儀象を作り、郭守敬又十三座の儀器を造る等劃期的なる進步があつた。又郭守敬の造つた儀器により全國二十七個所の測量を行つたが、南京もその中の一地點である。勿論その觀測は非常に簡單で、北極出地度だけしか出てゐない値は三十四度となつてゐる。南京の緯度は大體三十二度三分半である。

元の末期には南京に於ても觀象臺建設の事があつたらしく、嘉慶江寧府志の記す所によると

「觀象臺元至正六年建。明改爲欽天臺。」

となつてゐるが、南京天文臺記には

「一二八〇年十一月元天祖詔修正曆法。欽天監諸臣具奏。開封府先朝遺留天文儀器甚多。然無一足裨實用。帝於是重造渾天儀日規及其他儀器。並命每器一式製十三分。分賜各行省。南京天文臺之建築。蓋卽規畫於是時。其地發見之儀器。亦卽此十三分之一。使用京官書之紀載爲可信。則南京天文臺之建築。動議雖在於一二八〇年世祖之朝。而實施則直在百年以後。卽一三八一年也。」

卽ち元至正年間に建築の動議はあつたが、實際造つたのは明洪武十四年だと云ふ。又天文考錄には

「洪武十七年設觀象臺於南京鷄鳴山、造觀星盤。」

と書いてゐる。又明會典凡本監にも

「觀星有盤係洪武十七年造」

とある故十七年說が一番確からしい。又此頃燕京から郭守敬の造つたもの及び以前より在つた儀器類を江南に遷したと言ふから、之等は鷄鳴山に置かれたのであらう。

南京に於ける天文史蹟として最も重要なるは鷄鳴山で、前述の觀象臺は何れも之を指してゐる事は疑ひな

所である。胡煥庸の鷄籠山觀象臺故址與建氣象臺記によると

「世界天文氣象學史上に於て價値の卓絶せるは、金陵鷄籠山の觀象臺に過ぐるものなし。鷄籠山は金陵城北に在り、或は鷄鳴山、或は欽天山とも名づくるも、現在の俗稱は北極閣なり。宋寰宇記によれば『鷄籠山在縣（上元）西北九里、西接落星岡、北臨栖玄塘、輿地志云、其山狀如鷄籠故名』又明一統志には『鷄鳴山舊名鷄籠山。』康熙江寧府志には「明初於鷄籠山巔置儀表以測象緯、名觀象臺亦曰欽天山。」嘉慶江寧府志には『觀象臺西卽北極閣』、光緒江寧府志欽天山注には『俗曰北極閣。』卽ち鷄籠山、鷄鳴山、欽天山、北極閣、北極山等は異名なれども何れも同物なり。鷄鳴、欽天、北極は共に後に起りたるものにして原は鷄籠山ならん。」

鷄籠山の最も古い天文記錄は、既に述べた明一統志の「日觀臺在臺城卽劉宋司天臺」である。臺城は鷄鳴山から東北へ延びて居る六朝城壁の一部を呼ぶのであるが、日觀臺が城壁の上に在つたとは思はれないから、恐らくは鷄籠山に在つたものであらう。降つて元明時代に關しては既に述べた通りである。この明時代の觀象臺の遺跡に關しては南京天文臺記

「臺之遺趾。在山巔之平原。地形長方。廣約廿五釈至三十釈、長稍過之。其間有平房一所。門南向。爲占星者居室。又有高之臺。形四方。則所以陳列儀器。其器皆置於露天之臺上。」

によつて略相像されるが、今は勿論その跡を尋ねるべくもない。

既に述べた如く元世祖至元四年（一二六七年）に、西域の回々天文學者札馬魯丁は西域儀象を造つたが、又萬年曆を撰し、世祖は暫らく之を頒布せしめたと言ふ。元史によると至元八年には始めて回々司天臺を置いた。之から見ても回々曆は元時代に非常に重要なものであり、郭守敬の造つた授時曆も、回々曆を基にして造つたと云ふ人が有る位である從つて元の文化をそのまゝ受繼いたと言はれる明初期に於ては、回々曆が行はれたのは當然であらう。明は太祖元年に太史院使劉基を聘して大統曆を頒行せしめたが、之は殆んど授時曆と同一である。かく中國古來の曆法が改良頒布されると共に、回々曆が之と並立して行はれてゐた。傳統先の中國回教史によると

「洪武元年太史院を改めて司天監とすると共に回々司天監を並置す。十月元太史院使張佑回々司天監黒的兒阿都利等十四人を召して曆法を修めしめ、二年四月には再び司天臺官鄭阿黒等十一人を京に召して曆法を議せしめ天象を占す。三年司天監を改めて欽天監となし、天文、漏刻、大統曆、回々曆の四科を設け、監令を以て少監之を統率す。」

又洪武京城圖志によると

「欽天監在太常寺西、其測候臺在鷄鳴山。」

「欽天回々監在聚寶門外、其測候臺在聚寶山。」

洪武京城圖志官署圖を見ると、太常寺は正陽門（今の光華門）を入つて直ぐ左側にあり、その後側に欽天監があつて、大體通濟門（今の共和門）との中間位の處に當つてゐる。明初此の附近一帶は官署街で、皇城から見て欽天監は一番右後方の隅に當つてゐる。卽ち欽天監は此處に置かれて居たが、其の測候臺が鷄鳴山に在つた事は既に前にも述べた通りである。しかるに之に對して回々欽天監の方は別の地點卽ち聚寶門（今の中華門）外にあり、その測候臺は聚寶山（今の雨花臺）にあつたと云ふ。洪武京城圖志官署圖にはその何れの名も記されてゐない。しかし回々欽天監並びに其の測候臺が、この近傍にあつた事は想像に難くない。と云ふのは聚寶門を中心としたこの一帶が、回教徒の住居になつてゐたからである。元寧鄉土志によると

「明洪武二十一年建淨覺寺於三山街、以居西域歸府之人、爲南京有回教之始。正統元年徒甘涼寄居回教於江南凡五百戶、五百年來守其本教、不肯少變。」

又中國回教史によると「洪武元年禮拜寺を金陵に勅建す、此寺世宗の時に至り淨覺寺の名を賜はる、今南京建康路に在り」と言ふ。三山街は今の昇州路建康路に當る。南京の西南隅、この附近に回教徒の多きは今も變らぬ。こゝに問題になるのは洪武京城圖志聚寶山の註に

「在聚寶門外雨花臺側上多細瑪瑙石、因名聚寶山。金置欽天回々監于此。」

金が回々欽天監を此處へ置いたと云ふ事である。金の時此處に回々欽天監が置かれたとは思はれぬが、南宋時代或は元時代此處に回々天文臺が置かれたかも知れぬと言ふ事は一應考へられる事である。又新京備乘と云ふ本の中に

「南門は又聚寶門と名づく。其の門檻石高さ二尺許、長さ一二丈、色黝く鐵の如し。相傳へて活子午石となす。乃ち外國よりの貢物にして毎日子より午に至る間一分長くなる。萬人必ず踏んで之を磨滅せり。惜しむらくは其說を實證するものなし。」

この門檻石が夜中の十二時から正午の十二時迄に一分だけ長くなると云ふので活子午石と呼ばれるらしい。國民政府が南京へ奠都する以前この門は午後だけ通して午前中は通さなかつたと云ふ事である。子午石と云ふ名稱より見て、天文に關係あるものとも思はれるし、只南北に置いた石と云ふに過ぎぬ樣でもある。然し正しく南北に置くと言ふ事は一つの天文學的技術を要する事であるし、實際に當時正しく南北に施設されたものとすれば、地球磁氣學の上からも大切な資料であり、自分も曾て實地に調査して見た事があるが、其らしいものを見付ける事は出來なかつた。貢物とある處より又その地理的環境から想像して、回教徒に關係あるものではないかと考へられる。

明初鷄鳴山に觀象台が設けられた事は既に述べたが、天文考古錄によると、之より先き洪武元年に司天監

進元の水昌宮刻漏中に二木人を設け、時が來れば自ら鐘鼓を擊つ樣なものを造つたと云ふ。明の欽天監制に漏刻科が一分科として獨立して居た事より見ても、當然あつてしかるべきである。これの設置は鷄鳴山の上でなく、司天監の中に設けられたのではないかと思はれる。次で洪武年間にはなほ

「洪武二十四年四月鑄渾天儀。」

「洪武二十九年十一月詔鑄渾天儀。」

明は太祖の服後、惠帝僅か在位三年にして燕王に追はれ、都は再び北遷して燕京に移り北京と改稱せられたが觀象臺の儀器類等はそのまゝ保留されてあつた。漸く英宗の時に至り、南京に在る渾儀の模型を造り、持歸つて新しく銅渾儀を北京に造つた。その間の事情は英宗實錄によると

「正統二年二月行在欽天監監正皇甫仲和等奏、南京觀星臺設渾天儀璿璣玉衡簡儀圭表、以闚測七政行度、陵犯遲留伏逆。北京齊化門城上觀測未有儀象。乞令本監官一人、往南京督匠、以木如式造之。赴北京較北極出地高低準驗、然後用銅鑄造、庶占象不失從之。

當時南京觀象臺には之等四座の他にも儀器があつたと思はれるに拘らず之等四座のみが記されて居り、更に南京天文臺記には明瞭に四座だけ在つたと言つてゐる。

「儀器凡四事、利瑪竇及其弟子龐嘗考察此四儀器、有所傳述、頗足爲後人所利賴。第一儀器爲一銅製球、

徑長約一釈又二分之一、球面上刻子午線及平行線、無地標記、其下安一銅製之立方體。立方體之頂、有一圓穴、球半陷其中、其傍有一小門、人得入其內、以旋轉球。第二儀器爲渾天儀、其質及直徑皆與第一儀器同。上有緯線及極線、緯線凡三百六十五度又若干分、下支一金屬之管、形如鎗、可以自由撥動、以示星之高距。第三儀器爲日規、約高三釈、安於一長方大理石之南端、石之四周圍以溝、所以驗水平也。石上亦刻有分數。第四儀器最大且最備亦測量之器、有三大環製以銅、直徑各長一釈又五十粉、所以象赤道黃道子午線、又有一環可活動、附一管、蓋用以示星之位置、器之安放在一平面大理石桌上、四周亦繞以溝。據利子所述、此種儀器製作皆極精妙、所要材料皆甚耐久。利氏見此器時在一六〇〇年、距製作之時、已三百五十年、而其器猶煥然若新、其工作之巧可以想見、惟在科學上之價値則殊遜、其所分三百六十五度又若干分。無論於天象不相干、卽其所分亦殊不平均、是足以見當日天文家智識之陋矣。」

又江寧府志の中には簡單に

「觀象台元至正六年建、明改爲欽天臺。劉樹聲云、幼時猶見小方銅架中挿方柱近丈、爲量世尺、又有大方銅架懸渾球、又有矮銅架、鎖斷足銅龍。」

とあるだけで聊か明瞭を缺いてゐる。之等南京から持つて行つた木の模型により渾儀、簡儀、渾象圭表を北京で銅を以て鑄し、正統七年御製觀天器と銘したと云ふ。而して南京の儀器は依然そのまゝ鷄鳴山に留保さ

れてゐた。明末萬曆年間には、既に述べた樣に利瑪竇の來遊あり、之等儀器を見て絶讃を捧げてゐるが、利瑪竇來華始末記には更に詳しく

「利瑪竇當明神宗萬曆二十六年、重游南都、參觀欽天山觀象台。當時台中仍有司天者、在台察考天象、終夕觀測果報。臺上陳列銅製天球、日晷相、風相、渾天儀、簡儀等器、結構精巧。利瑪竇極歎美之。」

と書かれてゐる。その當時の樣子は金陵梵刹志の鷄鳴寺圖に見る事が出來る。この本は明天啓七年卽ち萬曆二十六年から三十年後に葛寅亮の撰したもので、鷄鳴寺が主であるから觀象台は余り詳しく現はれてゐないが、當時の樣子を忍ぶのには最も良い資料であらう。

明より清代に入つて、康熙七年には欽天監が、北京の觀象台の渾儀が損傷してゐるので、南京觀象台から郭守敬の儀器を移さうとしたが果さず、北京で別に造つた。卽ち

「康熙八年六月、令改造觀象台器。先是七年七月、欽天監副吳明烜言、推歷以黃道爲驗、黃道以渾儀爲準。今觀象台渾儀損壞、亟宜修整、下禮部議、尋以取到元郭守敬儀器於江南。不果行、至是南懷仁爲監副、疏請改造從之。十三年正月、掌欽天監事南懷仁、以新製天體儀、黃道經緯儀、赤道經緯儀、地平經儀、地平緯儀、紀限儀、告成、將製法用法、繪圖列說、名新製靈臺儀象志、疏星御覽、得旨、儀象告成、製造精密、南懷仁勤勞可嘉、不部優敍。」（清通考）

その他尙ほ色々な儀器が作られたが非常に精密であつたらしい。清通考によると

「康熙二十年二月製簡平儀地平半圓日晷儀。三十二年四月製三辰簡平地平合璧儀。五十二年二月命監臣紀利安製地平經緯儀。五十三年二月製星晷儀、製四游表半圓儀、製方矩象限儀。乾隆九年二月、製三辰公晷儀、製看朔望入交儀、製六合驗時儀、製方日晷儀。十九年三辰公晷儀成、命名璣衡撫辰儀。」

一方鷄鳴山觀象台の儀器は康熙年間に江南より北京へ移されたが、幾許もなくして銅の必要があつた際壞して處分して終つた。常福元も言つてゐる樣に、これ實に中國天文學界の一大不幸であつた。

その後の鷄鳴山觀象台は、幾度かの兵燹を經て、二百數十年の間荒廢に歸してゐた。民國政府の南京奠都により再び復活する事となつたが、此度は天文台としてではなく氣象台としてであつた。天文台は國立中央研究院天文研究所が民國十七年成立した際鼓樓に置かれたが、紫金山上の天文臺落成を俟つて二十三年九月一日に此處へ移つた。これが中國の近代天文學への發足である。

流星有引

程淸

一九二一年、美國天文家有哈雷彗星穿裂地球之推度。今人類殘殺、無一片乾淨土、痛苦極矣。吾因之盼世界末日之來臨、俾得如佛家所謂淸淨寂滅之無爭無事也。古歷七月二十五日夜三鼓、寒暑計高九十餘度納涼夜坐、揮汗如雨。忽聞有聲虎虎、一流星光如滿月、橫過天空、照耀大地、如同白日。幾疑哈雷彗星裂地球之日至矣。感而作此。

一星如月曳孤明、疑是哈雷裂地行、流火豳風秋七月、高樓汗雨夜三更、萬方競祝和平福、四國終渝壇坫盟、何日修文能偃武、斯民熙皞慶承平

日方友人約登紫金山陸軍用地望月得句

不堪今夕此登臨、怒馬嘶風秋氣深、一月當空寒徹骨、碧天如水夜沉吟、幾家烟火遺民淚、滿地松楸報國心（山下多陣亡將士墓）、太息紫金山上望、孫家贏得墓陰森

汪主席六十政紀

張次溪

近六十年來國家千變萬幻可驚可愕之事爲亘古所未有蓋內則以數千年來專制政體之餘毒纏綿未息外則列强之侵凌日以益甚內外相乘國幾不國主席汪公應運而生排衆難受萬苦近更不顧世俗之毀譽忍辱負重致力於亞洲民族解放運動其自傳有云「民國以後的事情比民國以前複雜得多我的革命決心固然始終沒有改變而對人對事的態度卻不免時有改變但所以改變的理由我無不講出來」　周作人先生近爲吾序汪先生庚戌蒙難實錄有云「汪先生不惜一身以利衆生爲種種難行苦行投身飼餓虎所捨不祇生命且及聲名稱之爲菩薩行正無不可」而主席之序亦云「今日國家之危尤甚於當時余耿耿此心亦與當時無異第創痕較當時爲多」就此以觀足以見主席志行矣主席既以一身繫亞洲存亡則其一言一行亦卽邦國信史茲屆覽揆之辰撮其六十年來大事撰成政紀一篇想亦我亞洲民衆所欲睹也

汪主席字季新號精衛其先系出唐越國公華元末自婺源遷山陰明正德中有諱應軫者博學工文著靑湖文集是爲十一世祖曾祖炎祖雲舉人遂昌縣訓導父琡字省齋幕游於粵始著籍爲番禺人

光緒九年癸未（一八八三）夏歷三月二十八日主席生於三水縣署蓋其時省齋先生遊幕於此也時國父年十八歲

入夏威夷大學肄業六月歸國入香港拔萃書院是年黑旗軍劉永福收復河內擊殺法海軍大佐孳威爾法人憤加兵安南訂順化新約十三條夷安南爲其保護國越法之事終中法之戰起

光緒十年甲申（一八八四）主席二歲正月國父入香港皇仁書院清廷命江督曾國荃赴滬與法使巴特諾議和法使不應清廷遂下詔與法宣戰

光緒十一年乙酉（一八八五）主席三歲清廷派直督李鴻章與日本全權大臣伊藤博文議高麗事又與法巴特商安南條約十款是年九月五日主席外甥朱執信生

光緒十二年丙戌（一八八六）主席四歲國父感中法戰後內憂外患於是命革思想油然以生遂與鄭士良陳少白諸君祕組革命機關於廣州國父是歲入博濟醫院蓋以醫可濟人爲入世媒介也

光緒十三年丁亥（一八八七）主席五歲國父入學香港雅麗醫學校與陳白尤烈黃詠襄楊鶴齡陸皓東諸人結黨議政時往來於廣州香港之間

光緒十四年戊子（一八八八）主席六歲國父肄業於雅麗學校清廷與英訂中英西藏條約

光緒十五年己丑（一八八九）主席七歲國父仍肄業於雅麗學校三月清德宗親政

光緒十六年庚寅（一八九〇）主席八歲國父仍肄業於雅麗醫學校

光緒十七年辛卯（一八九一）主席九歲隨省齋先生遊幕陸豐平且必習字於中庭母吳太夫人必臨視之日以爲常

傍晚由塾歸從省齋先生受王陽明傳習錄等書或默書陶淵明陸放翁諸人詩自謂一生國學根基得庭訓之益爲多

光緒十八年壬辰（一八九二）主席十歲秋間隨省齋先生返省城散塾歸來從省齋讀是年國父畢業於雅麗醫學校名列第一得博士學位自設藥店於澳門

光緒十九年癸巳（一八九三）主席十一歲仍居省城從省齋先生讀是年國父偕陸皓東由上海赴天津上書李鴻章痛陳救國策略洋洋五千餘言切中時弊末言農爲國本尤應興農願赴法國考察蠶桑及各國農業

光緒二十年甲午（一八九四）主席十二歲仍居省城從省齋先生讀是年國父赴檀香山與何寬李昌等創立興中會衆推國父爲會長七月清廷正式與日本宣戰

光緒二十一年乙未（一八九五）主席十三歲母吳太夫人歿正月二十七日興中會幹部正式成立於香港士丹頓街榜曰乾亨二月幹部會議議決軍事策畫及青天白日國旗國旗樣式則陸皓東手製也九月廣州革命機關爲清廷所破逮捕多人陸皓東等就義十月國父亡命日本立興中會於橫濱

光緒二十二年丙申（一八九六）主席十四歲夏歷九月初八日省齋先生逝世享年七十有四歲十月十一日國父蒙難於英京清使館

光緒二十三年丁酉（一八九七）主席十五歲隨長兄兆鏞客居粵北樂昌縣主席有西石岩詩當作於是年蓋西石岩爲樂昌名勝之地是歲國父居英京著倫敦被難記又撰生傳清廷與法立約予以兩廣雲南礦山開采之優先權

光緒二十四年戊戌（一八九八）主席十六歲在樂昌守禮家居致力文史正月國父在英京採取各國政治經濟人情風俗取長補短定爲三民主義三月赴橫濱三月日本民黨宮崎寅藏奉進步黨首領犬養毅命來謁旋迎國父居東京

光緒二十五年己亥（一八九九）主席十七歲仍居樂昌從番禺章梅軒先生讀書致力經史經世之學是年國父力佐菲律濱獨立未成而犬養毅平山周中村彌六亦皆參與其事又命陳少白設中國日報於香港此爲民黨辦報之始

光緒二十六年庚子（一九〇〇）主席十八歲仍居樂昌國父開興中會於香港任總會長再助菲律濱獨立不成五月在香港策劃廣東獨立事九月六日史堅如謀炸粵督爆督署史被執死

光緒二十七年辛丑（一九〇一）主席十九歲由樂昌返省城隨仲兄兆鉉居住應番禺縣試縣令爲太倉錢璞如閱其文置第一兆鉉第三及啓糊名知爲兄弟終試以兆鉉與互易其次是歲朱侍郎祖謀督學廣東主席兄弟皆入府學縣有禺山書院月課士以文藝錢璞如得主席卷輒優異之數召見是年兆鉉歿兩寡嫂一孤姪卽恃主席所得膏火金以度日

光緒二十八年壬寅（一九〇二）主席二十歲考取留日法政速成科官費生得聞民權學說與舊有之民族思想融洽爲一思想大變三月章太炎等在東京舉行支那亡國紀念會

光緒二十九年癸卯（一九〇三）主席二十一歲在日本法政大學速成科畢業從譯書所得潤金卽以作入專門科之學費蓋月入有六十金可以兼顧家庭及幫助朋彼時所譯者如法規大全等書自謂無興趣可言也又謂留學法政從憲法中得知國家觀念及主權在民觀念從前所謂君主之義撇之於九霄雲外固有之民族思想勃然以興於新得之民權思想

會合遂決定革命之趨向其冬國父設革命軍事學校於東京

光緒三十年甲辰（一九〇四）主席二十二歲仍在日本受業於法政專門學校國父赴檀島改組檀山新報親撰論文與保皇黨之新中國報論戰

光緒三十一年乙巳（一九〇五）主席二十三歲七月國父首創同盟會於日本東京赤坂區檜町黑龍會內主席偕朱執信往謁國父於神田錦輝館遂入同盟三十日同盟會開籌備會公推主席起草會章八月二十日在赤坂區霞關阪本金彌邸開成立大會公推國父爲總理主席爲評議員議組民報發表革命方略十月二十一日民報出版主席與胡漢民朱執信章太炎黃侃劉申叔先後執筆政

光緒三十二年丙午（一九〇六）主席二十四歲畢業於日本法政大學（時同學三百餘人考第二名）得法學士位畢業後隨國父赴南洋設同盟分會於吉隆坡又至庇能設同盟分會在檳榔吳世榮之苾蘭園與陳璧君同志相晤談革命遂同至新加坡介謁國父加入同盟會六月由南洋返日本十二月二日民報開週年紀會於東京錦輝館

光緒三十三年丁未（一九〇七）主席二十五歲正月二十日隨國父往星洲轉安南密設分會於河內經營粵桂滇軍事七月十二日南洋中興日報出版與保皇黨總匯報對峙主席與胡漢民先後執筆政是年再至香港致力革命事業

光緒三十四年戊申（一九〇八）主席二十六歲隨國父赴南洋作宣傳及募款工作七月民報被封是年清光緒帝卒溥儀嗣帝位載澧爲監國

宣統元年己酉（一九〇九）主席二十七年三月隨國父在星洲及美洲各地任宣傳及募款成績極佳

宣統二年庚戌（一九一〇）主席二十八歲三月七日以謀炸清攝政王於銀錠橋事洩被逮入獄同謀者有陳璧君黃復生諸君事詳余所編汪先生庚戌蒙難實錄別錄兩書

宣統三年辛亥（一九一一）主席二十九歲九月十六日出刑部獄其時黨禁雖馳而黨人方各有所事祕其行跡不能集獄門外相候獨東莞張篁溪先生往迎遂同至騾馬市泰安棧是年三月二十九日有黃花崗之役爲民族一大血戰八月十九日同盟會會員以軍隊首義於武昌推翻清政府創立中華民國十一月二十五日隨國父赴滬是月國父當選爲中華民國臨時大總統

民國元年壬子（一九一二）主席三十歲被推爲同盟會北方支部長一月一日國父就臨時大總統位主席就任上海南北和平會議代表爲定國都事北上與袁世凱協商雙方爭執多所斡旋是年與陳璧君同志結婚辭一切政職偕往廣州省視兄嫂八月赴法二十五日同盟會改組爲國民黨

民國二年癸丑（一九一三）主席三十一歲漫遊歐美考察政治經濟十一月四日袁世凱強迫解散國民黨取消國會省會中國國民黨籌議員國父不能安居於國內重遊日本

民國三年甲寅（一九一四）主席三十二歲漫遊歐美考察政治經濟七月八日國父在東京組織中華革命黨

民國四年乙卯（一九一五）主席三十三歲漫遊歐美考察政治經濟國父仍住東京主持中華革命黨

民國五年丙辰（一九一六）主席三十四歲漫遊歐美考察政治經濟黃興歸自美洲居滬摧心臟病卒蔡鍔亦病歿於日本

民國六年丁巳（一九一七）主席三十五歲自法渡海至英國復渡北海歷挪威芬蘭至俄京彼得格勒以國父之召遂乘西比利亞鐵道汽車歸國國父居滬著民權初步七月赴粵宣言護法組軍政府

民國七年戊午（一九一八）主席三十六歲與胡漢民組粵軍軍中將校兵士悉以黨人任之八月國父在滬通電告海外同志重訂黨章派胡漢民爲討論和平代表

民國八年己未（一九一九）主席三十七歲隨國父赴滬創辦建設雜誌同行者有廖仲愷朱執信戴傳賢諸君十月十日改中華革命黨爲中國國民黨

民國九年庚申（一九二〇）主席三十八歲十一月隨國父回廣州重開政務會議通電全國恢復軍政府發表宣言繼續革命事業

民國十年辛酉（一九二一）主席三十九歲五月五日國父就大總統職於廣州主席素主六不主義至是乃決不參政一心致力於黨務又以陳炯明爭權跋扈力事勸喻始免爲患國父得於平桂之後率軍北征

民國十一年壬戌（一九二二）主席四十歲六月十六日以陳炯明叛國國父蒙難於總統府旋脫險於八月十三日赴滬主席隨往

民國十二年癸亥（一九二三）主席四十一歲二月二十一日國父還廣州執行大元帥職權以軍權爲軍閥所操縱遂有重組中國國民黨之舉主席奉召回粵與廖仲愷胡漢民共籌召開第一次全國代表大會

民國十三年甲子（一九二四）主席四十二歲一月一日開中華民國國民黨第一次全國代表大會於廣州其一切宣言皆由主席擬草主席於會中當選爲中央執行委員會委員兼宣傳部長是歲黃埔陸軍軍官學校成立主席時往授課於黨之歷史及主義多所闡發十一月三十一日隨國父在北京與段執政商開國民會議

民國十四年乙丑（一九二五）主席四十三歲佐國父力排段氏召開善後會議之說堅主召開國民會議三月十二日國父以病卒於協和醫院易簀時主席侍側承命擬遺囑稿

民國十五年丙寅（一九二六）主席四十四歲第二次全國代表大會開會於廣州舉爲主席二十七日向中央政治會議提議北伐五月赴法旋於十二月返國

民國十六年丁卯（一九二七）主席四十五歲四月一日由法歸國抵上海晤蔣介石力反排共過急意見不合離滬赴法

民國十七年戊辰（一九二八）主席四十六歲留法避暑

民國十八年己巳（一九二九）主席四十七歲憤蔣介石專政於九月離法歸國與馮玉祥白崇禧等出師討蔣

民國十九年庚午（一九三〇）主席四十八歲閻錫山思聯民黨左派出師倒蔣七月迎主席來平開擴大會議主席仍

主張開國民大會實施訓政

民國二十年辛未（一九三一）主席四十九歲以胡漢民被蔣幽禁舉國騷然羣起責難幾至作戰十二月蔣氏下野四屆一中全會改推林森爲國府主席中政常委則主席與胡漢民也

民國二十一年壬申（一九三二）主席五十歲繼孫科長行政院以東北日軍繼攻錦縣旋有淞滬之戰遷都洛陽成立停戰協定十月稍出國有書留別於國事多所主張惜當局柄政者不能聽耳

民國二十二年癸酉（一九三三）主席五十一歲三月十七日歸國重長行政院主張對日以抵抗交涉並進與日成立塘沽協定華北賴此苟安

民國二十三年甲戌（一九三四）主席五十二歲仍任行政院長力謀華北戰區之恢復及中日和平方案

民國二十四年乙亥（一九三五）主席五十三歲仍任行政院長力主兩國糾紛可以誠意解決不幸政敵見妒於十一月一日四屆六中全會開幕日遇險詳余所編汪先生乙亥遇險始末記

民國二十五年丙子（一九三六）主席五十四歲出國就醫

民國二十六年丁丑（一九三七）主席五十五歲以西安事變應中樞之召兼程歸國力主與日進行和議惜爲共黨所阻

民國二十七年戊寅（一九三八）主席五十六歲國民黨於重慶召開全國臨時代表大會與蔣介石同任正副總裁授

以與日議和之權而共黨專政不予支持憤而離渝卽赴河內於十二月二十九日發表豔電與日講和

民國二十八年己卯（一九三九）主席五十七歲召開國民黨第六次全國代表大會於滬籌備改組國民政府暨還都南京事宜

民國二十九年庚辰（一九四〇）主席五十八歲在南京召開中央政治會議決定國府改組還都任行政院長兼代國府主席十一月三十日與日本成立正式條約中政會旋舉爲國民政府主席

民國三十年辛巳（一九四一）主席五十九歲赴日訪天皇商討和平方案

民國三十一年壬午（一九四二）主席六十歲五月四日偕周作人褚民誼林柏生諸君赴滿洲

上海史研究餘錄

沖田一

（一）タウンゼント・ハリスの一書信

幕府が長崎、神奈川、函館の三港を英米等五箇國に開いたのは安政六年（一八五九年）正月であつた。幕府は諸外國から恫喝されて開港したのであり、未だ輸出統制の諸準備整はず、此の狀態で諸外國と取引したのであるから、國內物資の大不足を來した。邦人の恨みを買つたのは是のみではない。それは當時我國の金銀貨比率の均衡を得てゐなかつたので、是に乘じて奸惡な外國商人、特に上海に居住する外國商人が黃金熱に浮かされた事である。此の間の消息は、

C. A. Montalto de Jesus: Historic Shanghai.

Sir Rutherford Alcock: Capital of the Tycoon.

等の書に詳しい。

今私が問題にしようとしてゐるのは、此の金銀貨比率の不均衡を、誰が最初に上海居留外人に傳へたかである。恐らく下田駐在米國領事タウンゼンド・ハリスは其の一人ではなかつたかと思ふ。それはハリスが日

本の事情を紹介したと云ふ譯ではない。ハリスが一八五七年七月六日の日附で、友人である香港駐在の米國領事キーナン宛に出した手紙が、一八五七年十一月二十一日の、上海で發行せられてゐる週刊新聞ノース・チヤイナ・ヘラルドに發表せられたのである。

ノース・チヤイナ・ヘラルドは一八五〇年の創刊であつて、上海史研究にも、明治維新史研究にも重要な資料と思ふので、暇々に創刊號より順を追つて眼を通して居る內、偶然ハリスの書信に行會つた譯である。此の手紙は彼の取決めた條約の全文をも含むものであるが、條約の方は我國でも明かにされて居るので、此の手紙に必要と思ふ第三條を除いた他の部分は略する事とした。

★　★　★

拜啓　此度小生が日本と取極めたる條約を、貴下に御報知致す事は、極めて小生の光榮と存ずる次第に御座候。

日本に於ける金銀貨の比率は、世界の他の國に於けるそれと大いに異るもの有之候。

亞米利加合衆國にては、金銀の比率は一對十六に有之候が、日本に於ては凡そ一對三個七分の一に有之、故に日本人は外國金貨を受取る場合、同量の金貨を支拂ふと雖も、比率の相違により、外國側にては銀と比較したる時、外國金に七割五分の損失を招く次第に候。條約の第三條を實施する例證として、現在迄米人が

銀にて百弗を支拂ひたる處は、今後は三十四弗半を支拂はゞ宜敷き事を御通知申上候。　草々

一八五七年七月六日　下田にて　タウンゼンド・ハリス

香港駐在米國領事

ゼイムズ・キーナン殿

附　條約第三條

決濟するに當り、米國人所有の貨幣は、日本貨幣（金銀の一分）にて重量を確めるべき事。換言すれば金貨には金貨を以てし、銀貨には銀貨を以てする事。卽ち日本貨幣を表はす重量は嚴密に吟味し、正確と思惟せられたる後使用せらるべき事。

（二）泥地戰

一八五三年小刀會の賊軍が上海縣城を占領したから、清朝は兵を派して是を平定せんとした。此の官軍が租界西方に蹕居してゐたゝめ、此の官兵が租界に侵入したりして絶えず問題を惹起した。故に租界當局は義勇隊を組織して是を追放せんとし、一八五四年四月五日義勇隊と支那官軍との間に、周溪河を插んで戰鬪が

行はれた。此の戰が Battle of Muddy Flat（泥地戰）と呼ばれるが、どの歷史家も此の泥地戰と云ふ名前の解決に困つて居る。歐文上海史で一番古いのは J. W. MacLellan: The Story of Shanghai. 1889.（上海講話）で、ノーズ・チヤイナ・ヘラルドを資料とし、當時の老上海からの聞書を加へて成つたものであるが、是には戰爭の模樣は書いてあつても、泥地戰の名は見えぬ。

Montalto de Jesus は「歷史的上海」（一九〇九年）で、

「是が所謂泥地戰で、戰鬪は全く乾いた土地の上で行はれたのであるから、實に說明し難い誤傳である」

と述べて居る。

G.Lanning and S. Couling は其の大著「上海史」（一九二一年）で、

「天氣良く、土地は乾いて居つて、渡るべき泥地はなかつたので、泥地戰と云ふのは可笑しい。一兵士が戰鬪中クリークを渡つてひどく濡れたと云はれて居るので、元來泥脚戰と云はれるべき處、誤植か何かで泥地戰となつたのであらう」

と述べて居る。然し英語の foot が flat と誤植か誤傳されと云ふのも一寸首肯出來ない。

Hawks Pott は「上海小史」（一九二八年）で、

「此の日天氣晴朗で、全く乾いた土地の上で戰はれたのであるから、此の泥地戰と云ふ名の源を知る事は

困難である」

と述べて居る。此のやうに西洋の學者は頭を惱まして居る。處が我々東洋人には泥地戰と云ふ名は極めて自然に響く。當時あの地方は沼やクリークの地で、夏には蘆が繁茂したやうな土地であり、且戰鬪に當つてはクリークの泥土を積上げて保壘とした。其のやうな土地狀況のもとで戰爭したのであるから、是を泥地戰と云つても、我々には少しも不自然に思はれず、又疑問も起らない。今でも南京路と靜安寺路との連絡地附近を、老上海が泥城橋と云つて居るのは是を證して餘りあると思ふ。

マクレランは「上海講話」で次のやうに語つてゐる。

「蘇州河以南の周溪河に沿ふて、高さ七呎、幅六呎の泥の保壘が、短距離を置いて、全長四分の三哩に亘り築かれた」

是に依て見ても、「泥地で戰爭したから泥地戰と云ふ」と云ふ解釋は益々根據を得るし、俗稱泥城橋の意味も分ると思ふ。

(三) 虞姬墩

同治上海縣志卷三十一に次の記述がある。虞姬廟在八圖中塑女神像廟前有大銀杏二株後江坍毁國朝道光二

十七年里人張化麟等捐募重建咸豐十一年燬於賊

道光二十七年（西暦一八四七年）里人が重建したのを、咸豐十一年（一八六一年）長髪賊が是を破壊したと云ふのである。

上海縣續志卷二十七には更に詳細な記述がある。

虞姬墩　嘉慶志古上海圖作漁姬墩　前志寺觀有虞姬廟　或云當作漁姬廟今訪稿據諸翟人朱孔陽歴朝陵寢備考定墩名爲虞姬以符前志廟名陵寢備考見前志藝文在三十保八圖俗名野雞墩

沈學淵詩

漢殿秋風雌雞啼江東坯土拜虞兮項劉不是爭墩客誰把墩名誤野雞

詰り虞美人を祭つた墓と廟とが、蘇州河の上流、碑坊路を北進した處にあると云ふ。一番古い記述は嘉慶上海縣志（一八一四年印行）の古上海圖で、それには漁姬墩とあるが、是は虞姬墩とあるべきだ、と云ふのが縣志の大要である。

虞姬の素性に就ては殆ど分らぬ。曾子固の「虞美人草」も單なる抒情詩である。唯類說に、

「褒斜山谷中、有虞美人草、狀如雞冠、大而無花葉、皆相對、或唱虞美曲、則兩葉如人撫掌之頗中節拍」

とあつて、此の虞美人草の咲いて居る地方が虞姬の鄕里と關係ありとすれば、彼女の鄕里は褒斜山谷卽ち

陝西南部の山中となる。

處が項羽は徐州附近の人で、叔父項梁と共に兵を蘇州府に起して居るので、或は虞姫は蘇州府の人ではないかとも想像される。現に蘇州河の上流に彼女の廟があるのであるから、鄉里を褒斜山谷と推定するよりは此の方が事實に近いのではないかと思ふ。勿論十八史にある如く虞姫は垓下で自刎したが、死後支那の風習に從ひ、死骸を鄉里に運んで葬つたと考へるのである。

唯一つ物足らぬ事は、虞姫墩なり虞姫廟なりが、嘉慶上海縣志に初出で、それ以前の乾隆、康熙、萬曆、嘉靖、弘治の上海縣志に記載がない事である。故に此の廟が虞姫のものと斷定する事は出來ぬ。

今でも縣志の示す場所に廟はある。二本の公孫樹が廟前に高く聳えて、廟の標識となつて居る。廟内には虞姫の實物大の像があり、正面の上に「神靈感應」「虞府正堂」の二面の扁額があり、それに傍書があつて、

龍飛大清光緒十五年歳次己丑嘉平月穀旦、神靈感應、安徽古將信士飽有餘敬獻、徐郡敬書

と讀む事が出來る。羣り集つた村民も像を指して虞姫娘娘だと敎へて呉れる。

更に内進すると、虞姫像を守るが如く、左右に施相公と上天王との像もある。おみくじ帳があるので、虞姫廟の部を見ると、

笑裏藏刀豈可猜　鮮花移向右邊栽

一言聞報君消息　家道中門與復衰
三女莫相逢　盟言說未通
門裏心肝柱　編素見重重
註解　三女姦字也與絹人相犯情
必成疾病恐惹是非宜謹慎

河の向ふに小高い所がある。是が虞姫墩の遺址であると云ふ。村人の言ふ所に從ふと、昔は是は相當高い小山であつたが、墩がなくなつてからは、附近の農夫達が是を次第に崩し、農作物を植ゑて居る現狀であると。從つて虞美人草などの咲く筈はない。此の小山の向ふに二基の大きな石柱があるが、是は長髮賊が上海攻擊に當つて、大砲の台にしたものであると話り傳へられて居る。

(四)　日本紅楓女史

日本人墓地の中央より少し西寄りの所に、自然石の可成大きい、一女性の碑がある。今迄可成論議された女性であるが、彼女の身元に就て知り得る事は、其の墓碑の裏に彫つてある略歴以外には知り得なかつたのである。古くは池田桃川氏が「上海百話」で紹介され、近くは澤村幸夫氏が「江浙風物誌」の中で書いて居

られる。然し兩氏共碑文以外には少しも出て居られぬ。其の碑の表面には、

日本紅楓女史之墓

華亭　胡公壽題

とあり、裏面には、

日本紅楓女史姓伊原名愛字停車安君老山名養之善爲蘭竹筆致清媚於同治九年隨老山至中華上寓居焉十一年七月二十三日病故存年二十有六老山揭柩葬於龍華寺塔之西傍因立碑以記

嘉定管廷祚撰　上海王首書

大日本長崎縣

八坂町住石工岡村德光

とある。但し墓碑は現在半ば埋れて居るので、下部の方は判讀出來ぬ文字もあり、右に揭げた文字以外に未だあるかも知れぬ。

處が紅楓女史に就て最近發見した二つの資料があるので、是を發表し度いと思ふ。一つは東本願寺上海別院に保存されて居る過去帳であり、今一つは友永傳次郎翁が筆寫藏有して居られる「滬吳日記」である。

先づ過去帳の方から述べ度い。第一冊第一號に、

明治五年八月十八日沒

隸縣　信濃國伊那郡飯田村

安田老山妻

法名釋　贈妙瑞信女

俗名　安田きふ　二十七年

墓地　上等

是で見ると碑文と一致せぬ節々がある。第一は死亡月日である。碑文にある同治十一年は明治五年であるから、此の點は一致して居る。處が碑文には七月二十三日とあり、是は八月十八日である。舊暦と新暦との差でもない。何か此の間に間違があるのではないかと思ふ。次に俗名安田きふとある點だ。又碑文には二十六歳、是には二十七歳で死亡した事になつて居るが、是は數へ方によつて一歳の相違を來すから問題となるまい。

以上のやうに何かと疑問が起り、或者は、安田きふなる者が老山の正妻で、紅楓女史は彼の妾ではなかつたか、と考へるかも知れぬ。然し是には有力な反對材料がある。それは若しさうだとすると、老山は上海に二人の同年輩の妻を持ち、明治五年の七月頃と八月頃とに次々に妻を失つた事になる。是は不自然である。

是だけでは問題の解決の方法がない。そこで「滬吳日記」が登場する譯である。此の日記は長崎の醫者で書畫に興味のあつた岡田篁所なる人が、明治五年二月より同年四月に至る迄上海蘇州を遍歷した日記で、明治五年頃の上海を知る絶好の資料である。

岡田氏は二月十七日午後老山を訪問して居る。老山は紅楓女史と共に新北門外の同茂棧と云ふ支那旅館に住んで居つた。

「老山寓滬已三五年、稍解唐語、常與胡公壽任栢年締交、以書畫供旅費、其妻紅楓、亦畫蘭竹、余留寓中互相往來、以盡同國之情好」

と日記にある。又二月晦日の日記には

「歸路獨訪安田老山、適永島洪東來會、共伴老山、訪文墨諸人、其妻紅楓亦隨」

ともある。三月一日には、

「朝與永壽同訪老山、永壽攜提籃煮茶共品、紅楓作骨董飯、供我輩」

とある。又岡田氏は蘇州への行脚から上海に歸つて、四月一日老山を訪問して居るから、紅楓女史にも會つたであらう。卽ち岡田氏が紅楓女史に會つたのは、彼女の死の少し前であつた。そして岡田氏の日記の何處にも、老山に二人の妻があつたとか、或は二人の妻があつたらしいとの匂さへも感じられない。當時上海

には四五十人の邦人しか居らなかつたのであるから、其のやうな生活をして居れば、狹い邦人間の事であるから、乾度岡田氏などの日記の何處かに現はれねばならぬと思ふ。

かく觀じ來れば、前の過去帳の安田きふなる婦人は、伊原愛卽ち紅楓女史と同一人でなければならぬ。紅楓女史の原籍地が分つたので、早速原籍の役場に照會を發したが、時日が大分經過するのに返信に接せぬのは、恐らく彼女の關係者が伊那郡飯田村（現在市制を布く）に現存せぬためであらう。

（五）追記

長野縣飯田市役所から報告に接したので、又紅楓女史の事を書かねばならぬ事となつた。是は私の甚だ喜びとする處である。

次に掲げる文によつて、前回の如き疑同は雲散霧消する譯である。秋の夜長の燈火のもとで此の手紙につく〴〵と讀耽つて、此の薄倖な一女性に同情の心を寄せると共に、彼女の魂も是で浮ばれる事を思ひ、何かしんみりとした氣持とすが〴〵しい氣分とを味つたのである。

『前略。御照會の老山の妻女の件は小生より御返事します。

妻女の生家が既に絶えて居る事と、本人が若くして老山に嫁し、早く江戸出て仕舞つた事等により、本人

に關する事は故老でももう知つて居る者もなく、記錄などは勿論あません、唯是たけは分つて居ります。

老山は前に此の飯田町の番匠町（今は通町一丁目と改稱）へ來て醫を業として居りました。

但し醫業は一向繁昌してはゐなかつたやうです。其の老山の家の向ひ側に野原と云ふ當時の町役人の家があり、其處へは常に出入して酒の相手などをしてゐたさうです。其の曾孫に當る現在の野原の當主は小生の知人で、其の人は昔話を多少聞いて知つてゐます。

老山の假寓してゐた家の隣に伊原重兵衞（家號を近江屋といひ、通稱は近重、今は絶家）といつて當時鹽問屋を營み、後に帳面屋を家業とした家がありました。（その頃この町に鹽問屋多くあり）。老山の妻女はその近重の娘のやうです。

老山はその後妻女を連れて一旦江戸へ出て、それから支那へ渡り彼地で妻女を亡くしたと見えました。

老山が支那から歸つて後、當町の知人へ宛てた長い手紙が只今も保存されて居ります。小生は未だそれを見ませんが、それを見れば當時の老山が分る事と思ひます。この手紙は近日中に見せて貰ふ事になつて居ります。

右の如くで、妻女は早く當地を去つて仕舞つたので、當人に關する詳細は今の處是以上知る由もないやうです。

（備考）

一、近重のすぐ近くに矢張一族の伊原半二郎と云ふ鹽問屋があり、或は其の娘ではないかとも思はれるけれど、然し近重の方が其の家と信ぜられる根據があります。とに角老山が此の鹽問屋から嫁を貰つた事には間違はありません。

半二郎の方も今は絶家してありません。それ故只今の處老山の妻女は飯田町の伊原重兵衛娘として置いて差支はないと思ひます。

二、飯田は當時堀氏二萬石の城下、後に飯田町となり、目下は飯田市。

其の他に何か發見した事があつたら御通知します、草々。

十月廿三日　飯田市役所内　岩崎　清美

以上が手紙の全文である。過去帳には飯田村の安田きふとあり、碑文には伊原愛とあるが、その位の差違は何でもないと思ふ。昔の人はよく名を變へたものである。

是で安田きふは伊原愛、即ち日本紅楓女史と同一人なる事が分つた。歿年月日の相違は何かの間違であると思ふ。

論隋唐間之楚音

劉詩孫

目次

1. 楚音在方音中之特徵性
2. 推求隋唐間楚音之材料
3. 推求楚音之方法
4. 推求楚音之結果

1. 楚音在方音中之特徵性

考顏氏家訓音辭篇有云：

夫九州之人，言語不同，生民已來，固常然矣。自春秋標齊言之傳，離騷目楚辭之經，此蓋其較明之初也。

又云：

古今言語，時俗不同，著述之人，楚夏各異。

盛言楚地之音，不同華夏，此蓋楚音音值本有特徵，故顏氏言之耳。然推其源，古已有證。昔春秋謂楚謂乳曰

穀，謂虎曰於菟，已明言楚地土音，有異方俗。逮屈原作爲離騷，以楚音而入辭賦，世人因目之爲楚辭。昭武黃長睿有言：

屈宋諸騷，若些只羌誶，蹇紛侘傺，楚語也；悲壯頓挫，或韻或否，楚聲也；沅湘江澧，修門夏首，楚地也；蘭茝荃藥，蕙若蘋蘅，楚物也；故謂之楚詞云。

此其證也。爾後宋玉，唐勒，景差之徒，祖述屈原，作爲招魂，大言，大招諸篇，咸以楚音爲準。後人哀而集之，名曰楚辭。世之言文體者，遂另爲一類，以別於詩賦，於此亦可以知楚音之有特徵矣。

不特此也，昔荀子屢以楚夏對言，漢書注蔡讀楚言蔡，說文云南楚之外謂好曰嬉，凡是之類，歷數難終，皆明言楚音特殊，異乎常讀。縱古今嬗變，時代不同，而音值特殊，迄今猶異。因加考論，聊見其凡，若夫詳晰。固未遑也。

2. 推求隋唐間楚音之材料

楚音材料，本無專書，稽之載籍，多屬散見。言其較著，漢有楊雄方言，許愼說文，皆以楚言，別於夏語。惜乎書僅舉證，未標音讀，以云考稽，殆難屬筆。自是厥後，典籍所載，多云江左文人，矢口楚讀，文心雕龍所載張華論韻，謂士衡多楚是也（按此時楚音，皆就江左而言，與楚詞之楚音異，後當改正）然舉是諸材，亦難求晰，蓋其利弊，適與前同。其不同者，如陸法言切韻序云：

吳楚則時傷輕淺，燕趙則多涉重濁，秦隴則去聲爲入，梁益則平聲似去。

述各地之音調，考求其異同，較之前修，已臻翔密，惜僅音調，無聲韻也。然則推求楚音，究當何屬，私意所及，或當於楚辭音及文選中離騷音求之。

案隋書經籍志序有云：

隋時有釋道騫，能爲楚聲，音韻清切，至今傳楚辭者，皆祖騫公之音。

是則道騫楚辭之音，乃本楚聲，故後世言楚辭者，皆祖其讀，以求不失楚辭原音。考楚音者，蓋當取是。然其書久佚，不可考徵。今幸於敦煌石窟中得之，起自『駟玉虬以乘鷖兮』，迄於『雜瑤象以爲車』，凡存八十有四行。計釋離騷經文一百八十有八，注文九十有六，爲音二百九十有一。惜寫本雖出，已淪巴黎，近年友人王重民于役法京，始攝照以歸，並加考證，謂爲騫公之音。（載大公報圖畫副刊，第一百二十四期）嗣聞一多復爲之跋，亦宗其說，故此篇所論，卽以騫音爲主。

復次，日本京都帝大文學部影印舊鈔本中，有文選集注一書，所引多爲佚書，如唐公孫羅文選音決者是。音決於離騷注中，多標楚音，如『夕檻洲之宿莽』下注云：

莽，協韻亡古及，楚俗言也。凡協韻者，以中國爲本，傍取四方之俗以韻，故謂之協韻，然於其本俗則是正音，非協也。

明言楚地之音，應協某，較之中土，顯然有別。按公孫羅爲曹憲門人，見於憲傳，憲嘗爲文選音，載之唐志。憲爲隋唐間人，其文選中離騷之音，或當祖述騫公，今音決中有引騫公及曹憲者，音多相合，可以覆證。是則公孫羅音，當亦源出騫公無疑矣。故此篇所論，舍騫公音外，卽以音決爲輔。第音決明言某爲楚音者，僅有六則，未免尠矣。

今總斯二書，譜爲楚音，區其時代，名曰隋唐間之楚音焉。

3. 推求楚音之方法

騫公之音，凡二百九十有一，公孫羅音，凡六則，都二百九十有七。計得反切二百五十有五，直音三十有二，協韻十。其推求之法，僅以廣韻反切互相比證。

按近世推求反切之法，多以系聯爲主，其法本之陳澧，其切韻考凡例有云：

切語上字與所切之字爲雙聲，則切語上字同用者，互用者，遞用者，聲必同類也。同用者，如冬，都宗切，當，都郎切，同用都字也。互用者，如當，都郎切，都，當孤切，都當二字互用也。遞用者，如冬，都宗切，都，當孤切，冬字用都字，都字用當字也。

又云：

切語下字與所切之字爲疊韻，則切語下字同用者，互用者，遞用者，韻必同類也。同用者，如東，德紅切

，公，古紅切，同用紅字也。互用者，如公，古紅切，紅，戶公切，紅公二字互用也。遞用者，如東，德紅切，紅，戶公切，東字用紅字，紅字用公字也。

陳氏乃用反切系聯之法，以同用，互用，遞用之例，系聯反切上下之字，推求紐韻多寡，例固完善。然揣量其說，施之於反切多者則可，施之於反切少者則不可，以反切少者，其反切上下之字，本無方法系聯，安在其用同用，互用，遞用之例。故此篇所考，不得不藉用廣韻反切互相比較。

廣韻爲宋代陳彭年所修，其反切多本之隋唐舊韻，與楚音相較，雖系統不同，而時代相因，猶可緣證。故本篇擷其反語，證之楚音，求其異同，以見音值。計其方法，約有三端：

1. 求紐之法，如蹇，楚音渠偃反，廣韻居偃切，則知以羣注見也。
2. 求韻之法，如溘，楚音苦闔反，廣韻口答切，則知以盍注合也。
3. 求調之法，如嚴，楚音魚儉反，廣韻語驗切，則知以琰注嚴也。

據此以推，凡反切上下字之不同者，概區其紐韻，別其調值，以見同異。至於大凡，則具下端。

4. 推求楚音之結果

推求之始，計分二類，一類爲鬻公之音，所以求隋代楚讀，二類爲公孫羅音，所以求唐初楚語，雜而不廁，乃所以別時代也。

I、騫公之音，凡二百九十有一，計得反切二百五十有三，直音三十有二，協韻七。其間與廣韻同者，反切二百十有三，直音二十有七，其不同者反切四十，直音四，而協韻又七焉。其推求結果，凡得三十有三事，爲例五十有一，爲類凡四，曰紐，曰韻，曰調，曰協韻。

（1）屬於紐者十有二事爲例二十：

1. 以羣注見者：　蹇，騫渠偃反(1)　廣居偃切
2. 以匣注見者：　鶾，騫丸委反　廣過委切
3. 以羣注影者：　倚，騫渠蟻反　廣於蟻切
4. 以徹注透者：　涕，騫恥禮反　廣他禮切
5. 以澄注定者：　筳，騫丈丁反　廣特丁切
6. 以定注澄者：　濯，騫徒角反　廣直角切
　　鴆，騫徒蔭反　廣直禁切
　　長，騫徒良反　廣直良切
　　案以上三例，疑爲類隔之誤。
7. 以日注娘者：　女，騫而與反(2)　廣尼呂切

8. 以禪注神者：　乘，寫時升反　廣食陵切

9. 以神注禪者：　剡，寫示檢反　廣時染切

案神禪不分，與曹憲廣雅音同。

10. 以禪注穿者：　處，寫召汝反　廣昌與切

11. 以曉注于者：　緯，寫許韋反　廣于貴切

韓，寫許韋反(2)　廣雨非切

違，寫胡歸反　廣雨非切

12. 以匣注于者：　消，寫胡軌反　廣榮美切

(2)屬於韻者十有二事，爲例十有三：

1. 以脂注之者：　茲，寫音咨反　廣子之切

2. 以陽注虞者：　驅，寫丘芳反　廣豈俱切

案芳字疑誤。

3. 以庚注清者：　理，寫除京反　廣直貞切

4. 以銑注寒者：　鵰，寫徒典反　廣徒干切

5. 以尾注海者：　胍，騫芳尾反　廣普乃切？

6. 以禡注御者：　御，騫五駕反　廣牛倨切

7. 以代注隊者：　朏，騫敷愛反　廣傍佩切？

8. 以暮注鐸者：　莫，騫亡故反　廣慕各切

9. 以銑注屑者？　鴂，騫古典反　廣古穴切

10. 以齊注屑者：　結，騫音計　廣古屑切

鴂，騫古惠反　廣古穴切

11. 以馬注昔者：　釋，騫音捨　廣施隻切

12. 以盍注合者：　溘，騫苦閤反　廣口答切

（3）屬於調者五事，爲例九：

1. 以平注上者：　偃，騫於甗反（2）　廣於幰切

奄，騫於鹽反　廣衣儉切

2. 以平注去者：　化，騫虎瓜反　廣呼霸切

3. 以上注平者：　嚴，騫魚儉反　廣語韻切

4. 以去注平者：　知，寫音智　廣陟離切
　　爲，寫于僞反　廣蔗支切
　　鷲，寫烏計反　廣烏奚切
　　曼，寫亡半反　廣毋官切
5. 以上注去者：　芷，寫之視反　廣諸市切

（4）屬於協韻者四事，爲例七：

1. 以庚注唐者：　行，寫協胡剛反　廣戶庚切
2. 以姥注馬者：　下，寫協韻作戶音(3)　廣胡雅切
　　馬，寫協韻作媽音同亡古反　廣莫下切
3. 以遇注燭者：　屬，寫協韻作章喻反　廣之欲反
4. 以暮注姥者：　古，寫協韻作故音　廣公戶切

II、公孫羅音決中所云楚音者凡六則，計反切二，直音一，協韻三，皆不與廣韻音同。其推求結果，並屬韻中變化而於紐調二事則無關焉。茲舉例如次：

1. 以先注山者：　山，音決，協韻所連反，楚俗言也。　廣所閒切。

2. 以戈注禍者：　化，音決，協韻呼戈反，楚之南鄙言。　廣呼霸切。

3. 以凡注東者：　音決，楓，方凡反，心，素含反。案方凡，素含，皆楚本音非協韻，類皆倣此，而稱

4. 以覃注侵者：　協者，以他國之言耳。　廣，楓，方戎切，心，息林切。

5. 以姥注厚者：　莽，音決，協韻亡古反，楚俗言也。凡協韻者，以中國爲本，傍取四方之俗以韻，故謂之協韻，然於其本俗則是正音，非協也。　廣，莫厚切。

6. 以姥注馬者：　下，音決，楚人音戶。　廣胡雅切。

總斯二書，得證三十有九，爲例五十有七，除下字音戶爲二書所同者外，得證三十有八。其間紐調變化，尙無大端，縱有異音，猶可推擬。惟韻中嬗遷，實難妄測，徵之音理，殊未可通，竊擬俟之暇日，再爲考訂，以求其嬗變之迹，蛻化之由。茲則以時間所限，姑舉梗概，以見凡略焉。

二十九年一月十二日夕，脫稿。

按此篇爲輔仁大學語文學會講稿。當日以時間匆遽，考訂殊有未精，後當改正。茲特附白。

閒話甲骨文

鄭嘉弗

一八九八年與九年之交，就是庚子八國聯軍入京的頭一年，中國近代史上發生了一件頂重大的事體，便是在河南省安陽縣西北五里的小屯，農民在安陽河畔耕種的時候，在黃土層下掘發了無數的龜甲獸骨的破片。骨片上多刻着極原始的文字，文字的內容是三四千年前殷代王室占卜的紀錄。

這件至可珍貴的古物的發現，就這樣完全是出於偶然；在以前或已屢有發現而不爲人所注意；但到庚子前一二年的那一次才爲人們注意了。注意到的是山東濰縣一位姓范的骨董商人。（羅振玉云「龜甲獸骨濰縣范姓估人始得之。亡君劉君鐵雲問所自出，則詭言得之湯陰。予訪之數年，始知實出洹濱」——見「五十日夢痕錄」）這位商人視以爲奇貨可居，便運往北京市場。起初似亦不甚爲人所注意，後來才爲當時的顯貴福山王懿榮所購買，

王氏蒐集已到千片以上。庚子之變王氏死難，他的所藏盡爲丹徒劉鶚（鐵雲）所有。劉氏蒐集不久已到了三四千片以上。

一九〇三年上虞羅振玉在劉氏處始得龜骨，慫恿劉氏選拓其千餘片印爲鐵雲藏龜一書以問於世，這是甲骨文

字著錄之始，也是羅氏與甲骨文字發生關係之濫觴。

羅氏自一九〇六年也開始蒐集，起初僅由商人手中間接購買，繼後於一九〇九年由范某口中得知甲骨之出土處爲安陽小屯又才先後命其弟戚前往直接採採。（據殷虛古器物圖錄序）在一九一一年前後，他的蒐集竟至兩三萬片以上。

羅氏蒐集既富，而於文字之推廣流布亦不遺餘力。其前後所拓印行世之書有下列數種：

1. 殷虛書契前編八卷　1913年
2. 殷虛書契菁華一卷　1914年
3. 鐵雲藏龜之餘一卷　1915年
4. 殷虛書契後編二卷　1916年

這些書都是研究甲骨文字最必要的典籍。菁華一種乃原片影印，無緣與甲骨接觸的人亦可以得見其原形，餘三種均拓片影印，將來如有學術團體能於小屯舉行科學的大規模的發掘，則古器物之出土必且更豐富而可信賴，而地層之研究，人體之研究，如有宮址或墓址存在時則古代建築之研究與營葬習慣之研究等等必更能有益於學術的記述。然而這種事件一時恐怕還不能到來，我們目前也就只好把羅氏的介紹來做唯一的根據了。

羅氏日記中於同日之後附有劉鐵雲略傳一段曰：「予之知有殷虛文字實因丹徒劉君鐵雲，鐵雲振奇人也，後

流新疆以死。此人精於數學曾從事治河事業，後復主張修造津鎮鐵路，又與當時巡撫策畫，借外債開掘山西鐵礦，因而被人詆爲漢奸。

「庚子之亂，剛毅奏君通洋，請明正典刑，以在滬上幸免……聯軍入成都，兩宮西幸，都人苦饑，道殣相望，君乃挾資入國門，委振卹。適太倉爲俄軍所據，歐人不食米，君請於俄軍，以賤價盡得之，糶諸民，民賴以安……而數年後，柄臣某（？）乃以私售倉粟罪君，致流新疆死矣。」

此事可以約略影射出甲骨出土時的中國情形。這位甲骨蒐藏家一流竄致死之後，他所有甲骨也和他的命運一樣向世間飛散，有一部分爲上海哈同所得，後來王國維爲他編印了「戩壽堂所藏殷虛文字」一卷（1917）此書編者的名譽爲稽某所盜，然據王國維全集觀堂別集中「隨庵所藏殷虛文字跋」，王氏自云「丙辰（1917）冬鐵雲所藏一部歸英人哈同君，余爲編次考釋之。」

又其一部則流入日本，彼邦林泰輔博士匯集諸家所有於一九一七年亦編印「龜甲獸骨文字」二卷。博士死後其所藏之五百片現歸「東洋文庫。」

最近丹徒葉玉森復編印「鐵雲藏龜拾遺」一卷（1928年）行世。據其序云「今年（乙丑）春聞先生（劉鐵雲）所藏家不能保……爰得收其一千三百版。乃就其「藏龜」及藏龜之餘未著者選集二百四十版。以上大抵乃甲骨之出土，蒐藏，流布之歷史，羅氏於遊小屯以後復編集其所蒐集之殷虛遺物爲「殷虛古器物圖錄」一卷附說一

卷（1916年）（原物珂羅版印），爲器共五十五種，其內容大抵如上日記中所述，此爲研究甲骨者所不可不讀此書，中國人研究古物的嗜談文字而不知考古，卽今人之研究甲骨者亦忽視此書，甚爲怪異。

最初發現甲骨的因爲是濰縣的商人又因甲骨出土後不久卽遭庚子之變，我們是揣想得到的是這商人在北京的生意做不通，所以甲骨有一部分便搬回了濰縣。當時濰縣的牧師有高林（Samuel Couling）查爾芳（F. H. Chalfant）兩人便得了這一部分。這一部分現在聽說保存是在下列的幾個地方；

Carnegie Museum, Pittsbourgh; Royal Scottish Museum, Edingburgh;

British Museum, London; The Field Museum, Chicago, etc.（據"Royal Asiatic Journal" XLV.65, "Oracle-bones from Honan" by S. Couling.）

這大約就是歐美人和甲骨發生關係的開始。據高林自己在「河南所出之奇骨」（Oracle-bones From Honan）一文中說，他前後到中國來專門採辦過甲骨及其他器物三次，採辦回去卽分賣各地的博物館。然據余所見該文中所插入之圖版，所有骨片玉器等刻有甲骨文字者，均係估大所仿刻。羅振玉在「古物器圖錄」，的附說上說「殷虛所出之骨鏃頗不少」，土人得之往往仿龜甲文字刻畫其上，以詒歐美人之訪古中州者，這話完全是實事。

歐美人的甲骨蒐藏家中還有荷普金斯（L. C. Hopkins）明義士子宜（James Mellon Merzies 自稱之漢名）。荷普金斯的蒐集大約多由高林替他幫忙，我看見他著的一篇文字「骨上所彫之一首葬歌與一家系圖」（"A Fu-

nerai Elegy and a Family Tree Inscribed On Bone" — J. R. A. S. ect 1912)，那所根據的材料完全是僞刻。

明義士是住彰德府的牧師，據他「盧殷卜辭」(Oracle Records from the Waste of Yin) 1917 的序上說他在甲寅年(1914年)的春天，正在栽種棉花的時候，他無心之間騎馬去訪問小屯。無心之間又由小屯的居民買到「龍骨」(Dragon Bones)，便是有文字的甲骨了。此人頗以發現殷虛之第一人自負。

與羅氏雁行爲海甯王國維，王氏於一九一七年有「戩壽堂所藏殷墟文字考釋」一卷，又有「續考」一卷；於一九二二年著「殷人辭中所見先公先王考」一卷，又有「續考」一卷(觀堂集林卷九史林一，今收入全集第一輯)，又有「殷周制度論」(集林卷十)。此爲對於卜辭作綜合比較的研究之始。卜辭時代的特性得以確定，殷代之史實性亦得以確定，大約中國的歷史的時期便是由殷代開幕了。

王氏之學卽以甲骨文字之研究爲其主要的骨幹，除上所列四種之外，其他說禮制說都邑說文字之零作更散見於全集中。謂中國之舊學自甲骨之出而另闢一新紀元，決非過論。言「整理國故」言「批評國故」而不知甲骨文字之學者，盲人摩象者之流亞而已。

關於考釋之類輯，羅氏弟子有商承祚者於一九二三年著有「殷虛文字類編」十四卷，就文字之已編者依「說文解字」部彙分別出之，每字廣搜各種異形，一字有至四十五種書法者(如羊字)，最便於初學者之檢閱，且讀此書者，卽未親睹甲骨，及其影拓諸書，開卷卽可得以觀念，便是殷虛時代中國文字尙在創造的途中。文字

多是純粹的圖畫，依許氏「依類象形謂之文，形聲相益謂之字」其已成字亦繁簡順逆反正屈伸析合上下左右全無一定。此於由羅氏所蒐集之古器物中所得來的殷代爲金石併用時代之結論，適相契合。大抵殷虛文，字之單字約在兩千以上，據類編通檢云；「都凡七百八十九字，待問編字數略同。」

「殷虛書契待問編」一卷亦爲羅氏所集，成於一九一六年，全係骨文中未可識者。其中之字後經諸家考定者，已入類編，商氏襲其師之意又別有待問編十二卷，附於類編。此亦考釋文字者之一良好案引書（惜所採集尙未甚完備）

大抵甲骨文字之學以羅王二氏爲兩大宗師，在羅王之前瑞安縣孫詒讓有「契文舉例」一卷。其書成於一九〇四年，未行於世。一九一三年王國維始於上海發現其原稿，今收入羅氏所刊行之「吉石庵叢書」第三集中。孫氏雖大家，然所獲甚微末，羅王之外有天津王襄丹徒葉玉森諸人，亦僅書之精良爲中國從來典籍所未有。

羅氏在中國要算是近世考古學的一位先驅者，他的蒐藏與從來骨董家的習尙稍有區別，他不僅有文字的骨片，他還注意到去蒐集與骨片同時出土之各種器物，在一九一六年他還親自到安陽小屯去探詢過一次。這種熱心，這種識見，可以說從來好古家所未有。羅氏去訪小屯時的情形，在他著的五十日夢痕錄（雪堂叢刊之一）中有一段的日記，我現在把牠抄錄在下面；

「（三月）三十日（案乃陰曆）已刻抵彰德，寓人和昌棧，亟進餐。賃車至小屯。其他在郡城之西北五里，

東西北三面洹水環焉，彰德府志以此爲河亶甲城。宋人考古圖載禮器之出於河亶甲城者不少，殆卽此處。近十餘年間龜甲獸骨悉出於此。詢之土人「出甲骨之地約四十餘畝。因往履其地，則甲骨無字者田中纍纍皆是」拾得古獸骨一，甲骨盈數筐。其地稱麥及棉，鄉人每以刈棉後從事發掘，其穴深有二丈許，掘後卽塡之，復種植焉。所發見之物，甲骨以外蜃殼至多，而甲骨等，往歲所未知也。古獸角亦至多，其角非今世所有。……往歲曾於此得石磬三，與周官考工所言形狀頗不相同。爾雅釋樂大磬謂之磬。郭注「磬形似犂錧。」今殷虛所出頗與犂錧狀相似，意殷周磬制不同。郭注云似犂錧者意是舊說乃殷周制與考工所記異，考工所記則與犂錧異狀矣。（沫若案三器影片載殷虛古器物圖錄中，日本石濱博士以爲乃石庖刀，余謂當卽石犂，非必古磬也）……予舊所得又有骨鏃，有象七骨七，有象揥有骨簡，有石斧石刀。其天生之物有象牙，有象齒。今求之亦罕見。然得貝璧一，其材已蜃殼爲之雕文與古玉蒲璧同，惜已碎矣。爲往昔所未見，獲此奇品，此行爲不虛矣。予久欲撰「殷虛遺物圖錄，」今又得此。歸後當努力成之。」

這在甲骨文字的研究上實爲極重要文字，蓋和甲骨同時出土的古器物，只是石器，骨器，銅器（古器物圖錄中有一彝器斷耳）而決無鐵器的存在。這正證明殷代當年還是金石並用時代，離石器時代並不甚遠。本來羅氏所記實不過是粗枝大葉之觀察，高林亦頗以甲骨之發現者自居，然實事上小屯之得以考證爲「洹水南之殷虛」（見項羽本記）是羅振玉氏，而甲骨之第一發現者則當爲濰縣之范商，更廣義的說則當爲小屯的農民。第一第

二之爭，殊覺是無聊的意氣，明義士的駐地大約和小屯接近的關係，他的蒐集據說有五六千片，就他所編印的「殷虛卜辭」看來那兒已有1369片由文字與內容徵考之，大率可靠。但這書是出於摹錄而非拓印。

僞片之傳播者在中國則當推天津王襄的「簠室殷契徵文」一書（191），此書所列，幾於片片可疑，在未見其原品以前，作者實不敢妄事徵引。

甲骨自出土後其蒐集保存傳播之功，羅氏實居第一，而考釋之功亦深賴羅氏。羅氏於一九一〇年有「殷夏貞卜文字考」一卷，此書僅屬椎輪。一九一五年有「殷虛書契考釋」一卷（後增訂本改爲三卷），則使甲骨文字之學蔚然成一巨觀。談甲骨者固不能不權輿於此，卽談中國古學亦不能不權輿於此。

王國維說；「書契文字之學自孫比部（卽貽讓）而羅參事（羅振玉）而余（王氏自謂）所得發明者不過十之二三，而文字之外若人名，地理：禮制有待於考究者尤多」（見「類編」首卷序）。辭雖不免稍稍出於撝謙，然也是此學的實在情形。

以上乃甲骨出土以後一般研究的情形，甲骨的研究，恐此後亦未有涯矣。中國的學者特別是研究古文學的一流的人物，素少科學的修養，所以恃此絕好史料，止是零碎地發揮出好事家的趣味。而不能有系統的科學的把握，羅王二氏其傑出者，然如「山川效靈，天啓其衷」的神話時不免流露於筆端。在這種封建觀念之下所整理出來的成品，自然是很難望我們滿足的。

我們現在也一樣的來研究甲骨，一樣的來研究卜辭，但我們的目標，却稍稍有點區別，我們要從古物中去觀察古代眞實的情形狀況燦然如在目前。得見甲骨文字之後，詩書易中的各種社會的機構和意識，才得到了他們的源泉，其爲後人所粉飾或僞托者，皆如撥雲霧而見青天。我認定古物學的研究在我們也是必要的一種課程，所以我現在卽就諸家所已拓印之卜辭，以新興科學的觀點來研究中國社會的古代。

本篇之結構分二論：

本論一、　社會基礎的生產狀況

本論二、　上層建築的社會組織

本篇所引用各種研究材料之略符

1. 鐵……鐵雲藏龜不分卷
2. 前……殷虛書契前編八卷
3. 後……殷虛書契後編上下二卷
4. 菁……殷虛書契菁華一卷
5. 戩……戩壽堂所藏殷虛文字一卷
6. 餘……鐵雲藏龜之餘一卷

7. 遺……鐵雲藏龜拾遺一卷

8. 林……林泰輔編龜甲獸骨文字二卷

9. 明義士編殷虛卜辭一冊

本篇重要之參考書籍：

1. 增訂殷虛書契考釋三卷

2. 戩壽堂所藏殷虛文字考釋一卷

3. 海寧王忠懿公（國維）遺書全集

4. 殷虛文字類編十四卷

5. 殷虛古器物圖錄一卷附說一卷

6. 殷虛文存上下二卷（羅振玉編）

此外所引各書當隨文附見不具列。

（二）甲骨文的發現

一、出土之時地及首先發見之人，皆可得而考也——西紀一八九九年（清光緒二十五年）王懿榮得若干枚於估人之手，珍祕不以示人，明年王卒遺物歸劉鶚，又明年羅叔蘊爲選千餘枚，柘墨而編印之，名曰鐵雲藏龜，

世之知有甲骨刻辭，自此書始。其地爲安陽縣西北五里之小屯，當洹水之南，羅氏據史記項羽本紀，定其地爲殷墟是也。出甲骨之地，周圍僅四十餘畝，種麥及棉，鄉人每於刈棉後，發掘，穴深者二丈許，掘後復塡之，所出甲骨之外，有齒牙骨角珧貝等材，或其製成之器物，意其地爲昔之府藏，史官之所典守，而今淪爲丘墟也。

二、實物之情狀，及其用途，可由目驗而得也——龜甲皆用腹甲無用上甲者，獸骨則爲脛骨與肩膊，皆部而用之，故亦如龜甲之有表裏。其卜法先鑿穴於甲骨之裏，而不使穿，或不鑿而鑽，或鑽而復鑿，鑿穴爲橢圓，鑽穴爲正圓、此卽詩大雅綿「爰契我龜」之「契」也。旣契，乃於其契處灼之，則兆見表，其兆一縱一橫如「卜」字，說文（卜部）「卜一曰象龜兆之縱橫」是也，或疑卜用獸骨，古籍無徵，羅氏考釋中已引宋史西夏傳，及徐霆之黑韃事略以證之。然論衡（卜筮篇）已有「猪肩羊膊可以得兆」之語，則骨卜亦非必無之事，且商代信鬼，一日數卜，龜甲不足，輔之以獸骨，亦屬事理之常，今驗之實物，凡以龜甲卜者皆屬祭祀，其他事則用獸骨——如脛骨皆爲田獵之事，肩膊多爲征伐等事——知用甲用骨，亦各有其事之宜也。

三、數量之多，刻畫之精，體例之不紊，作僞者有所不能也——世之作僞者，或爲名或爲利，不惜以窮年累月之功，造成一器，刻成一石，冀遂其欲，然大抵勞刀少，而獲報多，而後其僞始値得一作。今之甲骨則不然，最初之發見也，土人呼之爲「龍骨」以之敷刀創，止血有奇效（見地學雜誌第二年十七號武龍章安陽洹上之

特產及發見物，）初不過以藥品視之，後知其有文字，而收之。每枚亦僅售一二錢，王懿榮之所得，不過數千枚，羅叔蘊繼之以購求，其數乃至數萬，其他散見各藏家者，尙不計其數。若果爲作僞，吾不知其用心何居，更何從得如許之敗甲朽骨以鐫刻而又掩埋之也，此不能僞者一也。

鐫刻事，質堅則易工，若已腐朽鬆脆，則無從求其工矣。今所見刻辭有字小如黍，畫細如髮者，刀痕深入，字口光澤，其爲未腐朽鬆以前之所刻，可斷言也。試觀近年僞品，取原有無字甲骨集字模刻者，刀痕粗淺，字口不齊，其明證也，此不能僞之二也。

甲骨所載既爲貞卜之辭，則當時記載自必有其體例，不容紊亂，今觀其刻辭，每枚或容數篇，每篇多不過十餘言，而體例謹嚴，斠若畫一，如

甲、商人之名用十干，而卜祀之日，必各依其祖考之名。

乙、人名之書法，多爲二字合文，如金文中「祖辛」（作祖辛敦）「妣戊」（作戊辰彝）之例。

丙、凡稱所祭之祖曰「王賓」所祭之妣曰「爽」

丁、年月日具載者，必先日次月次年，如曰「癸未」……在四月隹王二祀」（殷墟書契卷三、第二十七頁）與商器之戊辰彝，餘尊，庚申父丁角之例同。

戊，凡有「勹」之辭，必爲癸日，王靜安釋爲「旬」字，以每旬之末日卜來旬之事也。

己，凡數簋同在一脛骨者，則先刻之辭，必自下始，以日排比，如積薪之後來居上，例雖不止此，而卽此數端，已可概見，此不能僞者三也。

在此二十餘年之中，經多數學者之研究已略能通其讀，其于學術上有絕大之供獻者，約有二端，一曰文字，二曰史蹟。

（一）文字　中國學術首受甲骨學的影響的，是「文字學」，這方面又可分爲二：一爲文字學上之原則研究，一爲文字本身之字原研究。滿清乾嘉時候，是考證學（亦名漢學）最發達的時代；考證學以文字學爲基礎的學問；但當時他們所提倡的文字學是以東漢許愼的說文解字一書爲正宗。據說文，中國文字的產生和變遷是這樣的：黃帝的史官倉頡，初造文字；周宣王大史籀作大篆；大篆以前的文字，都叫做古文；到了秦始皇時候，因爲要統一六國的文字語言，於是命李斯，趙高，胡毋敬作小篆。照這樣說，中國文字好像非常有系統似地由古文而大篆而小篆，幷且好像每種字體都有一定的型體。但這樣的文字發達史是很可懷疑的，自金文學者出，根據古代的鐘鼎彝器的款識來訂正說文，於是許愼的權威才漸漸搖動。同時，經學今文派崛起、立場於今文學的見地，根本反對古文學的附庸的文字學的研究、於是許愼的學說更受影響，當甲骨沒有出土以前、中國文學界的分野可晰爲「宗許」、「訂許」「反許」三大派。自甲骨發現之後，却給訂許派，以絕大的助力。原來甲骨是殷商的遺物，它比較眞僞雜糅，先後不齊的金文爲信而有徵。根據甲骨文字的研究而加以推測，我們很顯明

的可以知道；中國古代文字的變遷是時時刻刻的在漸變，而不是如許氏所說的由古文而大篆由大篆而小篆的在突變。又甲骨文字的形體，繁簡任意、配置無定，每每一字有十多異體，可見文字是社會的產物，而不是個人的創作；可見倉頡，史籀，李斯創製的話也都屬於傳說而不是信史。這些都是對於研究文字學的原則上有異常重要的關係的。

中國文字之字原的研究，從前也多以說文爲依歸，好像說文是文字學中的不可干犯的聖經似的。自甲骨文字出，於是字原的解釋獲得異常可信的史料，而說文的誤說曲解也得一一矯正。甲骨學的成績以這方面爲最多而最著；現在姑舉「射」「爲」兩字以作例證。

（一）射（躬）

說文卷五矢部，「躬弓弩發于身而中於遠也。从矢。从身。射篆文躬，从寸；寸，法度也，亦手也。」

照說文的解釋，射字在六書爲「會意就是古文的躬字从矢从身會意，篆文的射字从身从寸會意，但是這解釋完全是錯誤的，因爲說文所根據的古文和小篆都是後起的誤字。

據甲骨文字，射字作張弓注矢的形狀，是一個圖畫字（Picturegram）；按後起的六書的名稱，是屬「象形」其字作[illegible]等形。

根據甲骨推求說文的錯誤：說文所謂「从身」乃是由弓形而誤；所謂「从寸」乃是由手形（可以說从又）而

誤；而所謂「从矢」雖大體不算錯，但仍將橫矢誤爲直矢。（詳可參考丁福保說文詁林頁二二五三——二二五五）

（二）爲

說文卷三爪部，「爲，母猴也。其爲禽好爪。下腹爲母猴形。……」

段玉裁說文注加以校正，說；「腹當爲復。上既从爪矣，其下又全象母猴頭目身足形也。……」

照說文的解釋，爲字，上从爪，下象母猴，按六書的類屬，是一個「合體象形」字。但是這解釋也是完全錯誤的，因爲它所根據的篆文也是後起的誤字。

據甲骨文字，爲字作以手牽象的形狀，也是一個圖畫字；在「六書」中，是「象形」中的「純象形」而不是「合體象形。」其字作[illegible]等形。

根據甲骨文字，我們可以推知中國古代役象助勞或在服牛乘馬之前。古代傳說，舜用象耕田。呂氏春秋古樂篇說：「殷人服象，爲虐於東夷，周公以師逐之，至於江南，」羅振玉殷墟書契考釋也說：「今殷墟遺物有鏤象牙禮器。又有象齒甚多。卜用之骨有絕大者，殆亦象骨。又卜辭卜田獵有獲象之語。「則殷人或者是用象工作的民族，所以「爲」字給用手牽象工作的形狀，而訓爲「作爲」，到了後來，役象的事漸少，所以韓非子有「人希見生象，案其圖以想其生」的話，說文也有「象爲越南大獸」的話：而「爲」字無法解釋，遂誤謂象母

猴形了。其實母猴和作爲有什麼意義上的關聯呢？（詳可參考丁福保說文詁林頁一二一〇——一二一二）這爲字不僅有關於文字學，而且和中國古生物學也有關聯了。）

（二）史蹟　孔子言夏殷之禮，已有文獻不足之歎，遑論今日，今之所謂殷代史蹟者，惟尙書中七篇及史記之殷本紀三代世表，舍此以外、其材蓋鮮矣。甲骨所紀，雖不皆史事，而由此可以考見殷代之制度典禮者，正復不少、今據其可確定者言之：

（甲）地理：羅叔蘊云：商之遷都，前八後五，盤庚以前，且見書序，而小辛以降，衆說多違，洹水故墟，舊稱亶甲、今證之卜辭，則是徙于武乙，去于帝乙，又史稱盤庚以後，商改稱殷，而徧搜卜辭，旣不見殷字，又屢言入商，田遊所至，日出日往，商獨言入商，可知文丁帝乙之世，雖居河北，國尙號商，（見書契考釋序）又凡紀田遊者，多書地名，雖不能定爲後世何地，而稽其時日，往往自一二日至五六日，因此知殷墟與各地之距離，大抵不甚相遠，或在大河南北數百里之內，此都邑及其他地理之可考者也。

（乙）世系　商之君數世數，見于史紀殷本紀，三代世表及漢書古今人表或同或異，王靜安就甲骨中所見者，詳爲攷訂，著殷卜辭中所見先公先王考及續考，因祀禮中之特祭其所自出之先王者，以得其世次，知諸書所紀，以殷本紀爲近，又由是以知商之繼統法，以弟及爲主，而以子繼輔之，無弟，然後傳子，其傳子者，亦多傳弟之子，而罕傳兄之子，兄弟之未立而殂者，其祀之也，與已立者同，（見殷卜辭所見先公先王考）此世系之

可考者也。

（丙）祀禮　商之祀禮，與周大異，其祭名可知者：曰宗曰禘曰烝曰肜日曰肜月曰㚔曰𠂤曰祭曰肉曰鼎曰𦎫曰叔曰酒曰㪤曰品曰衣，或爲專祭，或爲合祭，其祭日及牢鬯之數，一皆以卜定之，此祭祀之禮之可考者也。

（丁）卜事　祭祀之事，既用卜矣，其餘如征伐田漁及祈年祈風雨等事，幾無不用卜，此殷人尙鬼之說之有徵也，由此數端觀之，或史多違語，賴此以得確說者有之，或史有闕略，賴此而有所創獲者有之，王靜安取其材以作殷周制度論，認爲古代政治與文物，殷周之間，實爲一大關鍵，是誠歷史上極大發明也。

江南史地學會規約

第一條　本會ハ江南史地學會ト稱ス

第二條　本會ハ日華兩國史地學同好者ノ協力ニ依リ華中一帶ノ地理歷史ノ調査研究ヲナスヲ以テ目的トス

第三條　本會ノ事務所ハ南京ニ置ク

第四條　本會ハ日華兩國ノ史地學同好者ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條　本會會員ハ普通會員名譽會員ノ二種ニ分ツ

第六條　普通會員ハ會員ノ紹介ニ依リ入會シ、入會費五圓、月會費一圓ヲ納ムルモノトス

第七條　名譽會員ハ本會ノ趣旨ニ贊同シ本會ノ事業ヲ援助スルモノトス

第八條　本會ニ會長一名、副會長二名ヲ置ク

第九條　本會ニ幹事若干名ヲ置キ、會員中ヨリ之ヲ互選ス

第十條　本會ハ左ノ諸事業ヲ行フ

一、華中一帶ノ地理歷史ノ調査研究

二、研究發表會、講演會、座談會ノ開催

三、機關誌及ビ叢書ノ刊行

例會記錄

▲第一回例會

昭和十六年三月十六日午後二時
於　鷄　鳴　寺

一、開會ノ挨拶、設立經過報告（田中忠夫氏）
二、規約決定
三、役員選任（會長江亢虎氏、副會長田中忠夫氏、王鍾麒氏）
四、講演
　1. 我國地理學の現狀（王鍾麒氏）
　2. 鷄鳴寺史話（田中忠夫氏）
　3. 王氏の講演に關する補遺（張資平氏）

出席者（敬稱略、順序不同）

田中忠夫、王鍾麒、張資平、米右白、森川光郎、山田清、栗本弘、谷田悅次、倉光卯平、中澤富美雄、劉敏君、米澤秀夫、孫振、中山四郎、小島友于、高塚太吉、太田峯雄、堂山龜松、小川平二

▲第二回例會

昭和十六年五月十一日午後二時
於考試院　水民雙藍之軒

講演

一、中國文學の南北宗派論（朱右白氏）

二、日本に於ける六朝文學の影響（今關天彭氏）

出席者（敬稱略、順序不同）

田中忠夫、森川光郎、中山四郎、米澤秀夫、深澤泉、太田峯雄、山田清、小島友于、松村雄藏、孫振、中澤富美雄、倉光卯平、江亢虎（代理）、程清、今關天彭、朱右白

▲第三回例會

昭和十六年十二月十四日午後二時
於中日文化協會

講演

一、會長挨拶（江亢虎氏）
二、揚子江論（沖野亦男氏）
三、上海の歴史（米澤秀夫氏）

出席者（敬稱略、順序不同）

江亢虎、沖野亦男、田中忠夫、張資平、森川光郎、程清、今關天彭、黑木典雄、日高貞子、小島友子、山上勝男、太田峯雄、米澤秀夫

▲第四回例會

昭和十七年一月二十五日午後二時
於水利委員會瞻園

講演

一、語源より見たる日支關係（田中忠夫氏）
二、吳越考古（顧天錫氏）
三、瞻園の由來（諸青來氏）

出席者（敬稱略、順序不同）

諸青來、田中忠夫、張資平、朱右白、顧天錫、今關天彭、廖廉能、下村非文、山本俊人、井上審、日高貞子、

井上良平、由上勝男、横山三男、森川光郎、米澤秀夫

▲第五回例會

昭和十七年四月五日午後三時
於玄武湖　中華留日同學會

講演

一、近代方言の地理的分布（劉思生氏）

二、南京天文史話（森川光郎氏）

出席者（敬稱略、順序不同）

江元虎、今關天彭、田中忠夫、米澤秀夫、太田榮雄、楠瀨龍雄、横山三男、由上勝男、劉思生、下村非文、井上審、森川光郎、小島友于

▲第六回例會

昭和十七年五月十四日午後六時
於中日文化協會

講演

一、歷史學の新動向（田中忠夫氏）

二、客家語の發音（張資平氏）

出席者（敬稱略、順序不同）

田中忠夫、廖廉能、程清、張次溪、朱右白、孫振、張資平、米澤秀夫、森川光郎、下村非文、櫻井高量、楠瀨龍雄、横山三男、由上勝男

江南史地學會會員名簿（順序不同）

名譽會員

梁鴻志	監察院長
褚民誼	外交部長
陳　羣	內政部長
諸青來	立法院副院長
高冠吾	安徽省政府主席
趙正平	上海大學學長
船津辰一郎	全國經濟委員會顧問
今關壽麿	文物保管委員會圖書專門委員會顧問
藍雲屏	立法院立法委員
廖康能	同上
程　淸	考試院考選委員
吳凱聲	駐意大使

陳　柱　文物保管委員會博物專門委員會主任委員

葉先圻　文官處文書局長

會長

江亢虎　考試院長

副會長

王鍾麒　中央政治委員會教育專門委員會委員

田中忠夫　總軍第四號

在南京會員

趙詠白　立法院立法委員

張資平　文物保管委員會研究部

朱右白　中央大學教授

孫　振　同上

許遜公　華興商業銀行副總經理

劉思生　中央大學教授

鄭嘉弗　南京洪武路一一五宮子經宅轉交

中山四郎	華北交通公司南京駐在員事務所長
森川光郎（幹事）	文物保管委員會天文氣象委員會委員
孟　梓	實業部
楊鴻烈	宣傳部宣傳事業司長
佐藤大雄	多摩部隊
下村利雄	臺灣銀行南京出張所長
沖野亦男	海軍武官府
井上良平	太平洋行主
中馬靖友	華中鑛業公司南京出張所長
湯孤芳	水利委員會祕書
張千里（幹事）	中日文化協會學術組主任
太河內孝	國立模範女子中學教諭
堂山龜松	西亞洋行主
谷田悅次	文物保管委員會博物專門委員會委員
中澤富美雄	大陸新報南京支社

野間清	南滿洲鐵道會社南京支所長
小島友于	南滿洲鐵道會社南京支所
星野隆一	多摩部隊
中村實平	同上
山上勝男	日刊工業新聞社南京支局長
深澤泉	國立師範學校教諭
太田峯雄	國立模範中學教諭
山本俊人	華中電氣通信公司南京營業所長
間庭朝興	華中鐵道公司浦口發電所
龍沐勛	中央大學教授
福崎峯太郎	文物保管委員會圖書專門委員會委員
高塚太吉	華中鑛業公司馬鞍山鑛業所
王修	監察院審計部次長
井上審	南京日本高等女學校教諭
張次溪（幹事）	監察院秘書

顧天錫　文物保管委員會

楠瀨龍雄　華中運輸公司南京支店

藤田秀雄　中央報業經理處

在上海會員

袁厚之　市政府財政局長

王長春　上海輪渡公司社長

松村雄藏　興亞院華中連絡部文化局文化班長

藤井靜宣　東本願寺上海別院輪番

鈴木當之　上海第二日本高等女學校教頭

沖田一　上海日本女子商業學校教頭

蘆澤駿之助　蘆澤印刷所

內山完造（幹事）　內山書店主

島津長次郎　金風社社長

山田清　上海日本總領事館

喜多庄次　上海市政府財政局連絡官

影山巍	上海寶昌路復興郵四一號
日高清磨瑳	大陸新報社華文局長
兒島博	大陸新報社主筆
山崎九市	上海信託會社常務取締役
速水頌一郎	上海自然科學研究所
東中秀雄	同上
今井湊	同上
横山三男	華北石炭販賣公司上海出張所
坂田敏雄	坂田齒科醫院院長
茂木一郎	華中鹽業公司監查役
米澤秀夫（幹事）	中支那振興會社調查部資料室主事

在蘇州會員

徐徵	國立蘇州圖書館長
章欽亮	中日文化協會蘇州分會理事
松崎武雄	同盟通信社蘇州支局長

國立北京圖書館藏

昭和十七年九月三十日印刷
昭和十七年十月一日發行

江南史地叢考第一輯
定價金貳円

編輯兼發行人　南京成賢村　森川光郎

印刷人　上海大連灣路一三〇號　向島雄吉

印刷所　上海大連灣路一三〇號　華中印書局

販賣所　上海北四川路底內山書店
　　南京成賢村

發行所　江南史地學會
　　上海東熙華德路汾安坊二六
　　江南史地學會上海分會

#6
409929